

悠遊 第九号

悠
遊

第九号



企業OBペンクラブ

平成十四年三月二十日

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第九号

二〇〇二年三月二十日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ「悠遊」刊行委員会

代表 北田 純一

印刷所 株式会社毎日整備産業

東京都千代田区二ツ橋一―一―

TEL 〇三―三二一六―五四八九

連絡先 企業OBペンクラブ事務局 中村 爽

茅ヶ崎市高田三二二二一(〒二五三〇〇〇二)

TEL 〇四六七―五四―八四〇九

口座 第一勧業銀行丸の内支店 企業OBペンクラブ
(普通 1633830)

頒 価 一、〇〇〇円

表紙の絵 アウレリウス帝騎馬像

ローマ五賢帝時代の最後を飾るのがアウレリウス帝(一六一―一八〇)で、この騎馬像はカンピドリー広場の中央に置かれていた。皇帝在位の十九年間は異民族の侵略に対する戦いに費やしたが、その間に執筆した「自省録」は後世の座右の書となった。勇壮で力強い馬は皇帝の精神を表すと共に、武器も鎧も着けない超脱の姿は地上に平和をもたらすことを強調している。その精神を少しでも汲み取っていただければ幸いである。

(新井記)

企業OBペンクラブ同人誌

《第九号》

目次

Ⅱ 特集・構造改革Ⅱ

- ◇ 構造改革・My Way…………… 西川 武彦 4
- ◇ 私の構造改革…………… 岩崎洋一郎 6
- ◇ 何を捨て何を得るのか―私自身の構造改革―…………… 上原 利夫 8
- ◇ ソクラテスよ今日は…………… 松浦 武弘 11
- ◇ 我が人生の構造改革…………… 黒崎 昭二 13
- ◇ 教育制度の構造改革私案…………… 折戸 常司 15
- ◇ 母校が消える?…………… 今村 亮 18
- ◇ 小さくとも輝く大学―大学改革のモデル・ケースとして―…………… 櫻井 清治 21
- ◇ 同窓会が怖い… サラリーマンの意識改革…………… 森田 茂 23
- ◇ 構造改革散策…………… 杉浦 右藏 25
- ◇ 構造改革についての提言…………… 亀井 弘次 27
- ◇ 変わるべきもの―ミレニアム二年目の思い…………… 岡 政昭 28
- ◇ 構造改革… 新春横町異聞奇聞…………… 古井米三郎 31
- ◇ 構造改革と日本経済…………… 新井 進 33
- ◇ 内なる構造改革…………… 多田 修 36
- ◇ カジノ解禁による抜本的な対策を…………… 竹内 京一 38
- ◇ 右肩下がりの構造改革…………… 北田 純一 40
- ◇ 日本の企業の構造改革…………… 許斐 義信 43
- ◇ 飛び出す蛙、ゆで上がる蛙…………… 児玉 忠雄 45
- ◇ 思考のパラダイム…………… 金京 法一 47
- ◇ 認識の構造転換…………… 八木 大介 49
- ◇ 喜ばしい政治家の意識改革…………… 大野 晃 51
- ◇ 構造改革よりもリセットを…………… 村田孝四郎 54
- ◇ 江戸の世も今も変わらぬもの…………… 本田 克夫 56
- ◇ 多様なヨーロッパの大転換…………… 今川 確郎 58
- ◇ 日本の発展をさらに維持しよう…………… 刀祢館正久 61
- ◇ ピアスの穴あけます…………… 石川 正達 63

Ⅱ 自由テーマⅡ

- ◇ 耳が遠くなってきた…………… 榎本喜三郎 66
- ◇ 猫の通夜…………… 岸本 義生 68
- ◇ がんとのたたかい…………… 野村 嘉彦 70
- ◇ 蘭州から敦煌…………… 吉寄 清巳 72
- ◇ 聖林寺十一面観音 …… 六十年ぶりの再会…………… 遠藤 俊也 74
- ◇ 「プロジェクトX」と「スーパーテレビ」…………… 大塚 滋 77

西川 武彦

八ヶ岳山麓で初滑りしてあわよくばホワイトクリスマス。翌朝、別宅の大掃除を済ませて帰京し、年賀状にペンを走らせる。それが終われば本宅の大掃除……。こんな年の瀬が、新しいミレニアムの到来で十年続いたことになります。都会と田園を棲み分けるライフスタイルを創る、これが我が人生の大きな構造改革といえましよう。

受験時代が始まる頃、原因不明の腰痛で半年近く寝たり起きたりの日々が続き、それもあって大学が一年遅れた以外は、志望した会社に入り、志望した部署で働き、結婚して子宝に恵まれ、マイホームも出来た。まずは順調な半生を過ごしていましたが、それが最初の海外勤務

で三年目を迎えて、突然頓挫しました。

オイルショックで、中東が最も華やかなりし頃、ベイルートにはJ社の中東地区の親支店、空港所、中東地区支配人室という三つの組織がありました。三十代後半の血気盛んな男は総務課長として三人の長に仕え国際線乗り入れの下準備と販路拡張で、十指に余る域内各国を飛び回る一方、三組織を調整しつつ機能させるのも任務のひとつでしたが、個性が強い上司に囲まれ、その調整が結果的にはうまく作動しなかったのでしょう。管理職初年度の考課は五段階査定で四。半官半民時代のJ社です。「キャリア組」で最高点の五が一度でも途切れば、敗者復活は九割方難しい。エスカレーターはそこで止まり、遠ざかる仲間の背中を仰ぎながら苦勞して階段を攀じ登るしかありません。配属される部署も不得手な分野、しかもメリット配分が少ない部門に回されます。

帰国して即座にその悲哀を味わいましたが、ICUと

いう新しい理念の大学に魅入れられ、合格した日本のアイヴィーリーグを振ったロマンティストです。一念発起、生き方の構造改革に踏み切りました。要すれば、出世は諦める。組織には相応に同化しつつも無理はせず、余力で My Way を追求する。構造改革の幕開けです。

以来、余力を目一杯使って、フルート、テニス、スキー、ヴォーカルカルテット etc に熱をあげる。そしてチョップリ夜遊び、火遊びも、という陰の声。芋づる式に広がった社外の遊び仲間たちの、既成概念や枠に囚われない生き方に感化されて遊び心は止まるところ知らず、ついには、妾宅ならぬ別宅を高原に構える棲み分けのライフスタイルに昇華しました。サラリーマンにしてサラリーマンにあらず。多様化や異能異才の受け入れがうわべだけだったところですから、まことに扱いにくい社員だったに違いありません。

二回目の海外赴任の直前にたまたま求めた八ヶ岳南麓の一区画が、転々として東京に戻るころには、中央道の開通で本宅から車で二時間の閑静な別荘地に育っていた

幸運にも恵まれました。五十四歳になった直後、胃三分の二切除というハプニングがありました。が、災い転じて福となり、傷病保険の思わぬ払い戻しが資金の足しになり、不良債権化しつつあったゴルフ会員権を処分して、半年後には、こだわりのログハウスが誕生しました。十五年を費やして構造改革前段の完了です。間をおかず、退職後を見越して、都会とは別の世界を拡げることを指向した後段に踏み出します。棲み分けの最初の四季を綴ったエッセイが、J社で不遇だったころの社外人脈のお陰で某出版社から単行本になり、それが機縁となったか、機内誌を制作する関連会社の経営を預かったのですから、災い転じて福のアンコールです。

棲み分けといっても現役時代はせいぜい月二回の週末だけでしたが、別宅誕生から十年を数えた昨年は、三百六十五連休を割り振り、ノートパソコンを携えて、九十日ぐらいいは山荘で過ごしたでしょうか。多民族で構成する籬かきの緩い別荘族コミュニティでは、特技を持つ仲間たちが企画し指導もしてくれるヴァラエティに富んだ行事が通年催されます。カルチャースクールの趣です。同じ

年代の棲み分け族も増えてきて、都会では望みにくいホームパーティーも頻繁です。買い物を含めて移動はマイカーですし、豊かな自然や住環境と相まって往年の海外生活が蘇った感じがしないでもありません。棲み分けの魅力の一つです。

滞在時間が長くなった昨年からは別荘村の「村長」の顔で、地元の町民有志や行政の皆さんと高原の街造りや景観形成を策定するブレーションにも入れていただいた。棲み分け先の一万五千人の町を構造改革して、ツエルマツトやコルチナダンペッツオのような、自然景観にビューティフルに織り込まれた、静かな中にも活気があるリゾートを創りたい。余所者であるが故に町の長所短所を客観的に見られる、かつ、世界各地のリゾートを見知っているということ、ついには町民の皆さん相手に、景観と街造りの講演までやらされることになったのですから、我ながら驚いています。

子飼いの二羽が巣立った本宅では、若者の残り香が染み付いた古菓の一つにSOHOの擬い物を造り、年金で

は賄えない諸活動の資金捻出にも励む。

棲み分けには連れ合いや老母など、党内各派との不断の調整も欠かせません。楽あれば苦あり、その逆も然りではありますが、半世紀の曲折を経て初春に登場したユ一口とEUの壮大な構造改革にいたく感銘した小泉時代のおかしな隠居は、これからも息長く構造改革・My Wayを進める所存であります。

今年が高齢者に仲間入りします。 AND NOW, THE END IS NEAR. . . のメロディがどこからか聴こえてくる気がしないでもありませんが。

私の構造改革

岩崎 洋一郎

今年の題は、「構造改革」であるが、いままさら国家や経済の改革を論ずる気持ちはない。そこで、私個人

「改革」を振り返ることにする。個人であるから、むしろ「意識改革」と言うべきであろうか。書きやすくするために、年譜を逆にする。

一、一九九九年。齢七十になったのを期に、目黒の一戸建ての家を引き払い、千葉のケア付きマンションに移った。目黒には、数えきれないほどたくさんのお出ががあり、何も不満は無かった。が、今後の老いを考えた上での決断であった。妻も積極的に賛同してくれた。子供が男子一人で、将来彼のお嫁さんになる人に、迷惑を掛けたくないというのが最大の動機であった。

二、一九九二年。三菱レイオンを定年退社。会社から離れることは、やはり大きな転換期であった。組織の中で異例とされる行動の自由を許されて、仕事を自ら創生してきた行動方式と決別することになった。これからは、一個人の力だけで社会と向き合う。頭の切り替えのために、ジャズのヴォーカルを始めたのも、この「個人」としての独立性を確認する証の一つであった。

三、一九五九年。本社へ転勤。それまでは、マーケティングに従事したが、コーポレート・スタッフの渉外室に移った。そこは、会社の生命線をつかさどる、外国からの先進技術導入を折衝する部署であった。半年もすると、受身でなく、積極的に新事業の種を探し出し、そのための技術調査や折衝を自ら立案し、社内を説得して企業化する役割に変化せしめた。そして、狙いは「非繊維部門」。かねてから、特殊機能化学品と樹脂にこそ、生き延びる道があるとの信念を持っていたので、それを実行に移した。三菱レイオンにとって新分野となるアクリル塗料、硬化塗料、人工大理石、炭素繊維、光ファイバー、AN誘導品などを手がけた。また、特許侵害や契約違反などのトラブル・シューティングも守備範囲であった。使命感に燃えた役割であった。

四、一九五五年。三菱レイオン入社。のんびりした学生生活から一変して、厳しい大阪での繊維営業部門に配属されて、一心不乱に先輩についていった。半年で先輩全員が一挙に他部門に移り、入社二年の新

人が、実質的課長となった。毎日、朝早く起床して、繊維産業のこと、加工技術のこと、導入されたばかりのアクリル繊維のことを一時間勉強してから出勤した。そこで得た信念は、「繊維にこだわっている、三菱レイヨンの将来は危ない。非繊維に進出すべきである」。そしてその方面の勉強をアメリカの技術雑誌で密かに勉強し始めたものである。

五、一九四六年。姉の死。姉は胸の病で、あつという間に死んでしまった。母が受けたショックは深刻で、自分を責め、悲嘆に暮れる毎日で、家から笑いが消えた。それまで、寡黙な典型的な日本男児であった私は、何とか平常な家庭を取り戻そうと、冗談を言い、駄洒落をとばしてみたが、反応は今ひとつ。私自身、姉の死でアメリカ生活の歴史がかき消された感を持ち、内心ものすごく落ち込んでいた。でも、母は私の何十倍もの悲しみを感じているに違いないと、道化ぶりを続けた。他人を笑わすのは、つらいものであると痛感した。そのうち、なんとなく家の雰囲気もよくなり、平常な生活が復活した。以来、

私に外向性・社交性が身についた感がある。でも、その原点は涙である。

何を捨て何を得るのか——私自身の構造改革——

上原 利夫

ゲーム感覚で優等生になっていた

大学山岳部で明け暮れた東京遊学中の私は、商家に育ちながら商の字が嫌いだった。にもかかわらず、商社に就職し一九五八年四月一日から大阪へ戻った。学生時代は簿記や会計学を避けてきたのに、配属先は本店主計課だった。救われたのは、この商社には社会公益を論じられる風土があったことだった。

二年間は新人であった。月次決算、期末決算、有価証券報告書の作成など、仕事は面白くなかった。三年目からようやく興味が湧いてきて、四年目に入るや、法人税の申告を任された。決算期は土日もなく終電まで働いた。税務調査を受けると、勝負に勝たねば、そんな感覚だっ

た。ゲームの面白さを知ると、私は会社の優等生になっていた。東京留学を三か月、アメリカ留学を三か月させてもらったが、十七年間も異動はなかった。そのせいか、一九七五年の四十歳までに「主計の上原」なる社内ブランドは確立していたし、課長代理、課長、部長代理と第一選抜で昇格した。

舵を「ほんまもん」に向ける

ニクソン・ショック（一九七二）から第一次オイル・ショック（一九七三）にかけて、商社の行動は儲け主義に移って行ったが、このまま続くはずはない。いずれ「本物の時代が来る」と私は予感した。プラスチックの食器のように、機能の追求だけでは人間味に欠ける。陶磁器の触感は復権するだろう。金銭がすべてではなく、情操が求められるはずだ。

そんなときに私はオランダへ転勤になった。神の作業であったかもしれない。自分自身の構造改革に取り組める貴重な五年間であった。六年生の長男はオランダの庭師が働く姿を見て、庭師になりたいと言った。一流にな

れば、受験地獄を味うことなしに、よい生活ができるのだ。子供にもこのように映るヨーロッパで、学ぶことは多かった。

一方では、店先で陳列されている家具を買うにしても、納入までに八週間もかかる。値の張るものは注文生産なのだ。マルクスの労働価値説の背景を察した。アメリカ的マーケティングから見れば戦線離脱だ。人間と時間の価値が、アメリカや日本と異なる尺度で測定される。日本では気のすまない仕事でやたらに忙しかったが、オランダに来てようやく余裕を持った。その私に営業もやらせようという案は、おことわりした。

ヨーロッパで素人が営業をやると失敗する。技術者でもない商社マンが購買者とアポイントを取るのは難しい。セールス・エンジニアと称して一回は会えても、二回目は会ってくれない。専門で勝負するのがヨーロッパである。私の武器は会計で、公認会計士とは対等に話せた。しかし会社では「主計の上原」を必要としないレベルの仕事が多く、成績は上がりようもなく、次長への昇格は遅れた。

「ほんまもん」の混乱時期

一九八〇年に帰国した後、私を待っていたのはエクイティ・ファイナンスであった。一九八九年のバブル絶頂期まで、自己資本をどんどん増やして会社の財務基盤を強化した。ついに業界一位になった。私はゲーム感覚だった。オランダでの退屈な仕事環境から開放された勢いが手伝ったのかもしれない。すると自由を束縛しそうな取締役のポストが目前に来る。

ときあたかもベルリンの壁が崩壊し、私の世界観に決定的な打撃を与えた。オランダからわざわざベルリンを訪れ、これは未来永劫と信じた頑強な壁が、一夜で崩れ落ちたのである。人間は愚かだ、神に勝てない。マルクス主義国家が、図らずもこれを証明したのである。私はキリスト教に興味を持った。同時に仏教についても三年間ほど勉強した。

企業人としては、合弁会社の監査役で終わった。しかし、これがまた刺激的だった。合弁事業における出資者同士の汚い争いを見せ付けられ、監査役の無力を感じた

のである。このいい加減な制度が出来た由来を知りたくて大学院に入った。五年かけて博士論文を仕上げ、いま学生生活を終わろうとしている。負け惜しみのように聞こえるが、取締役になっていたら、こんな面白い経験はできなかっただろうし、不祥事件に巻き込まれて、株主代表訴訟で財産が吹っ飛んだかもしれないのである。

「ほんまもん」の人生はこれから

私の人生を振り返ると、(十七年プラス五年)のサイクルを三回繰り返して、六十七歳になっている。十七年の最初は高校卒業まで、その次は大阪勤務時代、最後は東京勤務時代である。この間に挟まった最初の五年は浪人をふくむ大学時代、次の五年はオランダ時代、五年の最後は大学院時代である。

いよいよ次の十七年に入る。私が進めてきた構造改革の成果は、まだまだ見えないし、これがどのように展開するのかわかる由もないが、自分勝手に楽しめるのである。構造改革とは、こんなものかもしれない。

(二〇〇二・〇一・一四)

ソクラテスよ今日は

松浦 武弘

私は六十歳で、西暦二〇〇〇年三月三十一日に伊藤忠商事を定年退職した。

定年後は「晴耕雨読」が最良の生活であると考えており、五十歳前に、伊豆の一碧湖の別荘地に土地だけは手当てしておいた。知的好奇心の充足のために、定年の四年前から、企業OBペンクラブに入会した。

一．過去・現在・未来

歴史を繙く時、大きな事件が突然起こった如く考えがちであるが、じっくりと考察し、原因を考えれば、過去・現在・未来が連続して繋がっており、突然起こった事件など皆無であることが判明する。これは、個人のたかだか七、八十年の人生についても同じことが言えると

考える。すなわち、呉下の阿蒙の如く、ある日突然「男児三日すれば刮目してみる可し」ということは実際にはあり得ないのである。

二．修身、齊家

「修身、齊家、治国、平天下」といわれているが、国を治める前に自己を磨き、最小単位である家族をメインティンすることが、男の最低限の務めと考える。家族関係の基本は「一に夫婦、二に子供、三に親」という順番であり、これらの掛け違いが物議をかもし、時には家族崩壊という事態になりかねない。このような家族関係の中で、父親は子供に、物事の道理、価値観を教え込まなければならぬし、同時に、息子には「雄」の強さを叩き込まなければならぬ。

三．自己改革とは

構造改革は、悪い循環を断ち切り、良い循環に切り替えることであり、簡単に出来ることではない。自己改革の第一歩は、肉体の改革であり、悪い血流を断ち良い血

流に切り替えることである。生活習慣病は、肥満と運動不足が原因ゆえ、菜食中心の食生活と適度な運動を行う規則正しい生活への変換が必要である。次が精神の改革であるが、若い時代に行わなければ、遅くとも四十歳になる前であれば、脳細胞が死滅し復元力がなくなるのである。

四・四十歳前の脳味噌の締め直し

一流企業には、一流大学を卒業した優秀な人々が就職するが、仕事に明け暮れ、元優秀な人材も、退職時には単なる凡人になっている。一流企業はまさに、人材の墓場である。私は輸出業務に携わり、駐在・海外出張に明け暮れていた。私が三十六、七歳のころより円高が進み一九七八年十一月三日の、カーター大統領のドル防衛宣言がなされるまでは輸出業務は閉店休業の状況となっていた。当時、私の大学時代の知識の貯えは、とうの昔に枯渇し、読む物といえ、文芸春秋、東洋経済、日経新聞ぐらいであり、加えて酒により脳味噌は腐っていた。仕事の閑なこの間に、私は雑学以上の本を毎月三万円ぐ

らいは読むチャンスをつくることに成功し、腐った脳味噌を締め直す機会に恵まれた。

五・太った豚よさようなら

定年の前年、一九九九年十一月末、断酒を決めた。定年の三月十三日より二週間、検査・教育入院をし、入院を機会に、毎日百本は吸っていた煙草を止めた。入院中は、摂取カロリーを一六〇〇キロカロリーに抑えて、退院時には、八十五キロあった体重が六十四キロとなり入院の成果は目を見張るものがあった。妻の協力のお陰であるが、退院後半年目の定期検診では若い担当医から「あなたは、三百人いる私の患者の中で二人の優等生です。血流はさらさらです」と言われた。

六・自己改革

私はブリュッセルの「三辰」の主人より、江戸前寿司の握り方を教わり玄人はだしで、家でも握っており、四十代より台所に立つことが全然億劫ではなかった。ダンベル体操も竹刀の素振りも毎日出来なかったが、かな

我が人生の構造改革

黒崎 昭二

り以前から実施していたことである。定年を迎え、時間的に十分余裕が出来て、六時に起床し、竹刀の素振りを五百本済ませた後、朝食の準備・後片付けを行うことが出来るようになった。夕食後の後片付けも行っている。毎日朝夕食後二十分間タンベル体操（四キロ）を行い、妻と一万歩、歩いている。一日も欠かしたことが無く、健康そのものであり、まさに、「継続は力なり」である。

定年二年目は、前記肉体鍛錬に加え、四月より銀座の教文館に通い、ヘブライ語を習い始めたが、タルムードを理解するには、一生かかるであろう。

三年目からは、一生の課題として、新に「日本史学」に挑戦したいと考えている。

今まで、私が勉強してきた「秦氏」「ユダヤ」「フリーメイソン・イルミナティ」「ヘブライ語」「日本古代史」が繋がって来るような予感がしている。

小泉首相提唱の「何でも構造改革」の声に乗って我が老年までのスポーツ中心の「行動改革」を並べてみよう。

元来がアウトドア型で七十五歳の今日まで随分いろいろなスポーツを下手な横好きでやって来た。新聞を見れば、一通り政治社会経済欄に目を通すが、スポーツ欄は必ず読み、要点はどこかにメモして記憶しておく。人様との対話の中に必ず取り入れる。

(1) 野球 我がスポーツ愛好のスタートは小学校入学直前のゴムマリによる三角ゴロベースである。これが起点となって何となく音楽や文芸方面にも向くべき能力が偏ってしまったみたいだ。学生時代も社会人になってからも常に草野球の選手だった。文芸方面には手が出ない。

(2) 鉄棒 チビだったので背を伸ばすにはこれが一番

と親にいわれ、「尻上がり」や「足かけ上がり」では物足りなくて「蹴上がり」まで挑み、割に苦勞せずに出て来た。小学六年生で出来た時には流石に嬉しくて、中学で「大振り」「中振り」「中抜き」までも練習して出来た時は全く得意になった。さらに四年生で逆大車輪に挑んで成功して大いに満足。級五十人の中でただ一人の成功者だったから。親の跡を継いで海軍兵学校に進むためにも背が大きくなりたかったのだ。だが、結局は伸びなくて受験出来ず入学も出来ず。戦争も終わる。ある意味で人生の最初の挫折。

(3) 水泳 犬掻きを海でなんとなく覚えたが、その後遠泳には平泳ぎでないと通用しないといわれ、ヒントを教えられて出来るようになった。すべては、夏の臨海学校での訓練のおかげである。平泳ぎでは三マイル泳げたがクロールでは百メートルがやっと。(小学校↓中学時代)

(4) ラグビー 檜田の球の魅力は旧制成蹊高校で覚えた。男同士のブツカリ合いはやっても好きでラグビーは最愛のスポーツ。社会人時代独身寮で無聊をかこ

っていた時、有志と図り室蘭製鉄所ラグビー同好会を創り走り回る。経験なし貧弱体力の主ばかりで連戦連敗。でも楽しかった。その翌年この弱小ラグビー軍団に刺激されて同じ富士製鉄の釜石が、東北の純朴強力高校ラグビー球児を中核に大学での有力な選手も加えてチームを結成した。後年日本ラグビー界初の八連覇の偉業をなしたげた新日鐵釜石チームなのである。

(5) 登山とスキー よく出かけた。スキーはアザラシの毛皮をつけての山スキーで北海道の名だたる山にほとんど登った。三十歳の終わりまでに。

(6) ゴルフ 四十歳を過ぎて企業の中堅管理職となりお付き合いのためゴルフを始める。ハンデ18程度で足踏み。普通のお付き合いは大丈夫。

(7) テニス 五十五歳を過ぎ企業を定年になってから、騙されて始めたテニスの虜になり二十年。これが熟年からの中心スポーツになった。ゴルフは小遣いがかかりすぎる。車に乗ってゴルフ場への朝夕の往復が億劫。特に東京首都圏では。テニスは電車で二十分。高熟年の愛好者がいるのでちょうどよい。半日の運動で快い汗を出せ

る。週二回。目下これに集中。

(8) 太極拳 七十歳を超えて流石にテニスはややきつ
いと感じ出した。会社のOB会が教えてくれることにな
った太極拳。迷わずに手をあげた。今や半年(週一回)
近くなったが、これが案外よい筋肉運動になる。テニス
の動に対して静の動きと深呼吸とで別の筋肉と内臓と神
経を刺激するようになる。

〈ケネクネと太極拳や冬日和〉

ほかに水泳もジョギングもあるが、健康な運動という
ことになる、この辺がスポーツ関係の行動改革(人間
構造改革)の最後になりそうである。このスポーツ中心
の生活態度に対して俳句、尺八(かねて試みて撤退)と
カオルガン(片手弾き)などが付随して新たに出て来る
かもしれない。何事にも好奇心を向けてブツカルつもり
であるが、何が出てくるかはまだわからない。

OBペンクラブ加入のおかげで短編エッセイを書き始
めたし、パソコンにも手を出し、ホームページまで作る
ようになったのは有難いことで、遠近にかかわらず、見
知らぬ多くの方々との交流は、思えば革命的な交遊発展

であり、楽しみのタネになっている。パソコンは今一息
の向上が必要な未熟者だが、頑張るぞ。

教育制度の構造改革私案

折戸 常司

教育基本法の見直しが二〇〇一年十一月二十六日に中
央教育審議会に諮問され、戦後占領軍に押付けられたこ
の「教育の憲法」は五十四年ぶりに見直しに着手される
ことになった。終戦まで「教育勅語」が日本の「教育基
本法」であったことを想い出すと、余りの変わりように
当局は手の着けようも無く、左右の意見に翻弄されて半
世紀もの間無為に放置されてきた国家の重大問題だけ
に、小泉内閣の構造改革の中でも最大の重要課題ではな
いだろうか。

私はこの改革に際して次の二点を特に重視したい。

①明治維新でも教育改革は最大の政治課題で、その成功が日本を欧米列強に肩を並べうる近代国家に短期間に発展し得た基礎となった。これは二宮尊徳に象徴される識字能力と《読み、書き、算盤》の飛躍的向上により《国民》意識と科学知識が一流の西欧諸国並みに小中学生に普及したからであった。この面では、米国に勝るとも劣っていないが、占領軍は日本の国家意識の払拭を意図した。その結果、思考、発想能力や基礎重視の米国教育制度から学級制度のみが安易に採用され、知識偏重教師が戸惑いながら進学試験用に鵜呑みさせてきたのが敗戦後の教育現場の実状ではなかっただろうか。

画一的学生服を強制し、教室内では検定教科書の暗記を成績評価の判定基準とする教育では、自由で独創的な発想はなく、逆に教師に対する反抗心を助成し、暴力的学生運動の火種を醸成する結果となった。敗戦国といえども日本人は多民族の当時の米国民以上に民族的に素質が高く、祖先の本能的生存遺伝子の継承力に勝れている

との学説もある。三歳から五歳までが平均的幼児期、五歳から十歳までがテレビ・漫画雑誌・親との会話などから表面的な情報を得る記憶蓄積期で、この期間の体験判断力が物指しとして脳裏に焼きついてしまうともいわれている。そうであれば、この期間に人間としていかに生きるべきかの道德的教養を身に着けさせることが国家として最も重要な教育施策だと思う。自らの幼少年期を回顧して見ても痛切に感じる問題だ。これは刑法の適用年齢の引き下げ議論とは範疇の異なる教育問題ではあるが、このまま放置すれば日本青少年の凶悪犯罪の増加に大きな影響を及ぼす恐れがある。

文部科学省も、幼稚園等を国民の基礎的教育機関として重視してきたが、まだ小中学校に比して改革のメスが入っていない。

例えば同様の機能を持っている保育園は女性労働力の充実を目的に整備が急がれてきたが、新生児から三歳までの母親の子育て家庭教育は生物の神から与えられた神聖な義務であって、どんな野生生物もこれなしには子孫

の繁栄はありえない。

国家がどんな立派な保育施設を完備し、優秀な保育士を配置しても母親を代行させることは父親に出産をさせるよりも難しい。女性の労働力が不可欠となった今日、母親には育児休暇制度の整備、税制面などで援助を強化すべきである。

なお、満五歳以上、十二歳までの幼少年期はこの地球に生命を受けた人類としての基礎教育をすべきである。そのため日本語のほか英、中、露、仏、ハンゲルなど外国語の実用会話を一年生から必須科目とする。これは十三歳からの本格的な外国語選択科目とは切り離して選択させ、子供同士の人種を超えた友好の基礎を作り、中学生からの第二外国語選定は将来の自分の目指す専門学科を考慮して決めるべきだ。

新学期は西欧並みに九月開始とし、外国語の教員は現地養成とすることにより現地の生活に密着した国際性のある教員を増加できるのみならず発展途上国の近代化にも貢献でき、ODAの実をあげることもなる。

十二歳までの小学生に大人の社会を教える必要はな

い。それよりも、父母兄弟家族と祖先と自分との血縁の大切さ、一体感と命の大切さを教える人間形成が基礎であり、その上で自らの選択により日本国籍を宣誓し、日本国民としての権利と義務を忠実に履行する成人とすべきである（十三歳は現在考えると早過ぎると思われるかもしれないが徳川時代の武士の元服はこの前後に行われたし、現在も発展途上国では成人式の年齢とされる）。

②上級学校への入学試験は全面的に廃止し進学は本人の希望により自由に選択できるが、卒業はその学校の単位認定を得られなければ資格をとれない制度とする（無試験だからといって現在の『有名校』に入学しても一定の期間に卒業できなければ意味がない）。十三歳からは自分自身の個性、独創力から一生従事したいことは何かを自由に選択し、最初の選択を変更したい場合には再入学することも認めて自分の挑戦したい学校に進学できるようにする。しかも三年間の授業料は公私にかかわらず公的負担とすべきである。しかし、三年間で卒業資格を得られず留年した場合は公的助成は打ち切られる。

このような教育制度の改革を基礎とし、ブロードバンドによって同じ関心を持つ国境を越えた人間集団の下で世界的にも通用する技術、経済、文化面で優れた人材を輩出できれば、潜在的能力の高い日本人は欧米や現在のノーベル賞を授与する国以上の榮譽を担うことができる。それらの人材の活躍を通し、世界平和に貢献することで広く世界に慕われる国となることも不可能ではない。

母校が消える？

今村 亮

1 母校存続の危機

私の母校は大阪外国語大学(以下、大外大と略す)である。東京外国語大学(以下東外大と略す)とともに九十九校の国立大学に含まれ、国立大学改革案、俗に「遠山プラン」によって統合または民営化を迫られている。新聞

紙上では、東外大は一橋大、東京工大、東京医科歯科大の国立単科大学間の連携が伝えられた。大外大は二十五年前、箕面市郊外の別天地に移転してしまい、学内の声が今ひとつ聞こえてこない。ただ一年前、瀬戸内海豊島の産廃問題解決に貢献された中坊弁護士が大外大を含む大阪大学の将来を考える会に迎えられたと新聞で知り、胸を膨らませている。

私に通った大外大は高槻にあった。大阪上本町校舎を戦災で焼失し、元高槻工兵隊兵舎が即校舎となった。古いとはいえ校舎の借用は国立大として最大の恩恵である。高槻は上本町新学舎の完成とともになくなり、現在、高山右近ゆかりの高槻城跡公園になっている。その上本町新校舎を放棄し箕面に引越したと聞いた時は、私は外地にいて、またまた国有地かなにかで、国立の特権行使かなとひとり想像した。

ところで東外大、大外大ともに英語名はUniversity of Foreign studies や Foreign Languages ではない。語学修得も大事だが、それがすべてではないとの信条がある。便利屋または通訳としてしか見られなかった

卒業生の悩みが外大の改革挑戦への課題でもある。

2 統合は朗報

東外大が一橋大他三大学と連携協定を結んだことは、単科大学同士の危機感もあるが、その上に学際すなわち One Discipline を超えた Interdisciplinary な修学が実現されることで学生諸君には朗報にちがいない。東外大生が本格的な Foreign studies に取り組むことが可能になり、CPA, Lawyer への道が開かれる。また東工大生に外国語を駆使する国際級エンジニアが誕生する。これこそ、われわれ卒業生が切望してやまなかったキャリアパスである。

と言って、これは別段、新しいことではない。非国立なら前例はいくつもある。今、私の住む北九州にも市立外大があった。設立後早くから学部を増やしていった、今年新設の理工系環境工学部を含めるとすでに五学部、れっきとした地方総合大学で、鉄鋼都市から環境都市を目指す北九州市の「学術都市ルネサンス」の中核である。

母校の大外大に、東外大並みの船団コンソーシアムに

做えとは言いたくない。母校なりの違った生き方があってよい。阪大に統合されて消えかねない。中坊氏を迎えて、どんな将来像を討議されているか、知るよしもないが、私の希望をリストしてみたい。

3 生き残りをかけて

(A) 国立にこだわるな

国立での存続に執着せず、現所在地箕面における地縁を生かそう。大阪府または大阪市の地域社会と密接に連携しよう。府立でも市立でも、公立として存続できれば、それに越したことはない。たとえ私立になろうとも大阪の「あきんど」ではないか。どう転んでも起き上がっていく不倒不屈の浪速魂がある。これこそ大学という大学がこぞって追求する企業家精神ではないか。

(B) 多種言語を武器に

大外大の魅力は何といっても多種言語教育の場だ。総合大学で教える外国語はせいぜい五、六か国語、主として西欧の言語と中国語くらいである。大外大に關していえば、司馬遼太郎を生んだ蒙古語を含み、東外大にない

言語もある。この多種言語部専門教室および図書館付研究室を大阪市内に開設してほしい。大阪市内と指定する理由は一般人への門戸解放、生涯学習の一環としたいためで、ぜひ箕面から出てきてほしい。

また外国からの留学生を対象とする日本語学科も大阪校舎に加えたい。海外に住んで出くわした大外大に関する嬉しい発見の一つが、大外大日本語学科卒の日本語教師に出会ったこと。日本語学科で大外大の名前が売れている。日本語学生数は年間五万人と聞く。箕面の宿泊設備は万端だろうか？ 他の大学の日本語学科に留学生を奪われていないか？

多言語、留学生の延長線には国際教育協力の分野が広がる。地理的に大外大が得意とするアジア、中近東、アフリカなど発展国の教育援助プログラムであり、まだまだ未開拓学科、大外大だからこそ先端を行かねばと思う。

(C) プロ養成を

undergraduate, graduate ともに現在の国際文化学科、地域文化学科に、国際関係学科(上述の国際教育協

力は三学科のいずれにも含まれよう)を加える。また communication, journalism などカリキュラムに入れ、プロの養成に努める。このモデルはアメリカなら、むしろ Monterey Institute of International studies がある。モンタレーは戦時中の諜報部員日本語特訓場として、また世界の Language Capital として著名である。ぜひ箕面を日本のモンタレーと言わせてほしい。

(D) JSL 創設と外部 NPO、NGO 協力

ESL/ニューヨーク大学が指導機関を買って出ているように大外大に Japanese as Second Language mentoring を立ち上げてほしい。また在日英語教育グループ JALT 団体に積極的にコンタクトし英語教育の面でも大外大ありと認識させる。さらにアフガン他中近東の NGO、NPO への語学サポートなど。

首題「母校がなくなる？」が余計な心配であったと言えるよう大外大を考える方々に頑張っていたきたい。一卒業生の切なる願いである。

小さくとも輝く大学

大学改革のモデル・ケースとして

櫻井 清治

「遠山プラン」の荒波に国立大学が翻弄されている。

これは昨年六月に遠山文部科学大臣により提示された「大学の構造改革」のことで、内容は「国立大学の再編・統合」「国立大学の独立行政法人と民営への移行」「大学に競争原理の導入——国公立大学より十分野それぞれで世界の最高水準になりうる“トップ三十校”を選定し、これに予算を重点的に配分する」となっている。国立大学はこの対応に大童の状況にあるが、私の住む多摩地区には、旧来の日本の大学教育の革新を理念に掲げて発足し、これを着実に実現している多摩大学がある。

多摩大学は平成元年創立、学生数約千三百名、経営情報学部だけの小さな大学である。私がこの大学を知ったのは、多摩大学が社会人にも開放していた日下公人教授

の「日本企業論」を平成六年に学生とともに受講したことによる。その後社会人対象のインターネット講習にも参加して、実社会特に地域に直結し産業界からも評価される教育を目指す同大学の基本方針や、教える側の一人よがりの理論ではなく、実地に基づく学生に分かりやすい授業をモットーとしていることに感銘を受けた。

気の付くことは、多摩大学の「世間の常識が通用する教育をきちんとやる」「社会に直結する実学を尊重することにより」「情報技術」「英語力」「経営戦略」「マーケティング」「会計」「ベンチャー力の育成」やこれらの基になる「知的素養」などに特に重点がおかれていることである。具体的には、担当教授による「年間講義概要」と「講義についての学生アンケート（匿名）」を徹底し、毎講義の学生による短いレポート提出を励行している。「勉強意欲のない学生は不要、卒業しにくい大学」との趣旨で、成績不振の学生には早期退学を勧告する。一方、教授に対しては「無休講システム」をとり、休講についての代替あるいは他日の補充講義を義務づけている。ま

た実社会でキャリアを積んだ人材の教授への招聘に力を入れ「業務別給与制度」をとっている。

多摩大学の教授陣をみると、中谷学長の民間シンクタンク理事長、国際電器機械メーカー社外取締役兼専務をはじめ、経営情報学部三十一名の過半数以上は各産業企業、出版、シンクタンク、中央官庁の出身者や兼務者である。この教育をうけた卒業生に対する実業界の評価は高く、平成十三年卒業の就職希望者二百二十六名に対する就職決定者は二百二十四名と実に九九・一％の高率を示している。また大学生は同時に社会人でもあるとの自覚をもたすために、学内で守るべき礼儀としつけを重視するとともに、大学の四年間は遊びの時であるとの観念を持たせぬように、各界有識者による「脱皮教育」も行っている。

昨年六月の文部科学省による「大学構造改革」の発表以来、新たなプランにも取り組んでいる。主なもの二、三を挙げてみる。第一に「生き方教育」である。本年新学期より知識プラス生き方を徹底して習得させるため、

新入生に学長自らが月四回の「イニシエーション授業」を行い、それぞれの授業でも「いかに生きべきか」「社会貢献の必要性」を併せてフォローアップする。

次はITと英語にたけた国際人の育成をさらに進めるために、文系のみならず理系の授業を併せた専門教育科目をふやし、またグローバル化の中で、四月の新学期より、一般英語に加えて、一、二年生を対象に毎朝ネイティブ・スピーカーによる英語のみの授業を「英語シャワー」として行う。さらに一般入試とは別の「チャレンジャー入試」も行う。これは、IT、NPO、ベンチャーシステム開発などの具体的勉強目標をもつ受験生には、論文などの試験により一年間の暫定入学を認め、テーマ別研究で一定の成績をあげたものは二年生への編入を認める制度である。

さらに「多摩大学ルネッサンス・センター」の開設がある。大学には社会人再教育による社会への貢献の新しい役割のあることより、現役社会人に限った現在の夜間大学院に加えて、昨年十月より澁谷マークシティに「多摩大学ルネッサンス・センター」を開設した。ここ

同窓会が怖い：サラリーマンの意識改革

森田 茂

で大学生、社会人を対象に中谷学長担当ほか三つの連続講座をスタートし「知の創成の拡大」に努めている。学生、社会人共同の授業は、教授を含めてのそれぞれへの刺激になる優れた面がある。

昨年九月就任された中谷学長は、多摩大学で二年間教えられた感想を「問題意識を持ち、食い入るように話を聞く学生が少なからずいる。私には彼らを育てる義務がある」と話された。中谷学長は就任以来、理事会、教授会が別々ではなく一緒に「戦略会議」を学内に設置し、ここで決めたことは直ちに実行に移している。

多摩大学は「小さくとも輝く大学」として、文部科学省の「トップ三十」に選ばれる実力が十分あることを信じている。

大手ゼネコンに入社したA君は、そのとき東京の青山にある大学建設現場で働いていた。ある日の夕方、現場の通路を箒で清掃していると、端正な背広姿の同年輩ぐらいの人から、あまり埃をたてないでよ、と注意された。顔をあげると「誰かと思ったらA君じゃないか」と声をかけられた。瞬間、拙いところを見られたなとA君は思ったが、学友の山下君と気づき「やあ、元気のようだね」と挨拶を交わした。一流商社に入って数年経つ彼は、昨日ヨーロッパの出張から帰ったばかりだと語った。

同じ学窓で学んで社会人になったが、働く環境がこうも違うものかと、自己卑下の念がわいてきた。そんな想いに囚われていたとき、同窓会の案内が来た。他の同窓生の羨ましそうな噂を聞いていたので出欠について思い悩んでいた。気が小さいというか、A君は同窓会で比較されるのが怖いという気分になっていた。

かつて、目を見張るような立派なビルの東京本社で入社試験を受けたとき、こんな事務所で仕事をしてみたいと思った。しかし、その会社は国内はもとより全世界のほとんどの国に事務所や現場があるから、将来はどこで働かされるかもしれない。A君は数年本社で働いた後、この青山の大学建設現場に配属されていたわけである。その仮設事務所です務をやりながら、現場回りをしたり、掃除の手伝いをやっていた。現場用の作業服姿も次第に身につくようになった。

A君は、残業が多い中で週二回夜間の英語学校に通い、忘れかけていた英語力に磨きをかけていた。後にこのことが社内評価されてロンドン支店に赴任することになった。この貴重な五年間の海外経験を経て、いま本社の新任課長として活躍している。

しかし考えてみれば、どの会社にも現場やそれに類する職場があるに違いない。ゼネコンだけでなく、ものを創る仕事には現場がつきものである。仮にエリート社員として本社採用されても、いろいろの現場を経験するのが普通であろう。

ある化学会社のオーナー一族が作業服に身を固め製造現場で働いているのを見たことがある。なにも驚くことではない。このような幅広い経験の積み上げにより、机上論ではない地についた実力が養われていくものである。

日本がまだ高度成長しているとき、もの創りを疎かにすると社会が沈滞するのではなからうかと、大学の同窓会で話し合ったとき、一流証券会社のY君は、これからは金融資本の時代であるといい、意見が合わなかった思ひ出がある。後にその証券会社は破綻してしまい、彼は機械メーカーに転職できたので、また語り合ってみたいと思っている。

いまこそ地についた現場主義を再考してみようではないか。働くスタイルで人となりを判断する人がいるが、そういう人こそ労働の価値観を見直す意識改革が必要なのではなからうか。働く格好で人の価値は理解できないのは当然である。同窓会を怖がることなど全くのナンセンスである。

現在は、派遣社員やパート労働者が増加しているが、

若いうちは少し不安定な労働環境で苦勞した中から、独立心が養われ、将来の展望を抱いて強くなる人をよく見かける。

上部や外部からよりも、現場から日本の労働環境の改革が促されていく方が、日本の将来にとって望ましく、現場を知らないお上のような意識こそ問題なのではなからうか。

構造改革散策

杉 浦 右 蔵

構造改革にもいろいろある。しかし根源を治療しないと改革は難しい。年初に感じる幾つかを気軽に記す。

構造改革の原点 構造改革なくして景気回復無し。と言う言葉に異論はないが本当かなと言う心配が強い。下手に改革を強行すると拍車をかけて悪くなる気がする。やらないとさらに悪くなる。世の中の循環サイクルのう

ち効き目のある循環点を見つけて、その点から思い切った改革を重点実行すれば循環が一巡する時点で良くなる。

特殊法人 構造改革の最たるものは特殊法人をどうするかであろう。国家公務員キャリア採用の方々はピラミッドの頂点に立てる。頂点は事務次官、立てる人は一人だけ。役職に付いてから上部に行くたびにキャリアのポスト数が少なくなる。さらに局長クラスになると先輩後輩のポスト就任の関係から次々と同期の仲間は選別されない。優秀なエリートたちは何処かへ弾き出されなければならない。頂点に近づくに従い仲間は特殊法人の長や役員、関連の民間企業へと再就職する。五十歳前後でこの現象が集中する。同期がポストに付いたら自分は行き先が無いから引退せざるを得なくなる。気の毒な話である。このような方々の人事処遇の構図を根本的に改善しない限り、特殊法人の整理や、民間会社への天下りは無くならず改革は不可能である。

不正資金造成 官庁の会計規則には民間企業のように弾力性が無い。特に旅費規程における階級格差、地域特

殊性の融通性、日などに問題がある。国内や海外に出張した場合など言葉で表せない出費を伴う時がある。長期出張の場合は貰った金の範囲で足が出なければマアイヤで済ませられるが、短期の場合は足が出てしまう時がある。民間会社では領収書と出費費用の説明で実費補填してもらえ。しかし官庁はそうは行かない。金の出所が無いのだ。このような事情からプール金を作り泣きつく所を作る手立てを考える結果となる。これも細々と細工をしているうちは良いが、だんだんとパイが大きくなると始末が悪い。そのうち悪さに便乗する輩が出てくる。このような悪循環を断ち切るためには、弾力性のある、良心的優しさのある会計規則に作り変えないと、監査を厳しくしても悪は根絶できない。

テロ自爆 地球自然は生物の生息進化を営ませる。自然の中で生まれて死ぬことが神の定めだとすれば、神のお告げを布教する宗教指導者が聖戦の名のもと、他人である実行者を教育し、他人に指示して実行させる。結果、己は生を永らえ他人に死を命令する指導者自身が自然の神に対する冒瀆である。彼ら指導者は脳味噌の構造改革

が必要で天罰を受けなければならない。

サイバーテロ 最近の情報通信技術の進歩のうちインターネットという無限の可能性を秘めた技術は素晴らしい。しかし他人の個人パソコンのなかへ侵入してプログラムやデータを改ざんしたり、メール発信時アドレス帳の他人を道連れにしてビールスを撒き散らしたり、一部目標を集中攻撃するなど頭の良い悪者が出る。インターネットはセキュリティに脆い。国家的情報統制は困るが、強力な形でシステム防衛の智恵組み合わせることが急務だ。今後の世の中の構造改革全部にかかわる根本問題だ。そこで別案、そのような頭の良い劣劣人間を競わせるための国際的別ネットを作り、そちらの方で妨害ごっこを競って欲しいものだ。そしてギネス的記録者に数々の表彰制度を設けて表彰する。

相撲は裸 最近サポーター無しで本番勝負に出る力士は稀になった。年間の場所が増えたとし巡業も入れると年中忙しいことは判るが、俺は此処が痛いのだと誇示する仕草はいただけない。本番相撲が終わると観客の前で外すなどともない。本番は素肌で勝負して、観客の見

構造改革についての提言

亀井 弘次

ていない所で痛いところを手当てすることが肝要だ。協会も力士も発想が反対だ。また観客も容認していることがおかしい。協会の構造改革が直ちに必要だ。

逆さの発声 新年のテレビ番組で話し言葉を後ろから喋る名人の喋った中身の当てっこクイズ放送があった。アナウンサーが何故このような特技を身につけたのですかと訊ねたら、ちょうど七十歳になったとき良き昔に戻ればとの思いから練習したのだという。日本の歴史を十年逆さに読んで高度成長の時期まで戻せないものか。

色々な構造改革と自分 複数の人間の居る所には何らかの制度が出来る。その制度が運用されると問題が生じてすべての分野に構造改革が必要となる。私も今年七十歳になる。この年になると、辞書を引いて閉じると忘れてまた開く、二階に行くと何しに来たんだっけ、情けないこと。老域に入ったいま自分の構造改革も必要だ。

その一、年賀状を書く度に思うのだが、やたら長い住所がある。その代表をお目につけよう。

京都市右京区嵯峨二尊院門前善光寺山町

由緒のある地であることはわかるが、いかにも長い。

こちらは年に一回のこと。パソコンに打ち込んでしまえば何のことはない。

しかし常時住所氏名を書かされる御本人は大変なご苦労だと想像する。

そこで提言。由緒ある地名はそのまま残し、住居表示は大幅に簡略化すること。

郵便番号の充実した現在、何の支障もないと思うが如何。

その二、これは横浜の話。

近くのインターから高速道路に乗ると制限速度は五十

キロとある。大きな五十のサインがあちこちにある。

聞くところによると、高速道路でもカーブのある場合は安全のため最高速度を五十キロとするそうだ。

ところが、走っている車はほとんど八十キロ以上、私が七十キロで走っていると、どんどん追い越される。

高速料金を払った以上、元をとらなくてはと百キロ近くで飛ばす車も多い。

何年もここを走っているが、パトカーや白バイの姿を見たことがない。法律を破ることを黙認しているとは思えない。

何故実態に合わせて制限速度をせめて七十キロにしな

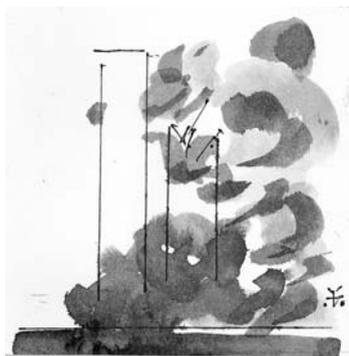
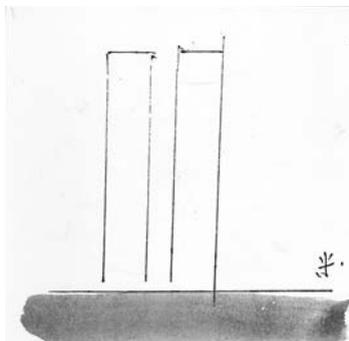
いのか。その上で、これを守らせるのが筋道だろう。

これが、私の構造改革提言の第二点である。

変わるべきもの——ミレニアム二年目の思い

岡 政 昭

二〇〇一年九月十一日のアメリカにおける同時多発テロ事件から、戦争に対する認識が変わった。従来の戦争は国家間における武力闘争であったが、アフガン戦争は



アメリカの非国家・テロ組織に対する武力制裁を国際的に連帯するものとなった。テロの犯罪行為に対しアメリカは戦争を布告、国際法上の個別自衛権にもとづく軍事力行使した。国連の加盟国は同憲章第四二条による対米協力を闡明し、NATO関係国は集団的自衛権の発動による闘争部隊を派遣した。日本も緊急の有事法制により、後方支援のために自衛隊を初めて海外に派遣した。また十二月一日には皇室に全国民待望の内親王お誕生があった。早速、皇位継承権について女帝も認めるべきだとの提案が浮上している。

いずれも日本国憲法が国是とする平和主義と国際主義に則った戦争の放棄（第九条）と国民主権に由来する天皇の地位（第一条）と皇位の継承―世襲（第二条）に関する出来事で、これまで正面から取り上げることがタブー視されてきたものだ。ともすれば表層の、対米協力に関する強迫観念とか、慶事に対する情緒的反応とか事柄の本質をバイパスした議論ではなく、基本原則に立ち返り、歴史を踏まえ、未来を見据えた国民的世論の熟成が

望まれる。

あえて両者を関連づけて問題提起すれば、テロの発生をめぐり、グローバル化し、非対称化しつつある市場経済の富と、国際政治から永く放置されてきたアフガンへの関心を、戦後天皇を象徴（いわゆる元首ではない）とし、一国平和主義を享受しながら、未曾有の構造改革問題に直面している経済大国日本がどう捉え、取り組もうとするのか。今その果たすべき役割について、主体性が外向きにも問われており、内向きの政治不信と老後不安に逼塞している場合ではあるまい。以下は、危機管理―国防と外交という文脈の中で、二十一世紀に顕在する地球上の飢餓と貧困を克服し「国際社会に名誉ある地位を占めたい」という憲法の希求に、護憲、改憲の立場はさておき、この国の形づくりに一納税者として参加している当事者の言挙げである。

私見としては、憲法解釈上素直に集団自衛権を認めたくらうで、テロ対策における自衛隊の行動を正当化し、その後は国連平和維持活動とアフガンの復興問題に注力す

る。国の交戦権は明文を以って禁止されているから、第九条を遵守するかぎり、アメリカの軍事力行使に対する支援はおのずから制約される。アフガンの復興支援に対する予算は、日本の役割に応分のものとしなければならぬ。(ODA予算の一部を構成するならば、たとえ中国向けを減らしても、一律削減の対象とすべきではない。)

他方、国会の議決を経た皇室典範の見直しにあたっては、女帝の夫君の役割についても検討を加え、法の下における両性平等の立場を皇位継承についても貫くとともに、戦後不問とされてきた天皇の退位について制度的な途を開くことが望ましいと考える。

経済・金融政策の「あまりにも小出で、遅すぎる」ことが、一九九〇年代日本経済の「失われた十年」を招き、目下信用恐慌の日本発信が世界で懸念されている。成功体験を過信し、構造改革を行わなかった不作為の責任は、ひとり当局者ばかりでなく企業経営者も同断である。天下一りに象徴される守旧の体質と訣別し、技術革新を取り入れた経営の効率化が新陳代謝による組織の活性

化とともに、事業の再編を目指して構築されなければならない。海外には日本の銀行が抱える不良債権は百三十兆円にもものぼるとの観測が流布されており、日本売りを回避するためにも不健全銀行の市場退出、過剰債務企業の整理、リストラにもとづく失業の発生は止むを得ない。雇用の受け皿作りが急務である。

公的資金の再注入は必至とみられる。必要とあれば既存枠の十五兆円以外に、たとえば償還期限を最長三年とする使途限定的な小泉債券発行などの工夫があってもよい。経済の実勢を反映しての円安、たとえば百三十五―百四十円の環境下で、デフレスパイラル脱却のためのインフレ・ターゲット、たとえば先行き二%ぐらいを念頭においた国債管理は幻想であろうか。ちなみに指標たる十年物長期国債金利は現行一・四%がらみて国債の九割は国内消化という。財政、金融政策ともに手詰まりの現状、税制の出番が期待されている。企業部門では設備投資促進のため投資税控除の導入や割増償却の無税化を、家計部門では消費税を一旦引下げ、その後段階的な

引上げを、たとえば現行五%を三%に引下げ、以降六月ごとに二%ずつ引き上げ、三年後は九%として買い控への阻止を図る案はどうか。これまでも日本経済のもつ成長と変化の潜在力は幾多の困難を克服して実証済みであり、デフレ制御は可能の筈である。将来に対する夢と自助の精神を持つ。

構造改革……新春横町異聞奇聞

吉井 米三郎

熊・八 「明けましておめでとうございます。本年もよろしく願います」

隠居 「やあ、おめでとう。さあ膳に着いて」

一同乾杯、宴始まる。

熊 「去年は新世紀の幕開けで、森さんもIT革命を取り上げたけどナスダック・バブルが凋^{しぼ}んで通信を中心に米国IT業界は不況に、その波を受けてわが国大手電

機メーカーは夏には軒並み大規模リストラに追い込まれた。IT革命は中折れとなったんだな。毎度のことお上^{かみ}は煽った口を拭ったままだけど」

八 「米国では九月十一日史上空前のテロ、テキサス出身の大統領は“Wanted dead or alive”、つい十字軍を口走ったり、世界に向けてテロへのシロ・クロ、敵か味方かはつきりしろとか、たちまち大衆の愛国心を歪^{ゆが}め昂^{たか}ぶらせた。十月にはアフガンの内戦を利用しつつ堂々と大規模爆撃を開始、抑制のない米国の姿には悪寒が走るよ」

隠居 「テロ多発の根っこには、紀元前に滅びたイスラエルとユダ王国が三千年近くを経た一九四八年に当時英国の委任統治地だったパレスチナに忽然^{こつ}と再建された経緯がある。そこにはメジャー野望の影があったのだ。言ってみれば地球規模の構造改革がない限り、土龍^{もぐら}たたきの如く、テロはつづくに違いない。

ともかく、今日のテーマは小泉さんの「構造改革なくして成長なし」としよう。小泉さんの氣勢を支えているのは、やっかみ混じりにポピュリズムによると言われな

がら、七〇%の高支持率だ。大衆が直感しているのは、^い卑しさのない清潔感と明治維新の国士風の鋭角的、鮮烈な雰囲気じゃないかな」

八 「不良債権をはじめ郵便事業・公団・特殊法人など多くの分野で構造改革の方向が出されたが、構造の基礎にある政治の改革はあと回しで基盤となる選挙の構造改革は影が薄い。九九年の本席のテーマだったeVOTEのすすめをとりあげてみても、昨年十一月末によく地方選挙での電子投票導入のための公選法特例法が参院で成立するというスローモーションぶりだ。勘ぐれば一昨年の米大統領選挙でのフロリダ騒動でその後全米各州がタッチパネル投票導入を一齐に検討しているとの報道で日本も重い腰を上げたのかも。そう言えば米国大手ジャーナリズムがフロリダのパンチ投票を再精査の結果ゴアが一七票上回っていたとか、西部劇のイカサマ賭博さながら」

隠居 「eVOTEへの抵抗勢力といえ第一に陣笠諸公なのだ。つまりeVOTEの進化は代議員制の機能と領域を矮小化し究極的にはテクノクラートが政

策、立法の立案をし、その選択、票決を直接市民が行う方向に向かう、つまり限りなく直接民主政治に近づくということだ。eVOTEは代議員の存在を否定するものだということとなれば、陣笠連中は現状維持願望となるはず。

第二にジャーナリズムへの影響も大きい。eVOTEの将来はインターネットさらにケイタイへと向かうが、現投票所であるタッチパネル投票をオンラインでの集中処理システムと結ばば最後の一票がタッチされた途端に全選挙結果が出る。そしてややあつて、あらゆる分析、評価がラジオ・TV・インターネットを通じて全国民に報道される。つまりジャーナリズムはデジタル分野からは締め出され、わずかにソフィストケートな評論分野が残るだけとなる。こうなると、あえてeVOTEには無関心を装わざるを得ないのだ。ほかには現場のお祭りのような楽しみをもつ役人、受注減の印刷屋など。

仮にタッチパネルによる投票導入のため全国投票所にターミナル十台ずつ用意するとしたら多分関係設備も含め数千億の公共投資となり、業界へのカンフル注射にな

るはず。熊にしか遭遇しないような道路建設は後回しにして、A T Mが普及した七〇年代後半からe V O T E導入を実現していたら、政治家の質も向上していただろうし、波及効果は現在世界十四位というインターネット普及率も世界トップになっていたかも知れんね。何よりも政治家の質の向上で失われた十年が二、三年で回復していたのではないかなあ」

熊 「ところで道路公団など第三者機関を設けて審議するなんてんでは、結局、玉虫色の改善がおちで、改革は望めないかも知れんね」

八 「それは、時間をかけても所期の改革を遂行せば。それより失われた十年の病巣たる不良債権処理は待ったなしの切開手術を要する問題なんだ。ねえ隠居」

隠居 「大蔵省の護送船団で過ごしてきた釜の中の蛙は、不良債権という炎で水はぬるま湯から熱湯になりはじめても、もはや釜を飛び出す瞬発力も気力も失っており、公金という冷水をかけて貰わねば煮え上がるのを待つばかり。せめて前回の公金投入の際、瞬発力のある世代との交代を強行して置くべきであったろう。四〇年

体制のDNAの残る官界についても徹底した意識革命が必要で、その成否は二十一世紀のわが国の行方を左右するはずだ。憎まれ口はここまでとしよう」

構造改革と日本経済

新井 進

二〇〇一年春に誕生した小泉内閣は「聖域なき構造改革」を旗印として、従来の自民党基盤の内閣とは異った政治手法をとり国民の支持率を得ている。

小泉内閣が成立してから日本経済がどのように改革されたか、早急に判断できないが、昨年末に決定された二〇〇二年度の一般会計予算案から同内閣の構造改革への考え方が窺える。総額八一兆二三〇〇億円と決定され、国債発行額が以前より公表されてきた三〇兆円内に収め

られた。その特徴を検証してみよう。

(一) 前年より減額の主な項目

* 一般歳出が四七兆五四七二億円で四年ぶりでマイナスとなる。

* 公共事業費が九兆二五二五億円(一〇・七%減)。

* 文教面の五兆五〇四六億円(〇・五%減) 国立大学などの整備、逆に小中学校の教員増など。

(二) 前年より増額の主な項目

* 社会保障費の一八兆二七九五億円(三・八%) 診療報酬の抑制に対して特養老人ホーム、保育所などの増設。

* 防衛費の四兆九五五九億円(増減なし)

* 科学技術面での一兆一六五三億円(四・八%) IT、環境、先進技術、生命科学分野の増額。

旧来の族議員からの抵抗に対して妥協を求められた分野もあろうが、大体国民への公約の一部は実行されたと思う。公共事業費の大幅削減、百六十三の特殊法人のう

ちの六十二法人の廃止ないし民営化の決定、整備新幹線予算の削減、道路特定財源の一部一般財源化などは評価されよう。金融部門の不良債権問題の先送りなどは不安要因である

一方、ここ十年来の日本経済のデフレ傾向は一向に改善されず、年を追うごとに悪化している。例えば、経済の先行指標といわれる東証日経平均指数は昨年末の大納会に一万五四二円六二銭となり、年間下落幅は三二四三円(二三・五%)に達している。また消費者物価指数は前年比一・二%の下げを記録している。新聞紙上でもよく取り上げている雇用面は悪化し、昨年十一月末の失業率は五・五%(完全失業者三五〇万人)と報じられている。

政府はデフレスパイラルでないと言い訳しているが、どの指標をとっても明るい見通しが無いのが現状である。日経連も見解を発表して、このまま経済を放置して具体的な政策をとらない場合の警鐘を鳴らしている。試論だが、構造改革とデフレ対策の両面から考察したい。

(一) 構造改革対策

*小泉内閣が掲げる重点分野改革のさらなる推進。都市再生、新産業創出、環境整備、ナノテクノロジー研究開発、ゲノムテクノロジーの微細技術開発、国立大学整備、幼高年者対策などの推進。

*民間企業は血の出る変革を実行しているが、官庁の人員整理は掛け声だけで終始している。最近、天下りの規制などの公務員改革を検討していると聞く。早急に法整備が必要。

*不動産、建設、流通部門の再編成と平行して、金融界の不良債権処理の実施。

(二) デフレ不況対策

従来の財政対策（過去十年間の一三六兆円の投入）では効果がでないことは明白で、新しい方策が必要ではなからうか。

*調整インフレの導入——デフレは供給過剰が原因であり何としても微調整のインフレが望ましい。最近の財政赤字で国民一人あたり六六〇万円の負債を背負い込み、これが解消にも

役立てたい。

*為替円安の推進——中国への生産移転によりその空洞化が顕著だが、それを阻止して再構築するため、コストの大きいウエイトを占める賃金を国際水準にまで下げる必要がある。円の対ドルレートを一六〇〜一六五円（二〇〇

〇年より三〇%の引き下げ）を目標とする。

*不動産価値下落の阻止——銀行の不良債権が取り沙汰されているが、従来の慣行である不動産担保の下落が続く限り根本的解決にならない。資産デフレ対策の意味からも、公的機関による有休土地の買上げも必要。

政府・日銀の使命は物価の安定を図ることだが、デフレ下で「安定して物価を上げるか」も考えるべきである。

内なる構造改革

多田修

構造改革といえば、外見が変わるように思いがちですが、人間の発育を見ると新陳代謝が外には気付かれないうらい見事に改革を進めていることを誰でも知っています。脳細胞だって、これまでの記憶をそのままに入れ物だけが新しくなっているに違いありません。しかも、今まで教えても理解できなかったことでも理解できるよう発育していることも事実です。

今、国も企業も『構造改革』が叫ばれ、スクラップ&ビルトと何の反省もなく受け止められているのが気になる。脳細胞でいえば、記憶や経験まで老廃物と一緒に排泄して、遺伝子の申し送りもなく、『ウドの大木』のような別人が生まれてきそうな気配です。記憶や経験は残し、新しいことの理解と変化に応じた思考を身につけるには程遠いのが現状です。

昔とった杵柄きねづかですが、経営の財務分析で、健全性につ

いては資金運用のためのやり繰りを考えて、資本ストックの新陳代謝で収益性を向上しつつ将来に向け発展性を確保していたものでした。これがそれまでの企業の構造改革でした。

昔、赫々たる戦果をあげた商品も時が経てば陳腐化し、やがてリターンが減ってきます。投資した当時、収益が立派に大きく資本効率が高くても、今となつては資本効率が落ちて他の商品の足を引っ張る結果になっている場合も多いものです。世界市場に、旧ソ連をはじめ生活水準が低いままの国がどんどん参入して低コストで競争を挑んでくる今日では、投資した資本の効率はより高くする必要があります。

半面、日本の国や企業を見ると、投資当時の成果が大きければ大きいほど、有能な人材が配置され、国の行政にしても企業の事業にしても大勢の人たちが従事するようになりました。人員だけでなく、予算も潤沢に配分されています。

それから時が経ち、資本効率下がっても昔の栄華を

忘れることができず、国も企業もそれを贅肉として排泄することに躊躇する結果になりがちでした。

もう一つの問題は、国も企業もその資本ストックに寄りかかり、次に備えて新しい有望な投資に目を向けなかった恨みがあります。この先が見えなくても、それにリスクがあっても、決断して次の投資を進めていけば、今になってショック覚悟で構造改革を叫ばなくても、自然の摂理に素直にかつ連続的に新陳代謝をして『内なる構造改革』ができたでしょう。

今となつては、国も企業も待たなして構造改革が必要です。それを痛みの少ない新陳代謝によるか、激痛を伴うショック療法によるか、選択の幅は狭くなりました。今『痛みがともなう』と特に強調されるのは、国も企業もここまでする前に、新陳代謝による構造改革に打つべき手も打たずに素通りし、何とかなると安易に考えてきた人々の甘えに警告を發しているのでしょう。

経済的に剣が峰まで追い詰められた日本がここにきて円安に救われるチャンスを与えられました。それではあ

の円高も与えられたものだったのか、当時は日本商品の強さで市場原理が正しく働いたのだと、困惑しながらでも自負心を満足しているところもあつたように思います。

しかし、それが意味するものは、競争原理以外にも市場に働く力はたくさんあるということでしょう。経済の素人が有効需要の原理の話を聞くと『神の見えざる手』の幻覚が脳裏をかすめます。しかし冷静になつてみると、需要に供給が追いつかない場合はまだしも、逆に供給が過剰になつた場合は、情報の非対称なこの経済社会で需給バランスが取れるとは納得できません。

もっと大胆にいうなら、バランス点は複数あると考えるいいのではないのでしょうか。経済社会の中には幾つもの谷間があつて、そのどの谷に落ちてでもそれなりにそこに安定なバランスを維持できるのです。どの谷に落ちるのかは各国や各社会で決めた法律や規制によつてきまりません。企業間で決めた契約の内容でも左右されるでしょう。企業間で相互に信用しているか否かで違つた契約になります。不良債権問題が良い例です。

うかつにも、最近まで事務系の人は正解が無数にあると考え、技術系の人は正解が唯一つと考えていると思っ
ていました。しかし、ケインズは『唯一』派です。小泉
さん『大胆、かつ柔軟に』なるべく居心地のいい谷を選
びましょう。それこそ、小泉さんの出番です。

カジノ解禁による抜本的な対策を

竹内 京一

総論賛成、各論反対の構造改革を進めるためには、大
胆で柔軟な発想が必要だ。東京都の石原慎太郎知事が提
唱する「お台場カジノ構想」ぐらいのアイデアを振りか
ざした方がちょうど良い。一見、奇想天外に思えるかも
しれないが、過去の日本の枠組みを抜本的に覆すような
施策を持ち込まないと、構造改革は遅々として進まず、
経済再生などとてもじゃないがおぼつかない。

二十一世紀を迎え、我が日本はバブル崩壊から立ち直

るところか、実質経済成長はマイナス、失業率は悪化の
一途をたどるなど、経済の停滞を深める一方であるのは
承知の通り。かなり以前から構造改革が必要なことは指
摘されてきたが、総論賛成、各論反対の繰り返しで、ほ
とんど進展することがなかった。

これが現在の景気の停滞を後押ししているわけだが、
「抵抗勢力」に代表される古い利権にしがみつく人の群
れが、構造改革を進める上での足枷になっている。旧態
依然とした利権構造を根底から覆してしまうような新機
軸の施策が打ち出されれば、抵抗勢力も抵抗のしようが
無くなるはずだ。

そんな中で注目を集めるのが、「カジノを作る」とい
う発想だろう。石原知事の指摘するように、先進国の中
で百万人以上の都市にカジノが無いのは日本だけであ
る。賭博を禁じた刑法があるからだ。世界を見れば、米
ラスベガスのように老若男女、子供までも楽しめるあら
ゆるエンターテインメントを提供するカジノ都市もある
こともまた事実なのである。

日本もカジノを合法化し、一大リゾート地を出現させれば、経済活性化につながることは請け合いだ。

まず、新しい産業として雇用の面で大きなファクターとなる。石原知事は「お台場カジノ構想」で一万人の雇用創出ができると試算している。製造業で雇用創出を見込むより確実だ。産業の誘致にことごとく失敗し、人口の流出が進む地方都市でも観光による地域経済の再生を念頭に、カジノ解禁に関心を示すところが増えてきている。

その上カジノは、外貨を獲得するためにも好都合の場所を提供する。衣料や家電、さらに自動車とさまざまな製造業が低コスト労働力を目当てに中国に移転。国内の製造業の空洞化が進むと同時に、高性能な機械製品を中心に蓄積を重ねてきた日本の貿易黒字は急速に減少しつつある。

そんな日本を尻目に、今や米国までも凌駕し、あらゆる分野で一大製造工場になりつつあるのが中国だ。爆発的な工業化の進展とそれにとまなう富の蓄積で富裕とな

った階層も出てきており、海外旅行を楽しむものも多い。もちろん日本にもやってくる。浦安のデイズニールランドでも中国人をはじめアジアから多数の人が訪れる。温泉旅館でも、中国、台湾からの旅行者を当て込んだサービスを提供するところも増えた。

製造業で「中国の一人勝ち」との情勢は、二十一世紀に入って当面は続きそうだ。人口も多く世界経済の中心にいるものを商売のターゲットにしない手はない。蓄積した富が急速に失われつつある我が日本としては、中国からの観光客がさらにお金を落としてくれるスポットであるカジノを創出することも、必要な施策のひとつとなるはずだ。

とはいえカジノはしよせん賭博場。解禁することに伴うリスクは当然発生する。全国どこにでもカジノを設けることは、若者たちの間にただでさえ一攫千金の夢を煽るムードがあるだけに精神衛生上好ましくない。

そこで提案したいのは、返還交渉が一向に進展しない北方四島にカジノを設けるといふのはいかなものなる

う。漁業の基地として北方四島を活用するのもいいのだが、カジノを中心にした一大リゾート地をその一郭に建設する。もちろんロシアにも協力を求めるプロジェクトとし、落ちる外貨の一部がロシアにも回るようにする。

北方四島を「日本固有の領土」と主張する人もいるだろうが、四島をロシアから租借し、実をとるのも一考する価値がある。賭博の解禁については、当然賛否両論の意見が噴出することだろう。租借地という治外法権の土地で行うとなれば、反対意見の矛先も丸くなるはずで、カジノ解禁という面でも実を取るにつながらる。

とはいえ日本全国、カジノは無くてもパチンコ屋はいたるところにある。パチンコもれっきとしたギャンブルである。最近のパチンコ台は当たれば大きく儲かるが、外れると一回に失う金額が数万円単位で、こちらの方も大きく、嗜好の域を大きく踏み外してきている。パチンコが良くて、何故カジノがいけないのか。カジノを解禁することもまた、構造改革のひとつであるに違いない。

そして願わくばスピーディーに構造改革が進むことを

祈りたい。日本再生の道が遠ざかり、袋小路に入っている。そんな方向に向いている気がしてならないからだ。

右肩下がり の構造改革

北田 純 一

日本の経済発展にもっとも寄与した政策は、戦後間もなくの農地開放だったと思う。とにかく小作農制度を終焉させ人口の八〇%を占めた農民を豊かにした。おかげで家電など新しい産業に国内市場が生まれた。おなじく財界の巨頭追放により老害が一掃され、若さが社会をリフレッシュした。日本はあつという間に大量生産型工業国に变身できたのである。

ちょうどその頃のことであった。昭和三十年ごろと思うが、カナダの通産大臣レオンさんが大阪にやってきた。どういいうわけか私が大阪見物の案内をすることになっ

た。当時は大阪のみならず日本国中どこでも汗臭い人の波でござった返していた。大阪駅前の雑踏に出くわし、どこか薄汚い大群集が恥かしくって、照れかくしに「日本は人口過剰で困っているのだ」と口を滑らした。間髪を入れずレオンさんが答えた。

「何を言うのだ、オーバーポピュレーションは宝物だ。カナダは人口過少で大量生産に踏み切れない。何をやって米も米産業に潰されてしまう。日本はラッキーだ」

私ははっと気がついた。わずかばかりの農地を召し上げられたのは悔しいが、そのおかげで日本が生きかえたのだと悟った。今風に言えば、構造改革の痛みと成果を肌身を感じたということになる。

それから半世紀、良くも悪くも日本は世界の経済大国のしあがった。しかし、このところ調子がおかしい。世界第二位と思っていたのに何時の間にか二十六位にランクを下げていたらしい。一位はなんとシンガポールだという。

街には不景気コールが木霊し、だれもが閉塞感に苛まれている。そこにご存じ小泉純一郎首相が「聖域なき構

造改革・骨太の改革」をかかけて登場した。八割を超す人々が拍手をおくった。ところがそれから十か月、掛け声ばかりで肝心の改革は一向に進まない。人々はようやく首相の虚言癖を思い出した。

かれはつい先ごろまで変人奇人を通っていた。そして郵政大臣のときも厚生大臣のときも、けつきよく掛け声だけで何一つ改革に手を染めなかった。言行不一致の最たる人物と言わざるを得ない。そんな奇人になぜ人氣が集まったのか、それは言葉のせいである。骨太といい、聖域といい、言葉は使いやすいのである。小泉氏は言葉の魔法使いである。

構造改革と言っても色々にとれる。そもそも人類は野に鹿を追っていた時代から、牛馬を家畜にした時代に、牧畜から農耕に、農業から工業に、つぎつぎと生き方を変えてきた。今度は情報化だと言われている。そして、それぞれの時期にそれぞれ都合のよい社会システムを編み出してきた。このようなライフスタイルの変化に対応した制度改革こそがほんとうの構造改革なのではないだ

らうか。

小泉氏の唱える構造改革は大改革のように見えながら、真の狙いは不良債権処理、つまり金融機関を国費で救済することにつきるのではないだろうか。勘ぐれば、規制緩和や公社公団廃止などは飾り物に過ぎないとも読める。その証拠に、改革の目的はデフレスパイラルの防止、景気回復、経済の再活性化だが、不良債権処理こそがすべての根幹だと公言しているではないか。

しかし、人間がゴミに埋もれて死滅すると皮肉られている昨今に、物が売ればよい、株が上がればよい、土地が流動化すればよい、円安容認すべし、四％程度のインフレが好ましい、いや数兆円の消費促進券が効果的、などとテレビ討論に登場する政策はすべて従来型経済の救済策にすぎない。そんなことで大丈夫だろうか。

小学生でもわかることだが地球は有限の星である。有限の上で無限の成長が可能はずはない。かならず限界に突き当たる。実はすでに突き当たっているのかもしれない。

ない。

地球の摂理と成長至上主義は相容れない。そうだとすれば消費拡大策などは解決にほど遠いのみならずトラブルメーカーの最たるものといえる。むしろ経済成長を諦め、消費を減らし、不景気でも生きて行ける方法を考えるのがほんとうの構造改革ではないだろうか。

しかるに物作りは限界にきたから、これからは情報化だという説がある。工業化は世界に富のインバランスをもたらした。情報化はそれに拍車をかける。

もともと近代文明は中世の安寧を打ち破って噴出してきたものである。インバランスを封じ込めることは近代文明の自殺行為である。共産主義がそのことを如実に証明した。かと言ってインバランスを放置しては世界の安寧は保てない。テロはますます猛威をふるうだろう。

進歩と安寧の兼ね合い、これこそが真の構造改革ではないだろうか。

日本の企業の構造改革

許斐 義信

何故日本の企業経営が国際競争力を失ったのか。ほんの十年弱前まで、日本の企業経営は世界のモデルだったはずだが。雇用問題が今日のように深刻になるとは思わなかった。年金ですら生涯保証できないとは、一体どうなっているのか。

数多くの疑念が晴れることなく、金融機関の不良債権処理問題や政府の財政再建問題が粗上に乗っている。しかし、仮にこの種の問題が解決できたとしても、前記した日本経済の本質的問題が解決されるとは思えない。日本企業を駄目にした要因の第一は、中国の人民元との為替レート問題である。中国へ工場移転の必要性が薄い産業ですら、こぞって中国投資のブームである。その原因は、日本政府の為替レートに対する通貨交渉力の無さにある。

第二の要因は、何としても過剰流動性を放置した財政の失敗にある。もちろん、企業経営者も経営姿勢の軽重を問われる問題だが、信用縮小の中で再度のインフレ期待とは、何と知恵が無いことか。為替レートへの調整力を持たずしてインフレ政策をとることは国際競争を無視した最も危険な方法なのである。経済環境は国際化の波にもまれて激変しているのであり、旧来のインフレ政策が仮にでも採用されれば、国際競争力は決定的に風化することになる。やってみなければ判らないなどといった言葉を安直に聞くわけにはいかない。

第三の要因は、実は第二の要因と深く関わりがある金融市場の問題なのである。金融機関が不良債権の償却問題に悩むのは、負債で長期の投資へ資金が投下されているからなのである。証券市場に対する不透明感から株式市場へ資金が回らないのは、それを食い物にした政治家の責任でもある。最近のスター政治家がNTTドコモやマクドナルドの株式を上場前に取得していると言われていたことなどは、もつてのほかで、市場の透明性を確保し、証券投資に係る信頼感を回復するためには絶対に避

けなければならぬ行為である。市場への信任が薄れていることは、リスク・マネーが供給されないことにつながり、必然的に銀行の資金が長期投資資金として供給され続けることになる。それには担保が必要なのであり、それが預金者へのリスク回避の保証となる。つまりリスクある株式投資を勇敢に行うためのリスク・マネーを供給できるメカニズムが決定的に重要なのである。

第四の要因も、第二、第三の要因と関係がある。それは企業会計の国際化といわれている時価会計の影響である。時価評価が避けられない間接金融に依存しながら、その時価会計を強要する。それを公認会計士は会計の国際化などといって仕事の増大をひた隠して喜々としている始末である。しかも資本家への情報公開である証券取引法は連結決算で、配当可能利益をベースにした商法は単独決算、そして税制も単独決算という矛盾がある。一〇〇%の支配権があれば連結納税も認められるが、問題は、まだ多く残っており、その中に商法と証取法との不整合という問題がある。ソニーが三上場子会社を上場廃止してまで、株式交換で支配関係を明確化した理由の一

つに、このトライアングル問題（証取法・商法・税法の不整合性）があると考えている。その理由は、当時のソニーでは本社の利益が少なく、配当可能利益の捻出に腐心せざるを得ないのに、連結決算の利益が多ければインカムゲインを期待している株主はクレームをつけることになるからである。配当は未処分利益の処分であるから期間利益にだけ影響されるわけではないとはいえ、この種の問題の根源は、金融・財政・税制の間の調和や整合性に関する政策が不在であるという以外の何ものでもない。

これだけいいかげんで、全体最適を考えられない官僚機構にもがっかりさせられる。企業でもその意味では同様で、現場のせいにする民僚の天国だし、経営者の経営姿勢や経営能力もさまざまに悪いケースも少なくはない。利権や権力が政治の世界でも企業の組織でも、大またで闊歩している。

我々が忘れ去ったものは毅然とした姿勢であり、その姿勢を通しきる勇氣である。その勇氣は、広範囲に物事

の真実に迫ることが出来るだけのジェネラルな視点であろう。日本企業再生への道は、実は時間軸の問題ではなく、本質に如何ほど迫れるかにひとえに依存している。

飛び出す蛙、ゆで上がる蛙

児玉 忠雄

失われた十年

二十一世紀に入り、初年はエリザベス英女王が嘆いたという「アナス・ホリピリス（ひどい年）」であった。そして二年目に入ったが、依然として日本はジャパン・ペシミズムが充満して閉塞感が強い。構造改革を強く主張する小泉首相は日本政治の負の遺産と桎梏しごくを打破できず苦闘している。二十世紀最後の十年で米国・EU・ロシア・中国など世界は大きく変化したにもかかわらず、日本は「失われた十年」に苦しみ自己改革の機会を失ってきた。「政治三流・経済一流」のエコノミック・アニ

マルは頼りの経済も二流に落ちて、アルゼンチンと比較され、自己変革力も怪しく国際的信用も失われつつある。

熱湯に放り込まれた蛙は、びっくり仰天して湯から飛び出すので助かるが、徐々に温められる湯に入っている蛙は、水温が危険なほど上昇しても気づかないでゆで上がって死んでしまう。終戦から最近まで日本人は飛び出す蛙だった。敗戦、石油危機、プラザ合意後の急激な円高など大きなショックに国民は驚き、心配し、解決に努力し、世界が驚くほど見事に対応し克服した。しかし現在の日本は違う。デフレスパイラル寸前の大不況、不気味な不良債権問題、金融不安、国際競争力の低下、産業空洞化の危機など日本経済が壊滅しかねない巨大な地殻変動に驚くことも忘れ、政官財民とも問題を先送りし抜本的対応策を打ち出せないでいる。どう考えても「ゆで上がった蛙」の態である。どうすればよいのか。

パラダイム・シフト

バブル崩壊後十年間のGDP年平均成長率が約1%と

いう異常な低迷を余儀なくされた根本的要因は何か。それは第二次大戦後、二十世紀後半に日本を奇跡の復興と高度成長に導いた政治経済の日本型パラダイムがグローバル化の中で急速に陳腐化したことにある。しかも、バル崩壊を契機として一気に顕在化した制度疲労を構造改革により修復すべきだったのに、過去の成功体験や既得権益のしがらみから先送りした付けが危機の十年をつくり出した。だが、この十年の苦々しいが貴重な失敗体験を反省材料として、また宝の山として、一気に構造改革をスピードアップして取り組めば二十一世紀の日本経済がグローバル経済の中で再び抜群のパフォーマンスを挽回することは不可能ではあるまい。ではそのポイントは何か。

第一は官尊民卑意識や官依存体質からの脱却である。戦後復興と高度成長期における主導の経済運営は有効であった。反面政官の依存と癒着体質を定着させた。この意識と仕組みは制度疲労を起し今や諸悪の源となっている。この倒錯した序列システムを百八十度転換し民を

頂点とし財・官・政の序列システムを構築し直すことが肝要である。戦時総力戦に備えた「一九四〇年体制」、自民党独裁体制を布き、田中・竹下・橋本と継承された「一九五五年体制」を打破することである。権力・金・派閥優先の族議員・政治屋・役人・談合企業を排除しタックスペイヤーたる市民が主人公として復権することである。

第二は、情報開示による透明性の確保とモラルハザードの肅正である。企業はグローバルスタンダードの奔流の中で会計ビッグバンが導入され連結決算・時価会計など情報開示が進められ株主代表訴訟、社外取締役、監査役強化などコーポレート・ガバナンス（企業統治）が改善されつつある。一方、政治・行政においては最近徐々に解明されつつある特殊法人の例に見られるように経営実態・政治行政プロセスの情報開示・責任所在の究明は著しく不十分である。市民・選挙権者の監視と関与が格段に必要となってきた。

第三は、志高い人材登用とリーダーシップの確立である。今回の行政改革の眼目は内閣と総理の機能強化にあ

る。族（賊）議員と官・業の癒着、ポピュリズムの政治姿勢から脱却し、高い志に基づいた政治的リーダーシップの発揮と内外への明確な情報発信が切に求められる。近刊の文芸春秋創刊八十周年記念二月号の「歴代総理の値打ち」によれば、田中角栄以来ここ三十年ほどは評価の高い総理はほとんど出ていない。民財官政各分野で志高く若い有能な人材を発掘し、思いきって登用することを断行すべき時期に来ている。「新しい酒は新しい革袋に」である。

思考のバラダイム

金 京 法 一

我々は常識の世界に住んでいる。朝、太陽が東から昇り、夕には西に沈み、明日朝また、東から昇ると信じて疑わない。他人も同様に信じていることを知っているの
で、この信念は不動のものとなる。同様に、現在は過去

の延長線上にあり、未来は現在の延長線上にあると信じている。その間に進歩発展や改良改善はあったとしても、一貫した因果律が存在することを疑わない。したがって、歴史をよく研究し、現在の状況を把握しておけば、未来は予測可能と信じている。「日本のエコノミストは勉強不足だから、彼らの景気予測はあまり当たらない」などと言うのも、その現れである。また、この世界は論理的に首尾一貫した構造をもった予定調和的なものであって、人間は科学の力によって世界の本質に限りなく近づくことが出来ると信じている。そして叡智を持った人間は世界を隅々まで支配し、さらにはより良い世界、戦争もなく、すべての人が豊かに暮らせる世界を建設出来る
と信じている。ユートピアは夢ではなく、理想なのである。

こういった思想は優れて西欧的なものであって、日本人にはそれほど馴染みのあるものではないかも知れないが、本家の西欧でも、十九世紀後半ともなるとかかる思想に疑念を抱くものが増えてくる。予定調和的世界観を

支えてきたのはニュートン力学やユークリッド幾何学であったが、相対性原理や量子力学、さらには非ユークリッド幾何学の登場によって、この傾向は決定的となった。そして神の似姿に擬せられてきた人間も、所詮は人間に過ぎないことを認識させられる。

さらに二十世紀になると、世界は戦争と革命に明け暮れ、現実の人間は神の似姿とはおよそ似ても似つかぬ醜悪な存在と認識されるにつれ、人間による人間観や世界観が根本的に変わってきた。人間は身体の他に精神（理性あるいは自意識）なるものを持ち、これが人間自身のみならず、世界を形作るという二元論的思考が支配的であったが、いまや人間は身体を媒介にして肉体的知的活動を行う一元的構造の存在者で、その身体自体が不必要に過剰なものであるため、本能ではなく、慾望に衝き動かされて限りなく争い、富を限りなく独占しようとする、そして世界は不動の因果律に支配される予定調和的なものではなく、不確実性と偶然性に満ち、未来は不可知であると考えられるようになってきた。言いかえれば、人間世界を支配する原理は、人間が勝手に考えた理想やイ

デオロギーではなく、身体を媒介に行動する不安定で不確実な人間そのものである、という認識が深まってきた。

いまや政府であろうと民間企業であろうと、長期計画の確実性をどれほど確信しているか疑問である。明日のために今日の問題解決に奔走し、テロや犯罪に対してはモグラ叩きしか出来ないのが現実である。小さい政府が世界的な傾向であるが、これとても不確実性と不可知性に支配される現実においては、国家大の長期計画に基づく政府事業よりも、市場原理に基づく民間事業の方が微調整が利いてリスクが少ないとの読みに他ならない。その民間事業といえども市場原理のみではやって行けない。半導体事業などはその典型例であろう。製品開発と設備投資に膨大な資金を必要とする一方、生産は猫の目のように変わる需要に対応しなければならぬ。最近のハイテク不況などそのあたりの難しさを示している。

小泉内閣の構造改革に、このように一般化しつつある認識が根底にあるのであろうか。理念や基本方針の堅持

は当然としても、施策に関する公約に固執するだけが可能ではない。明後日ではなく「明日のために今日の問題を直ちに解決する機動性」を視野に入れた改革を構想しているであろうか。いかなる改革も痛みを伴うものである。「思考のパラダイム」の定立なしには乗り切れない。

認識の構造転換

八木 大介

昭和二十五年ごろ、三菱商事の解体会社の大阪繊維部で綿糸布の輸出業務に携わっていた。繊維華やかなりしころで、特に輸出業務は忙しかった。新入社員の仕事は、毎朝海外から入電する注文電報を見て、紡績会社へ「払い下げる願ひ」に行くことである。当時は厳重な統制の上、生産不足のために完全な売り手市場だった。紡績会社へ頭を下げて売っていたかなければならず、当時紡績の担当者は、三十歳そこそこなのに天皇といわれるくらい

威張っていた。

ところがこの態勢が昭和三十年を過ぎると逆転した。繊維不況が始まったのである。中には相変わらず「今に景気が良くなれば、業界は持ち直す」というノー天気な紡績人もいたが、しかし、タイトニックはその後も浮上しなかった。

問題は、彼らが客観情勢の変化を一時的な景気変動と見誤っていたところにある。彼らは気付かなかったが、世の中はすっかり変わっていた。過剰になるほど日本の生産力は回復していた。単なる下痢だと思つて正露丸を飲んでいたところ、実は大腸がんになっていたようなものである。

「現在の日本の行き詰りも、一時的な経済不況や単純な景気循環ではないのではないか」

かつての日本は貧しい三等国だったが、今はすっかり豊かな社会に変わっている。GDPや国富、金融資産、外貨準備、海外投資残高、経済協力量、貿易額、あるいは生産力、国内市場、社会福祉など、どの指数をとっても世界最高のレベルにある。逆説すれば「これだけ満ち

足りた社会に、後何をつぎ込めばよいのか」ということである。

現在最大の問題は、消費不足といわれているが「カネがないから買わないのではなく、満ち足りていて買う物が無い」あるいは「(政府統制品など)割高のものも多く、馬鹿馬鹿しくてショッピングをする気になれない」のではないか。それが証拠にバーゲンセールやデパートの店仕舞いには怪我人が出るほど殺到する。現在の買い物は「不足している物を調達するのではなく、ショッピングを楽しむ」ことになっている。

もう一つの大問題は、失業の増加である。今年に入って失業者は三百三十万人、失業率は五・六%に達し、世帯主の失業者も百万人を超えた。小泉さんも今年はワークシェアリングなど失業対策に本格的に取り組むそうだが、これとて「失業は不景気で仕事が少なくなっている」せいだろうか。景気がよくなれば仕事が増えるのか。見方によれば、日本社会は事務の合理化や省力化、機械化、生産性の向上、ロボット化などが進み、シェアすべきワーク自身が減少している。たとえ今後景気が上向いても

仕事や雇用は増えず、むしろIT化などに食われて就業の機会がかえって減る心配がある。

「そうとすれば、失業問題はどうか解決すれば良いのか」結論から言えば、まずは仕事の質を高めることである。従来の未熟練、半熟練のクラリカルな労働から、プロのマネジリアルな高級職に移行する必要がある。この分野はまだまだ発展の余地があるし、国際的にも重要である(むしろ現在の失業者が求めている職種は、失業対策的な賃金稼ぎではなく、能力と生甲斐を燃焼させ得る仕事である。ここに大きなミスマッチがある)。

ただし、当面の緊急避難としては

- ① 失業保険を拡充し、当面の生活救済を行う。
- ② 老齢年金の支給を早め老後生活を保障する。
- ③ 社会的に評価されるボランティア業務を拡充し、生き甲斐充足目的の就職希望者を吸収する(アフガンの復興援助にリストラ失業者を五十万人くらいボランティアで派遣してはどうか)。
- ④ 老害防止を兼ね高齢者の有償就業を禁止する。
- ⑤ 文化芸術など人手を要する仕事やサービスの開発と奨

大野 暉

励を行う。

話を元に戻して、現在発生している問題の解決策を考えるには、よって来る原因の究明が先決である。大腸がんを下痢と間違っていたのでは、命取りになる。

現在の日本が遭遇している問題の根本は「豊かになっ
てすべてが充足している」ところにある。消費も仕事も
労働力も十分に間に合っている。景気自身現状が十分で、
正月の人出や福袋の売れ行きが消費の健在を示してい
る。経済界が求めている好況とは、無駄と浪費の多いバ
ブル景気であり、ラクして儲かる仕組みだが、もうその
ステージは過ぎた。現在失業中の三百三十万人を除いた
九五%の国民は現状で満足している。

現在日本が必要としている構造改革とは、貧しい社会
から豊かな社会への仕組みの転換であり、まずもって頭
の切り替えである。そこに気付かないと小泉内閣の構造
改革も失敗に終るだろう。

私の住むすぐ近くを谷沢川が流れている。

「その下流が等々力溪谷です」といえば、素晴らしい
住宅地を想像されるだろうが、昔は平坦な畑の中を一本
の川が流れていた。付近の家を見ると石垣が積まれてい
る。昔はきつと氾濫したのだろう。今では深く掘り下げ
られ立派な護岸工事がほどこされている。この川で気にな
るのは、川端の木が大きくならないことだ。五、六年
毎に木を切っては訳の分らぬ護岸工事を繰り返してい
る。少し上流では二十年以上も工事はなく、古い桜並木
が名所になっている。私には本来なら構造改革でなくな
った方がよい土建会社や造園会社を税金で助けていると
しか思えない。

「構造改革の過程では、さまざまな痛みを伴うかも知
れないが、私は経済政策と社会政策は峻別すべきだと思

います。弱い人たちを支える社会政策には万全を期すべきですが、時代遅れになり存在理由を失った産業や企業を助ける経済政策は取るべきではないと思います。どうせ潰れる運命のところは市場から退場してもらおうが、そこで働いていた人たちは助ける、それが政治だと思いません」

ある雑誌の対談での高村正彦元外相の発言である。高村派が積極的に小泉首相を支持している訳ではないだけに、永田町のもの見方がここまで変ったかの感を深くする。

この論理を当てはめれば、もう必要のない護岸工事や切らなくてもよい木を切って新しい苗木を植える造園業者は早く市場から退場しろということになる。我々の周りを見回すと、まだまだ不思議な現象は多い。お金を貸さない銀行、横並びで政府の公式発表を右左に流すマスコミ。今や企業の意識が政治家よりも遅れてしまったようだ。「構造改革」のために企業の「意識改革」がまず必要なのではなからうか。

そんな企業や企業と不可分の関係にある我々を当惑させる大事件が昨年九月十一日に起こった。米国の同時多発テロ事件である。

今はまだ、「テロはけしからん」というブッシュ大統領の主張が世界を振り回しているが、一歩退いてこの結果を冷静に眺めると、考えさせる問題が浮かび上がってくる。

現代のバベルの塔にも比せられるワールドトレードセンタービルがこんなにも簡単に跡形もなく崩れ去ったのは何故なのか。そこにもし神の意志を見るとすれば、それは二十世紀の物質文明、つまり米国流の使い捨て文明に対する警告ではないのだろうか。

一九八九年の東西冷戦の終結後、世界の関心は地球環境問題に向けられるようになった。我々の乗る宇宙船地球号の環境負荷が極限に近づきつつあるとの危機感である。

リオで開かれた世界環境会議以降、「サステイナブル・デヴェロップメント」つまり「持続可能な開発」という言葉が、人類の未来を語る「キーワード」となった。

その後京都では、地球温暖化の防止が議題となり、炭酸ガス発生量を削減しようという動きになった。この動きに雑音を入れているのが米国で、その国で今回の事件が起こったということは、実に象徴的である。

また、マスコミは「経済がマイナス成長だ」と大騒ぎしているが、これも環境負荷という視点から考え直すべきであろう。米国や日本のような経済大国が毎年五パーセントもの成長率で成長を続けたら一体どんな結果になるのか。

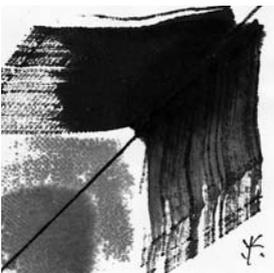
米国の場合は、「もの作り」では日本に敵わないと方針を切り替え、IT革命を成功させて、ソフト中心の成長となっているので、地球環境への影響は低いかも知れない。しかし、日本では、相も変わらず「もの作り大国」などという言葉が大手を振って歩いている。「ものを作る」ということは、エネルギーや資源を消費して、地球に負担をかけることになる。「構造改革」という言葉の中には、これからは地球に優しい方向に産業を変えて行くのだ、という意味も含まれている。そのことを日本人は「持続可能な開発」という言葉ともどもさっぱりと忘

れているようだ。

炭酸ガスの発生許容量が各国間の売買の対象となるような時代が来れば、それを解決する技術力が各国の優劣を分ける時代が来るかも知れない。新しい技術開発競争つまりソフト重視の時代が始まろうとしている。

青木建設が倒産した時に、小泉さんは少しもあわてず、「構造改革が進めば、時代遅れとなって存在理由を失った企業は倒産するでしょう。今回の事件は構造改革が一步進んだ証しです」という趣旨の発言をしている。

昔の政治家のように日本的なしがらみにとらわれない本音の発言だ。前に述べた高村発言でも「セーフティネットを個人には張っても企業には張りませんよ」とはっきり発言している。政治家の意識の変化は喜ばしい。



構造改革よりもリセットを

村田 孝四郎

人類の経済活動が盛んになるにつれ、地球環境が破壊されてきた。開発の名のも行われる自然破壊、生産の名のも行われる環境汚染や地球温暖化等々はどこまでも知らない。もう、来るところまで来た感だ。自然を侮るものは破滅する。

他方、人類の医学的進歩はついに神の領域に手を伸ばし始めた。臓器移植、遺伝子操作、クローン、幹細胞培養。もう超えてはならない線を越えてしまったようだ。神を怖れぬものは天罰を受ける。

人類は生産活動を抑えなければならない。もうこれ以上の贅沢を許してはならない。いま先進国で食べ残しや売れ残り、過剰生産、形状不良などの理由で捨てられている食料は、世界中の飢餓民族を食べさせるに十分の量だという。

大量生産、大量消費から生ずる大量の廃棄物は、ほど

なく捨てる所がなくなるだろう。山に捨てれば植物が死ぬ。海に捨てれば魚介類が死滅する。

エネルギー源も木から石炭、石油、ガス、原子力と、より大規模かつ効率的になってきた。しかし、大量に放出される窒素酸化物は大気を汚染するし、原子力の利用は思いもよらぬ大惨事を招きかねない。

これほど生活水準が向上し自由を謳歌しているにもかかわらず、少し景気が悪いからといって、構造改革と称しさらなる経済発展を計ろうとしている。だが、これは邪道である。逆に生産を落とし消費を落とし、環境を守ることこそが先決である。

生活水準をリセットして一〇〇年前に戻してみてもどうか。一〇〇年前だって二〇〇年前に比べれば、どれほど便利で豊かになったことか。自動車も飛行機もテレビもエヤコンも要らない。パソコンも携帯電話も要らない。紙オムツ、ペーパータオル、ペットボトルなど使い捨てはもつてのほかだ。

一汁一菜に甘んじ、繕ったものを着よう。ものを大切に、壊れたら修理して使おう。電気も水もガスも節約

しよう。頭だけでなく体を使おう。手足を使おう。これが自然の理想の姿なのだ。いま必要なはまやかしの構造改革などではなく、行動改革なのである。清貧への意識改革なのだ。

そうは言うものの、人間、一度生活の風呂敷を広げたら、もう縮めることはできない。いったん快楽を味わえば、それを捨てることは難しい。悲しいかな一〇〇年前に戻ることは到底できないだろう。

人間は成長する。そしてやがて死ぬ。人類も成長し発展する。そしてやがて滅びる。特に近年の発展速度は幾何級数的であり、何か線香花火の最後の輝きを思わせる。そろそろ人類は地球の舞台から消え去る時が来たようだ。

石原慎太郎都知事は「人類が消滅して鳥やゴキブリばかりになってしょうがない」と言った。とんでもない暴言である。思い上がりも甚だしいと言えよう。この地球は人類だけのものではない。あらゆる生き物のためのものだ。

人類がいなければ、この地球はどんなにか美しかろう、

どんなにか清らかであろう、どんなにか静かであろう、どんなにか平和であろう。人類が出現する以前の地球は美しかった。空や海は飽くまでも青く、大地はみずみずしい緑で覆われ、あちこちに清らかな小川が流れ、空には無数の色とりどりの鳥たちが飛び交い、地上には大小様々な動物たちが群れをなしていた。梢を渡る風は爽やかで心地よく、静寂そのものであった。

いま、空はスモッグで覆われ、海は赤潮で酸欠状態、大地はますます砂漠化し、川はコンクリートで固められ、雉も鴛ももう飛んでいない。蛇やトカゲはどうなったのか。淋しくも悲しい。

人類のせいで多くの生物が絶滅した。ドードー、旅行鳩、袋狼、日本川瀬などをもう見ることはできない。今、絶滅の危機にある動物は、哺乳類が一〇九六種、鳥類が一〇七種など、合計三二九五種にのぼるといふ。

人類ほど性悪な生物はいない。騙し、妬み、僻み、意地悪、告げ口、非難、謀略、軽蔑、卑劣、我欲、わがまま、見栄、独占、驕り、贅沢、浪費、殺し合い。すべて人類特有のものだ。

数億年前、恐竜が地球を荒らし始めて神の怒りを買ひ、結局絶滅させられた。人類も地球環境が修復不能になる前に、無欲で平和な生物たちのために主役の座を譲ろうではないか。

二〇二八年十月二十六日に直径一・六キロの「一九九七XF11」という惑星が地球に衝突する。この時、人類は滅亡する。そう、もう神は地球のリセットボタンを押ししてしまったのである。

江戸の世も今も変わらぬもの

本田 克夫

江戸時代、大消費地の江戸や大阪に向けての物流は、ほとんど海や川を輸送路として船が使われた。当時は道路が悪かったし、荷車は軍事上の理由で江戸市内以外は許されなかった。陸上交通は馬だけが頼りだが、馬の背に積めるのは米二俵がせいぜい。三俵や四俵も積むと、

四キロくらい行くと馬がへばってしまふ。それに比べて船は、どんな小舟でも二十俵や三十俵を積んで長距離を運べるし、五百石船では千二百俵も積めるから馬の六百倍にもなる。したがって、舟運(しゅううん)は想像以上に組織化され、発達していた。

江戸時代は年貢米や物産を送るため、各地の川の上流から下流域にかけて、あちらこちらに川の港(河岸)が造られ賑わった。しかし、河岸問屋と幕府が結託して新規参入業者を排除したり、新しい輸送ルートが開発されても使用させない、など閉鎖的な構造が出来上がり、経済発展を阻害するようになっていた。

私は数年前、鬼怒川と利根川の一部の舟運について学者や郷土史家たちの研究成果を編集したことがある。その中から、このような人間臭い事例をいくつか知ることができた。

もう少し詳しく紹介すると、元禄時代ころから幕府の台所が苦しくなりはじめ、ニュービジネスの河岸問屋に目をつけて運上金(税金)を課すようになった。幕府はその見返りとして河岸に公認のお墨付きを与える。公認さ

れた河岸の間屋たちは、近くに新河岸を造ろうという動きがあると幕府に反対を訴え、幕府は公認した手前、既成の河岸を擁護して、新しい出願を許さない。

江戸の食文化が豊かになり、地方の魚が江戸に運ばれるようになる、新鮮さが勝負だけに舟では時間がかかりすぎる。そこで、途中の一部分だけ陸上輸送してショートカットする新ルートが工夫されるが、これも河岸がさびれると間屋が反対し、幕府も公認河岸を通らないというそれだけの理由で却下してしまう。しかし鮮魚輸送業者もさるもの、別の抜け道を次々探し出し、あの手この手で違反と規制のイタチごっこを演じる。

興味深いのは、日本地図の測量をしたあの伊能忠敬が若いころ、佐原村惣代四人の一人として江戸まで行き、村の河岸にかかる運上金の免除を陳情していることだ。これに対し幕府は、それなら佐原村の河岸は認めない、今後の通船には隣河岸の送り状が必要だと反撃。忠敬らは、やむをえず毎年二百五十文を払うからと譲歩したが駄目。倍の五百文でも拒否され、とうとう幕府側から、はじめの二百五十文の六倍の額を言い渡され、泣く泣く

支払ったと忠敬自身が書き留めている。

このように、江戸時代を通じて、幕府の規制・保護、河岸間屋の利権というトライアングル構造は改革されることはなかった。維新後、明治政府は、この構造を打破して自由競争にまかせることにした。そのため新河岸が雨後のたけのこのように誕生したが、自由競争の厳しさ、ほどなくその大半が消え去ってしまった。

ここで、話は現代に飛ぶ。先日、新聞を見ていたら、小泉首相が取り組んでいる行財政改革について、評論家の田原総一朗氏がこんなことを言っていた。

「小泉さんの意識では明治維新をやっている。自民党の幕藩体制を壊さなければと本気で思っている。特に最大のターゲットは、官僚主導の政治から政治家主導の政治に戻すことだ」

官僚主導の政治で思い出すのは、バブルのころ世界的に有名になった『ギョーセイシドー』とか『護送船団方式』という言葉。『行政指導』は官僚による業界規制、『護送船団方式』は一番弱い企業に全体を合わせる業界

保護策。どちらも官僚と業界との密接な関係を示す言葉だ。財務省がまだ大蔵省といつていたころ、局長クラスが汚職があった。彼らは銀行や証券界を『行政指導』し『護送船団方式』で保護していたが、その裏で高級クラブやゴルフ場の接待を当然のように受けていたという。業界も旨味があったから接待したに違いない。

なんのことはない、江戸時代のトライアングル構造にそっくり。江戸時代も平成の世も内容こそ違え、やっている図式は同じことだ。行政側は規制と業界保護に余念がなく、業者は役所にもたれかかる。これでは日本経済が活気を失ってしまうことは火を見るより明らかだ。

小泉改革は、こうした構造に風穴をあけようとしている。世界経済がグローバル化している中で、日本が落伍しないために、これは急務だろう。

ただ、体制内の改革が果たして成功するのだろうか。幕末でも、幕臣たちが内部からの改革を図ったが、結局成功しなかった。前述の河岸の規制撤廃という些細なこととさえも、幕府体制が崩れて明治の世になり、初めて可能になったのである。

そんなことを考えると、与野党の垣根を越えて改革派が集まるとか、政界再編成が必要な気がする。いずれにせよ、わが国だけがグローバル化経済から取り残されないよう構造改革を押し進めてほしいものである。

多様なヨーロッパの大転換

今 川 確 郎

ミラノに七年、ローマに三年、計十年間のイタリア駐在中は、北欧、東欧を含む欧州各地に出張、旅行する機会が多かった。学生時代よりヨーロッパの歴史と文化には特に興味を抱いていたので、二十世紀後半の変動する欧州の実情と推移を体験したことは、実に有益だった。

当時いわゆる西欧陣営に属した十八か国の総面積は、米合衆国の四〇％程度だった。米国内ではどこへ行っても通貨は同じだが、欧州では国が変わる度毎に両替が必要で、面倒なこと甚だしい。他国通貨でも支払いが可能

なホテル、レストランもあったが、交換率の面ではかなり不利。一週間で数か国を回った出張では、国別にした硬貨用の財布が必要だった。

九三年夏、ドイツのニュールンベルクからレンタカーで、湖の中間がドイツとスイスの国境となっているボーデン湖に向かった。宿泊を予定していた湖畔のリンダウは、バカンスシーズンだったのでホテルはどこも満杯。

「町はずれの国境近くなら空室があるだろう」と言われ、一軒一軒当たったが状況は同じ。九時を過ぎてしまい、車中での仮眠も覚悟した。

間もなく国境だったが、日本の旅券は信用されているのか、写真を見ただけでG Oのサイン。十分ほど走り、やっと中級のホテルを見つけた。「シングルなら一室あるが、予備ベットを入れても、十分スペースがありますよ」とのこと、ホットした。十時ごろ、一階のレストランで遅い夕食を済まし勘定書を見たところ、金額はオーストリア・シリング。てっきりスイス領と思っていたが、何とこの町はオーストリア。回国通貨を所持していなかったのも、ドイツ・マルクで支払った。室に戻って

地図を見ると、リンダウからリヒテンシュタインに至る約五十キロはオーストリア領で、一部はボーデン湖に面している。リヒテンシュタインは、イタリア領内のサンマリノー、仏西国境のアンドラ同様、独立国とは言え、自国の通貨はない。これら小国にもそれぞれの歴史、伝統、文化があり、欧州の多様性を具現化している。

西欧では半世紀前まで、特に仏独間の対立、抗争が繰り返され、相互の憎悪、不信任は並大抵のことでは解消しないと思われていた。

しかし、四五年に第二次大戦が終結し、国際連合が成立してからは西欧は大きく転換した。五七年、早くも欧州経済共同体（EEC）が発足し、六七年には欧州共同体（EC）が成立。これら諸国間の経済、政治、社会の結束は徐々に強まってきた。通貨統合に向け、九五年には統一通貨名をユーロ（EURO）と決定。加盟十二か国では、今年初より国内でユーロの現金流通が開始された。三月からは、それぞれの自国通貨は姿を消してユーロ一本建てとなる。

西欧各国は道路、鉄道、空路が縦横に発達しているので、一日で数か国の訪問が可能である。通貨交換の必要がなくなっただけでもユーロの実現は新しい歴史の始まりだ。近い将来、英国、スイス、スカンジナビア三国も加盟すると予想されている。

九五年に発効したシェンゲン条約加盟の九か国の市民は、国境での旅券、身分証明書の提示なしに、自由に行き来が可能になった。二〇〇四年のオリンピック開催国、ギリシャも参加予定である。「EU市民の統合」が最終的とされている。通貨が統一され、国境が名目的になれば、いづれ政治統合に発展し「欧州合衆国」が実現するであろう。

一方、東欧諸国にとっては、一九三九年のナチスドイツとソ連軍によるポーランド侵攻、占領に始まり、九一年のソ連解体までは、独裁、全体主義の外国による支配の半世紀だった。

特に文化、工業の面で東欧一と自負していたチェコは、反ソ、西欧志向が強く「プラハの春」を謳歌する一時もあった。これも六八年八月に、強力な戦車隊を中心とす

るソ連軍により蹂躪じゅうりゃんされてしまった。数か月後に出張した時は、街頭は薄暗く首都全体が沈滞していた。屈辱感を抱き、打ちひしがれた表情の人たちが多かった。

九三年夏にプラハを訪れた時は、チェコでは民主化が進み、ブタベスト同様、西欧、米国、日本からの観光客が多く、活気に満ちていた。九一年以後、ポーランド、ハンガリーでは非共産政権が成立し、バルト三国も民主的独立国家となった。旧ユーゴスラビア解体で独立したクロアチアを含め、これら諸国はEU加盟、さらにはユーロ圏加入も希望している。

種々困難、障害はあるだろうが、今世紀半ばごろまでには、東欧諸国を含む「大ヨーロッパ」の統一通貨、政治圏が実現するだろう。

「日本の発展」をさらに維持しよう

刀祢館 正久

日本の現在の低迷は、明治初期の近代化への胎動、第二次大戦の敗戦に続く三度目の国難の時期に当たると指摘する人が多い。遠く十三世紀の蒙古襲来まで遡って「四度目だ」という人もいる。筆者は、もう少し幅広い視点で吟味したい。日本民族は一八六七年の明治維新のころに、それまでに蓄積された、発展のための巨大なエネルギーを爆発させた。それ以後、現在までの百三十年の間、大きな発展の“うねり”の中にいる、と考えるのだ。

問題は、現在の日本は、長い歴史の流れの中で、発展のエネルギーを失って本格的に下落しつつあるのか。それとも今の低迷は、大きな発展の“うねり”の中の、“さざなみ”の一つに過ぎないのか、である。

個々の人間は、一生の間に幼年期、成長期、成熟期、老年期などいくつかの時期を経過する。どんな頑強な人

間でも、何十年も成熟期のままで過(す)することはできない。必ず老年期は来る。民族や国家も、個々の人間と同じように必ず成長期、成熟期、老年期がある。

その例は、世界史の中でも枚挙にいとまが無い。紀元前三千年ごろに栄えたメソポタミア文明は、今日その面影はない。ギリシャやローマは、中世以降は世界史にはほとんどその名を留めない。オランダ、スペインが世界を舞台にしたのは、ほんの一時期に過ぎなかった。英国は一五八八年にスペインの無敵艦隊を撃破し、以後、産業革命を経て七つの海に君臨したが、二十世紀なかば以降は、急速に国力を失い、現在はEU(欧州連合)の一つに過ぎない。

興亡の最も極端な例は、モンゴル大帝国だろう。十二世紀の始め、ゴビ砂漠の一角にテムジン(後のチンギス・ハーン)率いるモンゴル国(後の元)が出現し、中国全土から西はヨーロッパ大陸に至る壮大な大帝国を築き上げて、西欧から“黄禍”と恐れられた。だがその王朝は、わずか百年ほどしか続かなかった。これらの諸国は、個々の人間でいえば成熟期を過ぎた、というべきだ

ろう。

これらに比べ、一七七六年に建国した若い米国は、二十世紀以降に際立って頭角を現わし、いまや世界でも唯一の超大国に成長している。まさに成長期を終え、今や成熟期の真つ最中である。中国はその長い歴史の中で多くの紆余曲折を経た後、現在は再び成長期に入りつつある。

以上を総括すれば、人類の歴史はパクス・ローマーナ（ローマの力による平和）からパクス・ブリタニカ、そして今やパクス・アメリカナの時代に入った、といえる。

このような栄枯盛衰は、國や民族だけではない。地域についてもいえる。そのいい例は、日本史における尾張・三河地方（今の愛知県）だ。戦国時代には、この地域には織田信長、豊臣秀吉、徳川家康らが次々に登場し、ついに家康は天下を平定した。また幕末には、いわゆる薩長土肥（薩摩、長州、土佐、肥前）の四藩に勤王倒幕の志士が輩出して、明治維新に大きな貢献をした。長い日本の歴史の中で、これらの地域にこれだけの人物が集

中したのは、いずれもある特定の時期だけだ。

以上、歴史上の周知の事実を長々と記したのは、次の三点を改めて再確認するためである。

一つは、國や民族または地域は、蓄積された巨大なエネルギーを爆発させて、ある時期に大発展してきたという歴史的事実がある。日本における明治維新以来の近代化への脱皮と成長も、まさにその顕著な例の一つである。

第二点は、日本のこの大発展は、かつてのモンゴル大帝國のような百年程度の短期間で終わるのか、それともローマ帝國や英國のように数百年も継続するような壮大なものなのか、という問題提起である。もう一つは、この視点で見れば、現在の日本は、まさに短期と長期の分岐点に立っているのではないか、という見方である。

現状の低迷から脱却し、明治以来の巨大なエネルギーをさらに発展させるには、どうすればよいか。もちろん、あらゆる面で旧来の陋習を打破し、体質を徹底的に改善することが必要だ。その中でも、特に教育の改革を強調したい。戦後の五十年は、経済が重視された半面、教育がなおざりにされてきた。最近の経済の破綻の一因とさ

れる金融機関のモラル・ハザードや、経済人の倫理観の欠如の根源の一つは、過去の教育の欠陥にある、と筆者は確信する。

日本人の素質は極めて優秀だ。明治以来、その優秀さで多くの課題を克服してきた。最近の教育では、落ちこぼれ“の救済に力点を置くあまり、優れた才能を伸ばすことが、おろそかにされ過ぎているのではないか。明治以来の日本の発展のうねりをさらに拡大し、それを次世代にバトン・タッチするためにも、今こそ教育改革に本格的に取り組むべきだ、と考える。

教育の成果が出るのは最低三十年はかかるという。しかし遅過ぎるということはないのだ。

ピアスの穴あけます

石川 正達

近くに新しく出来たクリニックへ行った。受付の傍ら

に貼り紙がしてあり、「ピアスの穴あけます」とある。耳だか鼻だかに穴を開けて飾りの輪っかをはめるお手伝いを病院がしているようだ。中学生の頃教えられた孔子の言葉が頭に甦った。

「身体髪膚これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」という言葉である。仲間うちでは「寝台白布父母に受く、起床せざるは孝の始め」などと言って寝坊、遅刻の言い訳としたものだが、教えを守って、身体髪膚を傷つけないように努めた。ところが今や病院が体に傷つけることを勧める世の中となっている。

パスカルが「クレオパトラの鼻がもう少し低かったら世界の歴史は変わったろう」と言ったように、目鼻立ちのいいのが美貌の条件だ。低い鼻を高く変えたり、一重脣を二重にしてくれる美容整形が流行る。乳房にシリコンを注ぎ込んで豊胸を売りものにするタレントも現れた。厚底靴や茶髪等々、いずれも自分を美しく見せようという偽りの仮面に過ぎない。

この二十一世紀、虚飾と欺瞞に満ちた社会に成り果てているのではあるまいか。それを象徴するように二つの

事件が起きた。一つは雪印食品の輸入牛肉偽装事件。食品会社のトップを走る企業がこれである。北海道産が簡単に熊本産に化けたりもする。雪印に限らない。食品の品質表示のごまかしも次々と暴露された。儲けのためなら嘘も方便と心得る企業が世に満ち溢れている。

もう一つはアフガン復興支援国際会議から一部NGO（非政府組織）が直前に排除された事件。鈴木宗男衆院議員の圧力があつたかどうかをめぐって、田中真紀子外相と野上義二事務次官ら外務省官僚との言つた言わぬのウソ論争が始まり、国会審議が紛糾した。

結局、小泉首相は田中外相、野上次官の更迭、鈴木議員の衆院議員運営委員長辞任で、けりを付けた。落語の大岡裁きの言葉を借りて「三方一両損」と言われた。言葉の誤魔化しである。落語では大工が落とした三両を左官が拾って届けたが、大工が受け取らないので越前守が一両足して二人に二両ずつ褒美を与え、三方一両損と裁いた。善人同士の紛争に対する裁きである。今回のNGO排除では悪いヤツがちゃんとしたのだ。それが何故裁けなかったのか。

一部NGO代表の「お上の言うことはあまり信用しない」と新聞で語ったことが発火点になって、野上次官ら外務当局は外相に報告することなく排除を決めた。鈴木議員の脅しは別にして、責任を取らせるべきは、外相をないがしろにした事務当局の野上次官らであつて、排除を撤回させた田中外相は外相の資質に問題があつたとしても、この件に関しては、むしろ褒めるべきであつたろう。

今回の更迭劇は政権基盤への波及を避けるための欺瞞に満ちたご都合主義の解決であつた。日本新聞協会が毎週発行している「新聞協会報」に紙面展望という欄があり、全国各紙の社説の論調を紹介している。今回の更迭劇を扱った展望（全国で五十五本の社説）では、小泉内閣が掲げる構造改革が本物かどうか、その行方を懸念する論調が目立ったという。ある新聞は「傷を負つてなお、改革者の道を取るか、妥協の道を取るか。：気になるのは、首相が改革者を装いながら、いわゆる抵抗勢力と水面下で手を握って、延命を図るのではないか」と観測している。同感である。

「聖域なき構造改革」を旗印にスタートした小泉内閣も、内閣支持率が五〇%を割るまで低下しては、族議員集団の抵抗勢力に勢いをつけ、構造改革は、美容整形に譬えれば「ピアスの穴を開ける」程度に終わるに違いない。

しかし、どうにも納得できないことがある。小泉政権は、デフレから脱け出すために物価がこれ以上下がらぬよう努めると言い、インフレ政策を是認しようとしていることである。物価下落は果たして悪いことなのだろうか。

わたしたちは若いころ『敗戦』という近代最大の構造改革を経験した。物のない社会、預金は封鎖され、闇市場頼みの生活。インフレは日毎に加速して止めようがなかった。このインフレを利用して肥った業者もあるだろうが、消費者としての経験から、インフレは真つ平なのである。

日本は世界で最も物価の高い国としてランクされている。その国がなぜ物価を上げるインフレ政策を取ろうとするのか。インフレは銀行や大企業にとって、抱え込ん

でいる不良債権が目減りして助かるかも知れないが、一般庶民は物価の下落を歓迎している。物価を世界水準並みに下げながらの構造改革でなければならぬ。

いま巷には物資が溢れ、若い人たちの多くが高いブランド品を身につけ、デフレが何処にあるのかを疑わせる。貧富の差が激しく開いていることは確かだ。インフレによって、この差をますます広げるような構造改革ならお断わりである。デフレ万歳。(おわり)



耳が遠くなってきた

榎本 喜三郎

行き付けの病院で耳の検査をしてもらったところ、「貴方の年齢からいうと、このくらい聞こえれば、平均以上ですよ」と医者は言う。そう言われてみると、相談しようと思っていた補聴器の話も、その時は持ち出せなかった。だが確かに劣化はしているらしい。カルテに添付されている表を見ると、右も左も同じ程度に聴力を示す線が下がっている。

その時からすでに数年たっている。その間医者に言われて、同じ病院で聴力が衰えるのを防ぐための治療を受けている。白内障や緑内障の手術や治療も受けているし、血圧や糖尿病予防の手当ても受けているので、月に一、二回は通院している。それに耳の治療を加えても、さして時間も費用も変わりはない。耳の治療をしてくれる医

者は別の親病院から派遣されてくるので、半年ぐらいで交代している。病院は私の住む調布市にあって、家から歩いて十五分ぐらい。シルバークラスを使って、バスに乗っても、前後に数分ずつ歩くので同じくらい時間がかかる。

耳の医者は、この治療はなるべく頻繁に、回数を増やした方がいいと言う。入り口の受付機に受診カードを入れて、受診する科、あるいは薬だけをもらう科を指定すると、自分がそれぞれの科の何人目か印字されるので、どのくらい待つか見当がつく。毎行く日には二つ、三つの科を受診するが、一時間半か、長くて二時間で全部済んでしまい、帰りにちよつと離れた薬局で薬をもらって帰宅するまで最大限三時間で済む。

耳の治療は簡単で、診察台に乗って、耳を医者に預けると、両方の耳の方はちよつと覗いて見るだけで何の手当てもしない。あとは鼻の中へ先に薬のついた綿棒を二、三取り替えて差し入れるだけ。最後には私に管の一方の

端を持たせて耳にあてがわせ、医者が他の端から鼻の中へ空気を送り込むと、耳の中でゴーパーという音がする。これは多分耳管と鼻を繋いでいる細い管を押し開いた空気が鼓膜に当たると音らしい。これで空気が鼻から耳に抜けたことが判る。これを両方の耳でやる。そのあと診察台を離れてちよつと場所を変えて、深呼吸をする台に移る。三分間の電気が消えると治療はすべて終わりである。全治療工程を通じて特に痛いことも、気味悪い思いをすることも無い十分足らずの治療で、薬も与えられない。

初めて耳の治療を受けてから三年余になるが、聴力は回復もしていないし、さりとて著しく悪くなったという気もしない。一対一の会話にはほとんど支障がない。といっても自分の現在の生活の中には、毎月数回は数人から十人前後、時には二十人以上が参加する会合がある。ボランティアで参加している国際協力を主とする集まりとか、学校のOB会の幹事の集まりとか、ペンクラブの同人の集まりである。中には女性が盛んに活動している集まりもある。

これらの集まりで、スピーカーや、マイクなしでしゃ

べる人の席と私の位置によっては、甚だ聞き取りにくいことがある。殊に高音の女性の声が聞き取りにくい。だから、こうした集まりには、開始時間より二十分くらい早目に会場に着いて、スピーカーの位置の見当をつけて、自分の席を決めるようにしている。

マイクを使っても、使い方が下手だと、音がちゃんと増幅されず聞こえないことがある。自分に聞こえないからと言って、他の人が皆おとなしく聞き入っているのに「もう少し大きな声で」とか、「マイクをもっと口に近づけてください」などと注文をつけるのはばかられるので、なかばあきらめておとなしく聞いている。いや聞こえないのだから、聞いている風を装う次第である。

補聴器のことで医者に相談すると「あなたはまだ補聴器を使う必要はないのですか」と言われる。

耳鼻科の壁には「補聴器の御相談に応じます」と書いた紙が貼ってあるが、医者の対応は甚だ素つ気無い。

日本人は眼鏡をかけるのは別に老人臭くなるとは感じないが、補聴器をつけていると何となく老人扱いされるような気がする。眼鏡も補聴器も見ると、聞くの五官の助

けとなるもので、これら二つの機能に差はないものをもど
うもおかしなものだ。がともかく医者もまだ年並み以上
の聴能力があるというのだから、本当かなと思いつながら、
いまだに補聴器の世話になっていない。

そこで近ごろ考えたことがある。この年(八十八歳)に
なつて、家庭内でも、外に出ても一対一の会話には特に
不自由なく、ただサークルに参加して何か社会活動をす
るときに、不自由さがある。何となく「お前はもうそん
な会合に出て社会活動をするという歳ではないんだよ」
と、諭されているような気もしてくる。といつても、今
すぐに全部止めてしまふわけにはいかない。さてどうし
たものか。

猫の通夜

岸 本 義 生

猫のブラッシーが死んだ。

十月末の日曜日、前夜から降り始めた冷たい雨の中
のことだった。雨は一日中続いた。遺^やらずの雨とでもい
うのだろうか。

ブラッシーは本来、野良猫である。我が家に入入りし
ていた黒猫ハスキー(これも野良猫だが)が、六年前に
死んだ翌年に三匹の子猫が揃つて来るようになった。

一匹はアメリカンショートヘヤーとの混血、一匹は普
通の赤虎で、ミイミイと泣くから「ミイ」と呼ぶことに
した。残りの一匹は赤虎だがヒマラヤンとの混血で、首
まわりには白い毛がフサフサとしており、尻尾がまるで
刷毛のように太いからブラッシー(BRUSHY)と名
づけた。

我が家では、かれらをレッツゴー三匹と呼んで、たま
に餌を与えていたが、アメリカンは姿を消し、残る二匹
が常連になっていた。その二匹の顔はそっくりで、決ま
って二匹で現れる仲良し兄弟である。餌にありつくと昼
寝をして何処かに消える。夜のねぐらは分からない。

武蔵野市に住んで二十五年になるが、その時から我が
家に猫の出入りの絶えたことはない。移り住んで間もな

く、野良猫のあまりの多さを訝った私は、古くから住んでいる人に理由を聞いたことがある。

そのはずである。我が家と隣家の土地にはペットフードの工場経営者の家が建っていた。自分の所でも数匹の猫を飼い、また野良猫にも試作品を与えていたが、引越しの時に猫はそのまま残して行ったらしい。犬は人につき猫は家に付くとの言葉通りに子孫が住みついたというわけである。

数えてみると、この二匹は我が家の四代目の「そと猫」である。だが彼らはペットフード屋の子孫ではなく、生家については、およそ見当はついている。

私と家内が「カルカン横丁（猫の餌のブランド名）」と呼んでいる通りがあり、そこには昔から猫を飼っている家が多く、その中に雌猫を飼い子猫を生ませて雄は捨てるらしい、という近所で迷惑がられている家がある。かつて顔を合わせた時に「お宅の猫らしいのが、よく我が家に来ますよ」と挨拶代わりに話したことがある。「そうですか」と木で鼻をくくったような返事だったが、特に反応もないので、そのままにしていた。

そして五年が過ぎた。

ブラッシーはジャンプが得意で飛んでいる蝶をよく掴まえる。庭や道路の掃除を始めると、何処からともなく現れ落葉の横にゴロゴロと横たわる。ホウキの先で撫でてやると、さも心地よさそうに寝返りを繰り返し、もつとやってくれ、とせがむ愛嬌者である。これが日課になっていた。道行く人は「可愛い猫ね」と声をかける。

三週間ほど前から彼は足をすこし引きずっていた。何故そうなったのか知る由もないが、快方に向かっていたので安心していた。

ところが死の三日前から、何も口にせず朝から夕方まで庭で寝込むようになった。花壇の土を掘り返して用を足そうとしているのを見つけた。「コラッ」と叱ると情けない顔をして、すぐすこ姿を消した。だが動きは地を這うように何時もと全く違っていた。用足しに行く体力と気力がなくなっていたのだろう。

土曜日は朝から冷たい日だった。ブラッシーは水もとらずに、うずくまっている。揺り動かしても、かすかに目を開けるだけで動かない。ペット病院に電話したが、

あいにく休みだった。なぜ前日に連れて行かなかったのか、と後悔の念が冷たいものになって胸をよぎった。

夕方になると雨に変わった。秋の夕暮れは早い。懐中電灯を手にして暗くなった庭を探した。五年後にして初めて猫を家の中に入れるつもりだったが、どこにもいない。

一晩中、気になっていた私は日曜日の朝、夜の明けるのを待ちかねてブラッシーを探した。彼は自動車の下で眠るように倒れていた。屍体を箱に入れる私をミイが見つめていた。普段なら我が家に来るのは八時頃である。おそらく夜も見守っていたに違いない。私には猫の通夜に思えた。

ミイは箱に入れたブラッシーの側を、しばらくは離れようともしない。そういえば土曜日にも側にいたように思える。猫は用心深くて病気の猫には近寄らないと聞いていた。だがそれは違う。横にいたのは偶然であるとしても、私には、それは兄弟の思いやりと感じられる。

月曜日の朝は晴れた。市役所に届けるため自転車の荷台にブラッシーを入れた箱を積んで我が家を出た。家内

の側には残されたミイが同じように見送っていた。

がんとたたかい

野村 嘉彦

突然の下血

平成十三年四月下旬のある夜、夕食後のひとときテレビを楽しんだあとひと風呂浴びて寝ようと考えた。パジャマに着替えて浴室へ入った。全部脱ぎ捨ててシャワーを浴びた。心地よい気分であるうちに何だかお尻がむずかゆくなり、ガスでも出るのかなとちょっと、ふんばった瞬間すごい勢いで下血した。初めての、しかも突然の出血に狼狽した。バスタブに入るのを止め、急いで浴室を出てトイレに入った。また出血した。と思う瞬間意識を失った。

耳元で家内の声がした。「どうしたの？」家内はびっくり仰天して直ちに主治医に電話した。夜の十一時過ぎ

である。程なく主治医から電話で「心配することはない。明朝、用賀のクリニックへ出向いて内視鏡の検査を受けなさい」と返事があった。

がんの宣告

翌日、用賀のＳクリニックに出向いた。内視鏡の検査は無事済んだ。検査結果を聞くために二週間後再び訪れたところ院長ははっきりと「大腸がんです。すでに国立医療センターへ連絡しました。外科医と良く相談してください」と淡々と話された。

青天のへきれきとはこのようなものかと感じた。

がんの宣告はまるで死刑判決とまでいかなくても無期懲役に匹敵するショックを与える。よくよく考えた。状況調査は極めて悪い。父は肺がん、母は子宮がんで亡くなっている。父は享年七十九歳、母は七十歳で病没。自分はいま八十四歳。私はすでに両親以上に現世の楽しみや苦しみを享受してきた。今更くよくよしないで天命を待とう。赤ん坊でも死ぬ。戦争でも死ぬ。生きているかぎり必ず死が来る。誰も避けられない。人間の宿命である。こう考えるときはさばした。

入院

すべて運を天に任せる決心をして、東京医療センターへ五月七日に入院した。現在肺気腫を患う私の強い願いにこたえて徹底的なチェックが行われた。検査の結果手術に耐える体と診断された。五月三十一日、手術用の寝台に移されてまず麻酔が打たれ意識は遠のき、無くなつた。

手術の成功と麻酔のいたずら

数時間経つたのだろう。枕元に執刀医が立っていた。笑っている。私は気がついた。生きている。医師は「がんは完全に取りました。手術は成功です。おめでとう」と言った。私は嬉しくなりまた眠りについた。

目が覚めた。私は神戸にいる。港でサイゴン米の荷受け作業に従事している。食糧事務所から神戸市の配給所には後一週間分の米しかない。今到着したサイゴン米の大きな本船を接岸させてトラックに直取りさせよとの命令である。技術的に数々の問題があつて新入生の社員に

は頭の痛い仕事だが、四六時中小さな曳き船にのって湾内を駆けめぐって頑張つてやり遂げた。

なぜ六十年前前ことが鮮明に思い出されるのだろうかと思つたとたん、また眠りについた。ふと気がついた。二人の顔見知りのナースが銀座へ私を連れ出した。懐かしい町並みの中のあるコーヒー店に入り、とりあえず椅子に腰を下ろしたが、いつの間にかナースの姿が見えない。私は慌てて車椅子を動かそうとした。耳元で「野村さん、どうしました」ナースの声である。ハッと気づいた私は病院のベッドの上にいたのである。

私は麻酔の後遺症の中にいたのである。銀座も神戸港も幻想の世界のことである。私はこれではいけない。早く幻想の世界から抜け出そうと努力した。

とにかく実在をつかむ努力をした。この運動は功を奏した。麻薬の後遺症はこの行為で吹き飛んだ。

ナース達は良く協力してくれた。良い設備、優秀な医師団などが素晴らしい思い出をつくってくれた病院に感謝している。

退院

十日後おかゆを食べてよろしいと言われた。執刀医から「あなたは回復が早い、もうすぐ退院できる」と言われたのは六月十日であった。手術後十日であった。そして十五日、外科医長先生から十八日退院許可の御達しがあつた。途端に帰りたくなつた。三日間の外泊許可をもらい四十日間お世話になつた病院から抜け出しタクシーを拾つて何の前ぶれもなく帰宅した。一大事の手術の幕切れはあつてなかつた。突然の帰宅で夕食の準備のない自宅での退院後最初の夕食は吉野家の牛丼であつた。

蘭州から敦煌

吉 寄 清 巳

私と妻は、昨年五月二十二日、気温三十六度の乾いた北京から千五百キロ西、標高千六百メートルの甘肅省・蘭州空港に着いた。昼過ぎの気温は三十度である。春に

吹く強い西風は黄土を舞い上げ、空港バスは手の触れるところ、まるで細かいサンドペーパーのようであった。

蘭州は日照りが続いた。空気が乾き喉はからからになる。私らはのど飴をしゃぶりながら暮らした。友人が二か月ぶりの雨という二時間ほどの小雨が降った日は、涼しく適度に湿って快適となった。その後雨は降らなかつた。人々は炎天下にもかかわらず、黄土の山に植林している。土は乾いているので、地下水を汲み上げ、山にスプリンクラーする。緑化に努力しているが、木の育ちはよくない。緑々した日本から来ると、ここは土だらけ、気の毒に思う。

市街を横切って流れる黄河は河幅八百メートル、水量は豊かである。この泥水のお蔭で二百七十万の市民は生きることができ、農地を灌漑できる。

私は蘭州にある化工公司の工程師たちと一昨年から塗料の試作実験をしている。公司の幹部は私の技術協力のお礼に、私と妻に週末の敦煌行きを計画してくれた。私らは午後十時、寝台急行で蘭州を出発、翌日の午後二時、千百キロ西の柳園に着いた。途中、嘉峪関までは黄土の

平原と丘が続き、ところどころ畑の緑も見られた。その先は黒い小石が混ざるゴビ砂漠となる。ゴビとは小石の乾いた大地の意である。

柳園から敦煌までは百三十キロ。タクシーで二時間かかる。車はゴビ砂漠の道を土埃をたてて走る。陽光はきらきらと輝き、車窓からは小さな竜巻、蜃気楼までみられた。エンストすれば大変である。緑のオアシスを通過するとほっとする。オアシスは大・小何回も通った。案内人によると、ゴビの年間雨量は四十ミリ、対して蒸発量は二千四百ミリという。雨が降り始めると、オアシスの子供たちは裸になって屋外にとび出し、もっと降れもっと降れと、天に向かって声援するそうだ。乾いた平原のなかに、紅柳と針のような葉のらくだ草が生えている。風により砂は草のところに吹き寄せられ、そこは高く盛り上がっている。

敦煌は二千年前の漢代からシルクロードの主要なオアシスとして栄えた。今は十八万人が住む。ビルが建ち市街地を形成している。羊肉を焼く臭いが立ちこめ、大きな路上市場には砂漠の中なのに生きた鯉を売っている。

飲料水は地下水を汲み上げ、畑の灌漑用水はダムからの流水である。水源は遙か遠くに見える標高五千五百メートルの祁連山脈の万年雪である。

西から吹き寄せてくるさらさらとした砂は百メートルの高さになって市街地に迫っている。もう一吹き西風で町は埋まりそうだが、なぜか砂は町に入っていない。この幅二十五キロに及ぶ砂の台地に、地下水が湧き出て、深さ四メートルの泉ができている。そこは柳が茂り緑である。泉は月牙泉と呼ばれ観光スポットになっている。

ゴビのなかに多くの墓がある。老いた親は自分の遺体を埋めてもらう場所を決めて子供に伝えておく、場所の許可はいらない。日本のような高額な永代使用料の支払もない。親が死ぬと、子供は遺体を埋め、高さ二メートルほどの盛り土をつくり墓石を建てる。新節、盆、彼岸、命日に墓参りをする。

敦煌といえば莫高窟。現地の中国人は平山郁夫画伯の保存活動を高く評価している。市街地の近くに空港ができてから、年間六十万の観光客が訪れるようになった。外国人は七万人、そのうち五万人は日本人である。敦煌

は海拔千百メートルの高地である。十月から翌三月までは冬、気温は零下十度から三十度、五センチほどの根雪が積もる。四、五月は強風と砂嵐。観光は気温三十度までの五月末から六月中旬が最適となる。七、八月は四度を越す猛暑であるが、ホテル、タクシーの冷房完備により、この時期に来る日本人観光客は多いという。ツアーは西安から空路で来て一泊、莫高窟と砂の山を見て帰る。日本人は土産物に金を使うからこの町の経済に貢献し、地元民から歓迎されている。

このような寒くて暑い苛酷な地に、中国人は大石窟を建造しているのである。彼らの信仰心とねばり強さには驚かされる。せつかちな日本人にはできる仕事ではない。

聖林寺十一面観音：六十年ぶりの再会

遠藤 俊也

大和桜井市の山間やまあいにあるこじんまりとした真言宗の寺

聖林寺^{しょうりんじ}。その本堂で、有名な天平仏十一面観音立像にお目にかかったのは昭和十七（一九四二）年のことだった。

まだ高等学校の学生だったわたしは美術部に入り、担任教授に案内してもらって五、六人のグループで、よく京都や奈良の古寺を訪れた。このときの師友の半分はいまは他界してしまっている。戦争^{せん争} 酣^{たげ}のところで、聖林寺も訪問者はほかになく、住職に案内されて本堂で十一面観音像を時間をかけて拝観できたように思う。

その後本像は、立派な収蔵庫に移されたと聞いていたのでは非再訪してみたいと思つていたところ、ことし十一月にその望みを果たすことができた。談山^{だんざん}神社へ出かけた帰りに寄つたのだった。ほぼ六十年ぶりになる。

本堂の縁側から左手につながる長い渡り廊下を行くと、十一面観音を安置する白壁のこぎつぱりした収蔵庫があつた。重そうな両扉は左右に開かれていた。久しぶりの再会だと思つと胸がドキドキする。

目を正面に向けると、透明なガラスを通して写真ソツ

クリの尊像が堂々として立っている。顔面はかなり上で、わたしは見上げる格好になる。蛍光灯のせいか全身がまるで浮き出ているようだ。しかし、ひざから下が見えないのだ。そこだけ、外からの光が反射しているらしい。来迎図の山越え弥陀を思い出した。わたしは茫然として立ち尽くしてしまった。

一九七二年にここを訪れた井上靖氏はこう書いている。『収蔵庫の扉を左右に開くと、いきなり後ずさりせずにはいられないような高名な偉丈夫の十一面観音の現れ方だった。甲冑で身を固めた武将のような堂々たる天平観音であつた。』

十一面観音は、全国で国宝が六体、重文指定が二百体だが、国宝のうち半分は大和地方にあり、しかも奈良時代から平安時代初期にかけての制作である。聖林寺、法華寺、室生寺の十一面がそれだ。

わたしは一人でゆっくり拝観できた。それにしても、なんとという素晴らしい仏像だろうと改めて感心する。

円満な顔立ち、量感に満ちた全身、両腕と天衣とがピタッと均斉を取り快いリズムを投げかけている。ここに

は、菩薩行にも耐え、これから衆生救済に向かおうとする威厳と慈悲の双方が惜しみなく具象化されている。ジツと眺めていると、極楽浄土の妙なる音楽が聞こえてきそうだ。

保存状態も良い。顔にも体にも当時の金箔がかなり残って光っている。左手で持つ水瓶すいひょうには蓮の蕾が三本さされたままだ。

和辻哲郎氏はこの像を、奈良博物館の特別展示で観たようだ。よほど感激したのだろう。そのときの印象を名著「古寺巡礼」のなかで十二ページにわたって書いている。

拝観し終わって本堂の正面にある階段で靴の紐を結んでいると、背後で人の気配がした。振り向くと、廊下に腰が曲がって杖をついた白髪の老女が立っていた。その老女がわたしに話し掛けたのだ。

「どこからおいでやした。横浜から？ エッ。六十年ぶりに？じゃあ、そのときは十一面さんに本堂でお目にかかったやろ。本尊の地藏さんの向かって右側に置いたん

じゃが、あまり背が高く天井につかえそうなので、床板を削りとって台座部分からはめ込んだらしい。そんだから、今と違ってお顔が見る人のわずか上にしかなかった。これ、覚えていらっしゃるか」

なにしろ大昔の話だ。そう言われても覚えているはずがない。老女の言うとおりだとすると、当時薄暗い堂内で拝した体長二・〇九メートルの御仏みの顔は仰ぎ見る高さではなかったのだろう。

別れたあと、拝観受付所の娘さんにこの老女のことを尋ねてみた。先代住職の奥さんだった。

ふと、ここで会津八一が歌を詠んでいることを思い出した。帰ってから彼の歌集『鹿鳴集』を開いて見るとやはりあった。

「昭和十四年十月十九日旧知の老僧老いてなおあり」との前書きのあと、

さくはなのとはにほえるみほとけを

まもりてひとのおいにけらしも

とあった。

桜井駅行きのバスに乗るため坂道を少し下った。

門前からの大和盆地東半分の展望が良い。三輪山、山の辺の道が一望でき、卑彌呼の墓と伝えられる箸墓古墳も遠くにけむって見えた。午後の柔らかな陽を浴びて大和平野はあたかも眠っているかのようだった。

(平成十三年十二月)

「プロジェクトX」と「スーパーテレビ」

大塚 滋

昭和三十八年三月三十日、一年半後に開業を控えた東海道新幹線はその成否をかけて、最高時速二五〇キロに挑む速度向上試験を行った。

先行建設された神奈川県綾瀬から小田原市鴨宮間三二キロの試験線に六両の試作車を入れ、約一年テストを繰り返して、この間徐々に速度を上げ、すでに開業後の最高時速二〇〇キロは前年十二月に達成していた。

時速二五〇キロ試験の目的は地上、車両ともに性能上強度上の余裕を確認するとともに、この速度になると台車の左右振動が発生し、ひどくなると線路まで変形させる危険な蛇行動の動向を監視することなどであった。

試験線では職責上、私が加速、減速などすべての運転指示をだし、同時に地点、速度、トンネル、橋梁などの情報を車内に放送することも担当していた。

この日も同様だった。時速二五〇キロを目標とした最後の下り電車が綾瀬を発車した。時速二四〇キロを超えたあたりから緊張が高まるとともにここまで速度が上がると加速におそろしく時間がかかる。

「只今時速二四八、二四九、…」ついに目標の時速二五〇キロに達した。蛇行動の兆候もない。運転士は加速ハンドルをオフにしようとした。その瞬間私は彼の手を押さえた。「まだだ、もっと走れ！」運転士は「怖い」と言ったのを覚えている。不気味な振動が感じられる。蛇行動の始まりか、しかし押さえている手を緩めなかった。これが最後のチャンス、ブレーキ距離一杯まで挑戦しよう。「二五四、二五五、…」限界が近い。「只今二

五六キロ、限界です。ブレーキをかけます」この放送で車内は歓声に包まれた。

こうして電車の世界最高速度が記録され、高速における蛇行動の解析データも得られた。直後「なぜ目標速度を超えたのか」と質問され「もし脱線したら私の命もないだろうから無謀運転などと叱られることはない。ここでやらなければという気持ちでした」と答えた。この試験の成功をうけて、翌昭和三十九年十月一日東海道新幹線は華々しく開業を迎え、これに刺激されて以後世界の鉄道は競って超高速時代へ突入するのである。

この後、新幹線開発に関する本や記事が数多く発表されたが、時速二五六キロ達成時の私の行動と発言を採り上げているものが多い。

戦時中、ゼロ戦のテストパイロットが過酷なテストで殉職した例をひき「新しい技術の開発には慎重さも必要だが時として大胆さも…」或いは「脱線すれば命を失うのは彼一人ではない。後ろの車両には大勢の試験関係者も乗っていたはず…」などなど。

平成十二年四月から始まったNHKの「プロジェクトX」では第七話として新幹線が採り上げられ、同年五月九日放映された。

平成十三年九月二十四日、日本テレビの「スーパーテレビ」でも時速二五六キロ達成がテーマとなった。

「プロジェクトX」では自宅でのインタビューと撮影が一日、鴨宮基地でのロケと説明が丸一日、これだけ時間をかけながら放送で私が登場したのはわずか数分、セリフも「失敗など考える余地は無かった。この試験に成功すれば新幹線が実現するという使命感でしようか」ぐらい。もつとも四十五分に収めるため大幅にカットしますという連絡はあったが、旧陸海軍出身の老友三人の執念が生んだ新幹線という筋書きには疑問があり、当時の国鉄関係者も同様で、このことをNHKに話したら「分かっています」とのことであった。新幹線は日本の総力をあげて完成したものである。

日本テレビの方はインタビューと撮影が二日、私が運転士の手を押さえたところは再現していたが、どちらかといえば時速二五六キロ達成に貢献した家族の物語をメ

ーンにし、私の場合も女房の登場の方が多かった。

「プロジェクトX」ではその後ビデオ、放送六回分ずつをまとめた単行本、ベストセラー「リーダーたちの言葉」、コミック版「新幹線」、秋にはDVDの「新幹線」も売り出された。続いてODA対象国向けに英語ガイド版の刊行、地域のCATV放送局への貸与も始めるという。

四十年たった今、現在ではもはや珍しくもない時速二五六キロ達成がどうしてこれほどまで話題になるのだろうか。それが戦後の日本を代表する超ビッグプロジェクト新幹線の歴史に残る輝かしい一ページであったからだとすれば、そこに登場することができた巡り合わせと、大胆な試みが好結果をもたらした幸運に感謝する以外にない。

すし談義

中洲 靖雄

もっとも日本的な食べ物でありながら、近頃かなりの勢いで欧米各国にも浸透してきているものに「すし」がある。

今から三十年も前のニューヨークでは、すしを好んで食べる米人などそんなに多くはなかった。が、いまや欧米を中心として世界の各地で愛好者が増え、客足の伸びに顕著なものがあるようだ。最近では回転すしの店まが増加の傾向を示しているという。

私はもともとすしが大好きである。とはいうものの生来魚気は嫌いで、特に生臭さが強い青身の魚は苦手だった。が、何故かすしだけは餓鬼の頃から好物の一つだったのである。ちよつと筋の通らない話ではあるが、いまにして思えば魚の食わず嫌いであったのかも知れない。

ところで、いまなぜすしが欧米の人たちにも愛好されるようになってきたのだろうか。彼らにも、栄養学上の

見地から、優れた食べ物であることに気が付いてきたのと、食べ慣れて、すしのもつ美味さを充分に味わうことが出来るようになってきたのが、その最大の理由なのであろう。

実際あんな美味しいものの味をいったん知れば、肉食主体の欧米人といえども、すしの愛好者になってしまうのは当然だろうと思う。もともとオランダやその周辺では、街角の屋台店でも生の鰯が売られ、それをばくつく多くの市民の姿を見受けるし、ニューヨーク辺りでも名物料理の一つに、オイスターバーなどで食べる生の蛤や牡蠣がある。一言にして彼らには、すしを愛好する素地を充分に持っているのだ。

さてこのすしだが、同じすしでも関西地方で食べるそれは、甘味が勝ちすぎていて辟易することが多い。特ににぎりで甘味が勝ち、その上シヤリが大きいとどうにもいただけない。そんな私は、一年に三、四度上京するたびに、欠かさずに首都圏のすし屋に飛び込み、すしを摘むことにしている。さすがにかつて始終出入りしていた馴染みのすし屋には足も遠のき、とんとご無沙汰をして

いるが、年金生活の身ではやむを得ないものと割り切ることにしている。だからこそ、どこにでもある庶民的なすし屋に足を運ぶのだが、やはりすしは江戸前に限るとの確認を繰り返すことになるのだ。

最近、日比野光敏著『すしの歴史を訪ねる』と題する文庫本を走り読みしたことがある。この書物、それこそ〈すしの歴史〉が克明に記されており、ここですしのルーツは東南アジアの魚肉保存法からだとされていることを初めて知った。著者によれば、もともとすしとは米飯などのデンプン質をとまなう塩蔵発酵食品で、発酵により魚肉の腐敗を抑え、同時に独特の乳酸性酸味を呈するものだ、と。つまりは飯の中に塩味をつけた魚肉を漬けて発酵させた漬物の一種なのだそうである。

こんな製法で作られたすしは昔から日本各地でも作られており、日本最古のすしだとされるものの一つに滋賀県のフナずしなどがある。魚、飯に塩を加え、これを発酵させて酸味を得、食べるときは飯を除き、魚だけを食べるといふ。臭気ふんぷん、強烈な臭さらしいが、こんな日本古代のすしを「ホンナレ」と呼ぶようだ。

中世の十五世紀中ごろ室町時代になると、すしにも大きな変革が起こり、著者によればすしの第一革命と呼ぶような変革が起こっているが、発酵が浅くなり、飯を食うすし飯料理化してきたというのである。これを「ナマナレ」というそうだ。こうしてすしは時代とともにどんどんと変化していくのだが、やがて麴を加えてみたり、酢飯にしたりと、発酵させて酸味を出し保存食とはかなりの相違が出てくることになるのである。巻きずし、ちらしずしの誕生、さらに箱ずしにと発展していく。

握りずしは箱ずしから発展したものらしいが、今の握りずしの形になってきたのはそんなに昔の話ではなかった。二十世紀の初頭辺りから、それまでの握るすしが改良され、痛みが早い魚介類の旨味が落ちないうちにすし種として食べるようになってきた。当然のことながら移送手段の発達や、生きのいい魚が容易に入手できることが必須の条件となってくる。こうしてすし屋の身上は、いつしかすし種の新鮮さとなってきたのだ。そして江戸前ずしとは、東京湾産の魚介類を使ったすしを称する言葉だが、江戸特有の技法を使う郷土ずし、つまりは握り

ずしをさすようになってくる。江戸風のすしという意味になるのか、と日比野氏はいっている。

すしの歴史書の一端をいかつまんで引用しつつ、すしについてあれこれと談義してみたが、江戸前ずしとは誰が何といおうと、こんなに美味しいものはないと私は思っている。それだけにすしは今後とも急速に全世界に広がっていくのは間違いがないと信じているのである。

IT文明論事始め

高橋 孝藏

歴史の境界を越える

IT革命は経済や社会や私たちの生活にどのような影響を与えるのだろうか。

まず、革命というものの性格だが、経営学者ピーター・ドラッカーが一九九三年出版の【ポスト資本主義社会】で巧みに表現している。

「数百年に一度、際だった転換が行われる。世界は『歴史の境界』を越える。」

そして、社会は数十年をかけて、次の新しい時代のために身繕いする。世界観を変え、価値観を変える。社会構造を変える。技術や芸術を変え、機関を変える。

この『境界』を越えた後の世代には、祖父父母の生きた世界や父母の生まれた世界は、想像することもできないものとなる。われわれは今、まさにそのような転換の真っ只中にある」

彼が書こうとしたのは、知識社会の形成で、そこに至る歴史上の大転換期は一九六五年から始まり、二〇一〇年あるいは二〇二〇年まで続くと予測している。ITに焦点を合わせるなら、二十年ほど後ろにずれ込む計算となる。

好奇心があれば誰しも、社会構造が変わり、世界観や価値観が変わっていくさまを見ていきたいと思うに違いない。アカデミックな学者だけでなく、市井の人の眼で見ると文明論もあっても良いだろう。

ナンバーワンとなるか、オンリーワンとなるか…

バブル後、日本では護送船団方式、談合、年功序列、終身雇用などの功罪が論じられてきた。しかし、みんな仕事で回そうとする、どこか人間くさい、憎みきれない要素もあつたはずだ。

IT革命は米国を中心に経営や生産の効率化から始まった。ネットに組み込まれたリアルタイムの経営手法であるERP（統合基幹業務システム）やSCM（サプライチェーンマネジメント）などは極限に至るまで効率を追求しようとする。たとえば、SCMを採用しているデル・コンピュータの場合、世界の製造部門相手に一日二回の生産計画を策定する。在庫をできるだけ持たないよう、販売見込みに応じ、生産を時々刻々と調整するためだ。通常、日本メーカーの生産計画は三か月から数か月ごとに立てられるというのに。ソニー、松下、富士通、日立などが軒並みに世界一の生産効率を誇った電機・情報通信大手が軒並みに巨額の赤字を計上することになった。このことについて、日本はIT活用が中途半端で、企業全体の生産効率が上がっていないと、ソニー出井会長を

して慨嘆させた。

効率を徹底的に追及する企業競争がどういう結果を生むかを予測する必要もある。既存の産業分野では、多数の企業が脱落し、一握りの最高に優れた企業だけで十分だといえるのではないだろうか。金融・生保、自動車メーカー、石油、鉄鋼などあらゆる産業で世界的な大再編が進んでいるのはその兆候と思われる。しかも、その再編は止まることを知らない。大企業同士の合併が生き残る保証にはならない。次の合併を誘発することもある。

ジャック・ウエルチ前GE会長の経営戦略は、GEのあらゆる部門はナンバーワンであるべきで、いくら伝統があってもナンバーワンになれそうもない部署は切り捨てることだった。彼が名経営者と謳われるのは、時代を先取りした経営感覚と思われる。

一方、多くのベンチャーは他とは違うものを取り上げるオンリーワンの発想で起業する。スタンフォード大の三人の学生がルーターなる異なる言語のコンピュータ同士が接続できる装置を初めて作り、事業を興したのは一九八三年のことだった。今ではその会社シスコシステム

ズは従業員三万四千人を抱え、売り上げ二兆円を越す大企業に成長した。人間の欲望は限度がない。誰もやらないことを取り上げ、オンリーワンになるのはビジネスのチャンスを広げていくことになる。

大きな新しいメディア

ITの中心はインターネットである。だが、インターネットを一言で定義するのは難しい。電子商取引のツールであり、電話機能を持ち、新聞であって新聞でなく、雑誌であって雑誌でなく、本であって本でなく、ラジオであってラジオでなく、TV放送であってTVでなく、映画であった映画でない。インターネット内で、異なるメディアを容易にかき混ぜ合わせられる。詩を作り、朗読し、その詩にふさわしい音楽と映像を取り込んだコンテンツを作り、流せる。あるいは、今までの業種がそのまま専門化したまま、インターネットで活用されるケースもあり得る。たとえば、音楽配信では、インターネット経由で、好みの音楽をPCや携帯電話に取り出すことができる。放送番組をPCで取り出し、テレビで見る。

好みの番組をハードディスクに予約録画させ自分の都合の良い時間に見るなどはたやすいことだ。インターネットが新しい、大きなメディアとして進化するころ、私たちの生活は根底から変わる可能性がある。

新しい流れに沿って前進を

中 川 路 明

「逆風に向かう君へ」、企業OBペンクラブの十周年を記念して進めてきました「サラリーマン体験録」が、クリスマス前の書店を飾りました。

この十年、高度経済成長期に第一線で活躍してきた足跡を残そうと、石川正達さん、三枝亨さんらのリードで、幾たびかプロジェクトが組まれました。章建ても決まり、原稿を集めるまでに至ったこともありませぬ。利潤追求の組織の中で体験したことを、反省をこめて書き残そうとしたことは、世の啓蒙のためにペンを持って集まった集

団として、当然のことだったと思います。

停滞する出版界の中で、プレジデント社が取り上げてくれたのは、数々の幸運に恵まれたためでもあります。しかし、根源は一年半にわたり、全員がユニークな文章を寄せられたクラブの伝統のたまものと思います。今後もし時機にかなったプロジェクトを立ち上げ、原稿を書き溜めるうちに道が開かれることでしょう。

一方、情報発信手段の大変換の時代を迎えて、ペンクラブも新しい流れに沿った活動への挑戦が必須でありませぬ。早いもので、九八年の正月にEメール研究会を立ち上げて丸四年になります。関係者のお力添えで、会員の過半数を超える五十余人がメール発信をできるようになりました。昨年は、多田修さんの努力で国のインパクに参加し、クラブのホームページは、昨年末には五千に近いクリック数を獲得しました。ベストライフ・オンラインのコンテンツも、二〇〇〇年三月の発刊以来順調に継続しております。

先に進んでいる方は、まどろっこしいとお感じでしょうが、それぞれの道を歩んでおられる皆さんの事情から

すると合格点でしょう。炬燵でお屠蘇を酌みながら、今後の進め方として、メールとホームページの利用について考えてみました。

まず、メールを利用するデジタル型式の会の運営は、過半数が出来るといっても、クラブメンバーの中には、参加されない、参加できない方が多いのですから、部分的な活動であることが前提となります。しかし、メールは、今後もベストライフやポレポレなどのメルマガへの投稿には欠かせない武器です。

メールを利用するチームによる原稿の作成はどうでしょうか。例えば今の特別討論会のように、A氏がテーマを出し、各人が意見をメールで返信し、A氏がまとめた文章を各人が叩く。A氏の修正文をさらに叩いて最終稿とし、クラブのホームページに掲載します。またはA氏が原文を出し、皆で叩く。チームはIT部会全員でなく、打てば響くメンバーに限定しないとまとまらないでしょう。

私は、当クラブとは別の六人で年金グループを組んでいます。昨年は朝日新聞で、今年は週刊朝日に連載投稿

します。遠隔地のメンバーもおり、すべてメール交換の方法で原稿を作ります。グループのホームページも同様で、月一回の新しい問題提起を交代で担当して更新しています。グループには素晴らしい女性リーダーがおり、私はしょっちゅう手綱を引張られています。

「なんでも書こう会」は遠隔地の人は参加できませんが、常連は文章の練磨とともに、ダイレクトな会話の交歓を楽しむ方が多いようです。外部発表はお断りの方もいます。しかし、出席できない方も参加できるメール方式の運営も、可能ではないでしょうか。要は、対面せずに活動する基盤を作ることにあります。よりよい提案が頂ければいいんですが。

ホームページはまだまだ各人主体です。自分のエッセイ、句歌、旅行記、小説、絵、写真などの作品を発表し、将来は電子出版につなげたらよいと思います。折角ユニークな各人のページがあるのですから、クラブのホームページは、マスターというよりハブの芯くらいに考えれば、気の利いたものならそれほど更新はしなくてもよいでしょう。私もまだ参加しておりませんが、各人

がページの更新に注力されては如何ですか。

そのうちに、マスターのホームページが必要になり、世間に注目されてオープン参加になる時、企業OBペンクラブは大化けすると期待します。

故国を後にした人々

莊 司 忠 志

「それはそうと貴方はもともと、どこの国の人なの」私の好奇心はここから始まる。オーストラリアのシドニーの町、中国人か韓国人か、私の乗ったタクシートの運転手は、私の質問に「北朝鮮だ」と、無愛想に強いアクセントの英語で答えた。私は驚いて次の質問がしばらく思いつかない。一九八〇年夏、北朝鮮からの亡命者がいたのだ。政府の使節団の一員として、アフリカの数少ない友好国に派遣された機会に、数年来心に秘めていた考えを実行したのだ。西側の領事館に逃げ込み、亡命を許さ

れ、シドニーに安住の地を見いだしたのだった。故国に残した家族の安否は不明のままだ。

ギリシャに住んだ一九六九年年から十一年の間、一番心に残るタクシードライバーとの出会いは、中央アジア・タシケントからアテネに移り住んだ中年の男だ。若いころ、有名なサッカー選手だったので、試合を追ってロシアの主要都市を回り、若い女性にもてもてだった。引退したタクシードライバーになったが、生活が苦しかったので、先祖の国ギリシャに家族をつれて移住してみた。しかし、生活はロシアとたいして変わらないし、近くロシアに帰ろう、ロシアにはギリシャ人社会やギリシャ正教会もあるし、といていた。当時の「ロシア連邦」から外国に一度出て、またやすやすとロシアに帰れただろうか。

一九九八年のメルボルン。アフガニスタンからの避難民のひとりである二十七歳の運転手は、将来のために夜学でコンピュータの勉強中だ。町には千人ほどのアフガニスタン人社会があるという。

F1レースを見ようと市電にのっていると、デモ隊に阻まれ市電が止まった。スローガンやどこかの国旗を掲

げ、見たことのない衣装を着た四、五百人のデモ隊だ。なんとクルド人である。反政府運動の首謀者オジャラン氏が、トルコ政府に逮捕されイスタンブールで死刑宣告されるといふ。デモ隊の前にトルコ領事館があるのだ。

メルボルの下町にはベトナム街があり、ベトナム・レストランが軒をつらねている。ベトナム食材のスーパーもあるし、銀行にはベトナム語を話す投資顧問もいる。

同じく、メルボルン郊外の国立公園内の森のなかを走る小さな観光列車、駅員の誰とも気さくに話す老婦人、彼女が独りひっそり住む山奥の家に招かれた。四十五年も前、東ドイツの村から西側に逃れ、しばらくスイスのチューリヒで働いた。東ドイツとチューリヒではドイツ語といっても全く違うらしい。ドイツ人がドイツ語で本当に苦労したらしい。今でもドイツで生きている九十五歳の母親や、アメリカにいる妹とは一年に一度電話で話す二分以上話さない。お金もないし、亡命らしい肉親と会ったことはない。

一九七〇年代のニューヨーク市には、ロシアからの移民・亡命者のタクシー運転手が多くいた。無線で交信し

ているのがロシア語らしいので尋ねるとウクライナからという。アメリカの親戚を頼って亡命しようと、先ず隣国のルーマニアへ逃れ、オーストリアの難民収容所からニューヨークに移った。市の郊外の海岸にロシア村があり、週末の村はロシアと変わらない。食事、音楽、衣服などなど、故国の雰囲気浸れる。

最近のニューヨークのタクシー運転手はロシア系に変わってインド系（インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ人）が圧倒的に多い。パキスタン人のアリさんは、毎年十か月働き、二か月パキスタンにいる家族のもとで休暇を取る。次の帰郷の時は二十三歳になる長男をアメリカに連れてきてコンピューターを勉強させるつもりだ。故郷まで飛行機を乗り継いで二十六時間の長旅となる。ニューヨークにはこうしたインド系タクシー運転手の学校があり、移住手続きからライセンスを取るまでやってくれる。

中国人のリムジン運転手のチャンさんには、奥さんと男の子が一人いる。家族はクリスチャンだが、自分は道教信者だ。故郷の母親には若干仕送りしているし、妹と

はEメールのやり取りをしている。中国人の運転手とお目にかかるのはめったにない。

家の修理に大工さんを頼んだらバングラデシユ人である。いつのころからか、一人のバングラデシユ人の大工さんが、故郷から助手を一人呼んだのが始まりで、腕はたしかだし信用できるといふことで商売繁盛、次々と同国人が増えたのだ。

メルボルンで会ったモルダビア人、アメリカで孫たちの面倒を看てくれたカリブ海の島々からの女たち、南米ガイアナからの中年女性、スロバキア人のアンナなどなど。外国の地で、袖すりあい、見知らぬ人とのつかの間の会話は無限に楽しい。これまで四十年もの間、南米を除く世界の各地で、多くの「故国を去ったひとびと」と会話をしてきた。彼らの「事情や人生」を聞くのは世界を知ることだ。最初どうして故郷を捨てようと考えたのか、肉親は止めなかったのか、パスポートやビザは、旅の費用は、今の仕事や生活の満足度は、などなど私の興味は尽きない。

と待てよ、他人への興味だけでなく、自分はどうだ。

子供たちは外国で独立した。自分たち夫婦が故国を離れ、今アメリカで生活しているのは何故なのか。現在のささやかな幸せと将来への不安を、袖すりあつた人々と内心共感しているのかも知れない。

『シナ』をもっと使おう

斉藤 勁

日本語の『シナ・支那』は英語のチャイナ(CHINA)と同じ意味の言葉である。紀元前二二一年、初めて中国を統一した始皇帝の国秦がその語源である。漢字秦の読みは、インドに伝わって「チーナ」となった。

十五世紀末、ポルトガル人がインドに到着し、東方にチーナという大国があると聞き、このインド語が西ヨーロッパに伝わって、英語の「チャイナ」となった。

十八世紀初め、日本に密入国して捕らえられたイタリヤ人宣教師が江戸へ送られてきた。この宣教師を新井白

石が尋問して、聞き出した世界知識を「采覧異言さいらんいげん」(一七
一三年)という書物にまとめた。この中で白石は、イタ
リア語の中国を示す「チーナ」を漢字で「支那」と翻訳
した。これが我が国における「支那」の初出である。

この「支那」はもともと仏教の経典を中国で翻訳した
ときに、インド語の「チーナ」の音に当てた漢字だった
が、白石がこの音訳漢字を探し出し、イタリア語の「チ
ーナ」に当ててから、日本では中国を「シナ・支那」と
呼ぶようになった。(岡田英弘著、文春新書「歴史とは
なにか」)

私は長い間、中国人がなぜ「支那」を差別用語として
嫌った理由が判らなかつた。昨春朝日カルチャーセンタ
ーの「新しい中国史」を受講し、講師に質問したところ、
「支那という字が悪い」と返答があつた。辞書をひいて
みると、支は枝分かれの意であり、支線、支店等に使わ
れる。那は西方異民族の国の名称とある。

大中国を示すに「枝分かれました西方異民族の国」とは
何事だということらしい。同じ漢字文化圏に属してい
ても、表音文字カタカナを発明し、シナを支那と当て字感

覚で使用した日本と、表意文字の国との意識の差の大き
さに驚かされた。しかしながら、表意文字漢字を併用し
ている日本人には、中国人のこの感覚は理解の範囲内
であり、「支那」という漢字は絶対に使用してはならず、
抹殺せらるべきである。

一方、カタカナ表記の「シナ」は、純然たる日本字に
よる表記であり、中国はこれには指一本ふれることは出
来ないものである。

シナの用法に関して付言すれば、日本では中世末期以
来、本州西端部を中国地方と呼ぶことが確立している。
一方の中国は、清帝国滅亡後、二十世紀になってようや
く一般化した名称である。従つて国家に関する名称は
「中国」で差支えないが、地域に関する名称は「シナ」
の方が良いのではないかと思われる。

シナ大陸、北シナ、南シナ、シナの民族、シナの宗教
等、中国を使うよりかはつきりする気がする。皆さんの
ご一考をお願いする次第である。

右回し左回し

杉山 修一

ある会合で聞いた「水道を止める時の蛇口の栓のまわし方は右回しですか」との言葉をふと思い出した。

一般に時計の針の動く方向を右回りと言い、その方向に動かすことを右回し、その方向に巻いている状態を右巻きと言うようである。

朝顔のつるは左巻きといい、上から見ると時計回りの反対に巻いている。模型飛行機のプロペラは右巻きに巻いて飛ばすゆえ、飛ぶ時は前から見ると左回りになっている。

陸上競技でトラックを走る時は上から見ると左回りである。何故か競馬では左回りと右回りがある。船のスクリューや一つの蛇口で水とお湯を調節する栓は、右回しと左回しの両方がついている。

右螺子ねじの方向というのものもある。螺子回しで螺子を止める時に回す方向である。電線に電流が流れた時にリング

状に出来る磁気の方などこれ、電気分野ではこの言葉がよく出る。

ボルトナットで右螺子といえ、時計回りに回すと雄螺子が雌螺子に入っていく。緩み止めのため左螺子のナットを一緒に使うこともある。

縄などは、普通右螺子の方向に繕よっているが、どちらから見るかで右巻きか左巻きか迷うところである。そういえば、模型飛行機のプロペラも後ろから見れば右回りに回っている。もっとも、飛ぶ方向を考えると右螺子の方向といえよう。

習慣により右左の使い分けは色々あるが、進行方向と結びつけると、右螺子の方向に回っているものが多いようである。

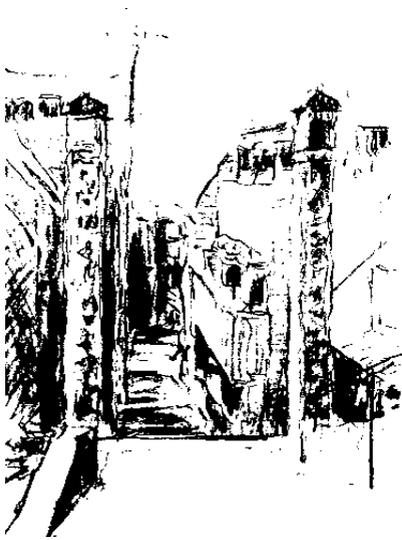
トラックで体力の限界を超えて走り、天国に昇ると、右螺子の方向に進んだことになるのだろうか。いや、上向きの力が働き、完走を助けるのであろうか。あるいは、左回りの上り坂や右回りの下り坂が何となく心地よいのは、上り下りの向きが右螺子の方向に合っているからかも知れない。

このあたりになると、こじつけも極まれの感が否めないが、絵に描いていてみると坂の上り下りの感じが出やすく、何となく収まりの良い絵になるのは私だけであろうか。

階段なども、踊り場のあるものは左回りが多いが、回り階段では逆のものもよく見掛ける。どちらが使い易いかを、とことん試したことはない。

人間の場合、左巻きとはいうが、右巻きとは言わないようである。

地球はどっちに回っているのだろうか。地球儀は北



右回りの下り坂 杉山修一 画

が上になっているが天体に上下があるのだろうか。数学的取り扱いのために方向を決めているだけで、どちらが上だか下だか分らない。いや分らないのはこちらの頭が左巻き気味のためで、よく勉強すれば分かるのかも知れない。あるいは分かったような気がするようになるだけかもしれない。

何時の間にか初詣帰りの電車の中で寝込んでいた私は、隣の息子に揺り起こされた。彼のめがねのつるは左に回っていた。

さらば人種差別

藤 岡 豊

アメリカの主導によるアフガニスタンのテロ組織攻撃は一応の成功をおさめ、暫定政権の発足を見るに至った。一九七九年にソ連が軍事侵攻を行って以来、二十年以上にわたる戦争が終結、アフガニスタンの国土再建に向け

て第一歩を踏み出したのは、誠に喜ばしいことである。

いずれは新しい憲法が制定され、正式の政権が発足することとなる。そしてここに新しい平和国家が誕生するという手順だが、果たして目標どおり平和が維持されるだろうか。これに対しては、悲観的な見方をする向きが少なくない。というのは、この国には幾つかの部族がより集まっており、同じ民族とはいえ主要四派の融和が実現するかどうか、疑問視されているからである。

同一民族でありながら、部族が異なると融和が保てないというのは残念なことである。ましてや民族が異なれば、到底難しい。早い話がパレスチナ問題は永久に解決することはない、との見方が有力である。

また民族の違いは、それに宗教の違いが加わることが多く、そうなると思絶はさらに大きなものとなり、ひいては人種差別にも発展しかねない。

人種差別といえば、かつての南アフリカを思い出す。アパルトヘイトと呼ばれるこの国の政策は国連で大きく取り上げられ、回国に対する経済制裁が、世界ベースで行われることとなった。

私はこの国に駐在するまで、この事実をよく知らなかった。ところが赴任して真先に驚かされたのがこれである。とにかくわずか一五パーセントほどの白人が、残りの黒人を主体とする有色人種を支配している。政界、財界のほとんどを白人が占め、黒人たちは満足な教育も受けることなく、下層に追いやられていたのである。

唯一の例外は日本人であった。以前は非白人として差別を受けていたが、その後「名誉白人」の名のもとに、特別扱いを受けることとなった。生活する地域も白人居住区と非白人居住区に分けられていたが、日本人は白人居住区に住むことが許されていた。同じ黄色人種でも、中国人や韓国人はそうはいかない。

しかし完全に白人並みに扱われていたかというところではない。非白人であるがため、嫌な思いをしたことが何度かある。

南アフリカは何故か輸血が重んじられており、政府の指導で採血が大々的に行われていた。血液を提供するとカードに記載され、何かの折、その当人に輸血が必要となると、優先的に受けられる。

ビジネス街でも、この採血チームが定期的に巡回するのだが、私どものいたオフィスでは、隣のビルの大ホールがその採血場に当てられていた。そして私が赴任して最初の折、初めてなので新しいカードを作ってもらい、二〇〇ccほどの血液を提供した。終わってこのカードに記載してもらうため並んでいた時、突然気がついたのが、その輸血カードの色が違うことである。私の貰ったのは白色だったが、前にいた白人のそれは水色である。何故色が違うのか、気になって回りの人たちの持っているカードを見て驚いた。なんと白人は水色、非白人は白色と区別されているのである。

肌の色は違っても、血液は同じはずであるのに、はっきりと分けている。恐らく患者が白人の場合は白人の血液、非白人の場合は非白人のものを輸血していたに違いない。人種差別を自ら体験したのがこれであった。

人種差別をするのは人間だけでなく、動物もするといふおかしな出来事があった。日本の某電機会社の彼はヨハネスブルグの駐在員で、郊外の白人居住区に住んでいた。週末のある日、隣の家に用事があったて出向いて行っ

た。門の外で呼び鈴をならし、用件を告げる。すぐにその主人が出てきて門を開き、彼を引き入れた。その時、主人に付いてやってきた飼い犬が一声吠えるなり、彼の足に噛みついたのである。主人はあわてて犬を引き離して繋ぎとめるや、彼を車に乗せて病院へ連れて行った。

この地域では、どこの家も自衛のために番犬を飼っている。普通、新しく犬を飼うと、訓練所に一、二週間預けて訓練を受けさせる。そこで種々の訓練が施されるのだが、その一つに、白人以外の人種を敵と見なすというものがある。つまり白人に対しては吠えもしないが、非白人には噛みつくという訓練を受けているのである。この主人は、客が隣の名誉白人であることから、うっかり気を許してしまったのだが、犬は日本人の区別などつくわけがない。人種差別の観念が、人間だけでなく犬にまで及んでいることを知り、彼は足の痛みもさることながら、差別の恐ろしさを身をもって体験したのであった。

その後の革命により、この国では人種差別政策が撤廃されて黒人政権が誕生、大統領も黒人が選ばれるようになった。問題はまだ幾つもあるようだが、いまわしき差

別がなくなっただけでも喜ばしい限りである。

しかし世界の至るところで、民族・宗教の違いは厳然として存在する。経済面での格差、つまり貧富の差はあるとしても、異民族との隔絶は、根本的には人間の本能に起因するといわれる。従ってこれを背景とした紛争は、今後も絶えることはないだろう。

要はどんな違いがあるとしても、お互いに相手を理解しようと努める。そのためには小さい子供のころからのフェアな教育が必要なのではなからうか。どんな犬だって正しい訓練を受けてさえいれば、人種差別など思いつかないはずである。

国境

都 甲 昌 利

岡田嘉子といっても今の若い人はご存じないだろうが、戦前日本の当代一流の大物女優であった。現代だっ

たら若いころの吉永小百合といったところだろうか。その彼女が二十四歳の一九三八年（昭和十三年）正月、恋人の演劇家杉本良吉と樺太經由で日ソ国境を越境した。「赤い恋の国境越え」として当時の新聞などマスコミでも騒がれた。この越境は警備の厳しいソ連国境で奇跡的といわれた。

我々日本人は四方が海に囲まれているため陸続きで国境を越えることに余り慣れていない。ヨーロッパなど狭い地域にいくつもの国がひしめいているところは国境だらけである。そして人は国境で仕切られた土地で固有の政治体制と、文化、社会の中に生きている。

私が国境というものを最初にまた強烈に意識したのは、ソ連体制のモスクワにいたときである。日本国外務大臣が発行するパスポートとソ連政府のビザがあったおかげで、密入国者として扱われた杉本良吉のように銃殺にはならず済んだけれども、国境近くの町でレンタカーをしたり運河や川でボート遊びをする時などはパスポ

トを官憲に預けなければならなかった。不法出国防止とスパイ防止のためであった。

モスクワでの生活にも慣れた一年後、日用品が極端に不足していたため、私は買い出しに車でフィンランドのヘルシンキまで行った。私の初めての陸地による国境越えであった。レニングラード（現在のサンクトペテルブルク）を経てソ連側の国境の町、ヴィボルグを出ると、フィンランドとの国境より五キロくらい手前にソ連の検問所があった。外貨の申告、荷物の検査は厳しかった。自動車のトランクはもちろん座席やエンジンルームまで徹底的に調べられた。カペイカなどの小銭を持っていたが没収された。ソ連では入国より出国の方が厳しい。ソ連内の情報が外部に流出するのを防ぐためだ。

もうこれで出国審査が完了したと思ったが、もう一個所検問所が待ち受けていた。国境線近く遮断機の向こうにフィンランドの検問所が見えるところに建物は小さいがソ連の検問所がもう一つあった。審査は簡単で前の検問所で作成した書類を出してようやく国境を越えた。

「ヤレヤレ」という気持ちだった。フィンランド側に着くと大歓迎してくれた。レストランがあり売店には何でも揃っていた。

「何故あんな国に行ったのかね」と売店のおばさんが聞いた。「私はモスクワに住んでいるので・・・」と答えると、「まあ、お気の毒に」と言って手を握って同情してくれた。

ソ連体制のあれほど厳しい国境線を岡田嘉子と杉本良吉がいとも簡単にどうやって越えたか今もって疑問である。

それから何年かして、私はベルギーのブリュッセルに転勤になった。この国はオランダ、ドイツ、ルクセンブルク、フランスと国境を接している。ソ連での苦い体験のトラウマで私は常に身構えていた。杞憂であった。国境には検問所はあったが、車で通過するとき徐行をしてパスポートの表紙だけを見せれば済んだ。私が日本に帰るころには検問所すらなくなった。二〇〇二年一月からユーロ通貨の導入で経済・社会的にはさらに自由になっ

ている。

国境は何故あるのか。自明の理だが「国」というものがあるからだ。では、何故国ができたのか。国家の成立にはいろいろ議論があるが、十九世紀や二十世紀に創られた国家は人為的なものが多くある。わがペンクラブの論客、大野 昶さんによれば、中東や西アジア、あるいはアフリカなどはイギリスをはじめとする西欧列強のエゴで国境線が引かれたと言う。チャーチルが酔っ払って線引きしたため大小が出来上がったと言う。今日のクウェートやアフガニスタンやバルカンの国境紛争はそのためかもしれない。戦争や紛争によって一番苦しむのは一般庶民だ。自分の国が空爆されれば空爆のない国境の向こう側に渡ろうとする。越えられない人々は国境近くの荒野などで苦しい生活を送っている。

アフガニスタンとパキスタンの国境近くにトラボラ地区という、どちらの国の政治権力も及ばないパトゥシュン人が多く住んでいる場所があるそうだ。そうだ、地球

上は「国」で分けられないで「地区・リージョン」で分ければよいのだ。

私の好きな歌でジョン・レノンの「イマジジン」がある。

《想像してごらん 国なんていうものがないと
そんなに難しくはないはず

何かのために 殺したり 死んだりしなくていい
宗教もない

想像してごらん すべての人が平和に暮らしている
るところを

そんなのは夢かもしれないけれどと あなたは言う
うかもしれないけれど

そう信じる人は私だけではないと思う あなたも
いつかは加わってくれるといいな

そうして世界は一つになれるから》
国とか国境についてもっと考えてみたい。

「ご遠慮申しあげます」

木下 洋介

喪中につき年末年始のご挨拶をご遠慮申しあげます

どなたでも十二月に入ると、杣つきのこんなはがきを受け取られるでしょう。私にも何枚か届きます。届いたはがきの主には賀状を出さないようにしてきました。このはがきは「当方は喪中だから賀状は出さないでくれ」といつてきたと解釈してのことです。どなたもそうだろうと思っていました。

が、あるときこの文章は「当方は喪中だから賀状は差上げられません、悪しからず」という意味ではないか、と思えてきました。いぜん喪中なのに賀状をくれた非常識な者がいる、と怒っていた人を覚えていますが、私のこの疑問に自称物知りの友人は、今は両方の意味で使われているといっています。

こんなことがきっかけで、「ご遠慮申しあげます」とはどういうことか、気になってきました。

遠慮勝ち、遠慮がましい、遠慮深い、遠慮がない、遠慮するな、ご遠慮なく、これらは喪中のはがきの遠慮とはちがうようです。

以下は「遠慮」について図書館で調べたメモです。

まずは諸橋轍次の大漢和辞典によると

①遠い先をおもんばかること②人に対する心を用いてひかえめにする、又、弔意もしくは思いやり等を表すの意味で或る事をひかえる、とありました。

いま私の関心事は②に相当する部分なので、その項を追ってみます。

漢語林 人に対して控え目にする

日本国語大辞典 他人に対して言葉や行動を控え目にする、あるものごとを断ることを断ること

広辞苑 人に対して言語、行動を控え目にする

新潮国語辞典 言動をつつしひかえること、辞退すること

講談社日本国語大辞典①ひかえめなこと「遠慮して末席にすわる」②辞退する「出席を遠慮します」

角川国語辞典 ひかえめにすること、辞退すること、ことわること

語源大辞典 気がねして言動を控え目にする

わが友人は両方の意味で使われているといっています。たが、確かに遠慮には「控える」と「辞退する」のどちらもあります。つまり「ご遠慮申しあげます」には「出しませんよ」と「出さないでくれ」の両方があるようです。でも私はいまひとつ腑に落ちません。

一般的に「遠慮」はどう使われているでしょうか。

駐車場の用意がありませんのでお車での来院はご遠慮お願いします

これより先浴衣及び水着での立入りはご遠慮下さい
院内での携帯電話のご使用はご遠慮いただきますよう

お願い致します。

車での来館はご遠慮ください

乳幼児の同伴入場はご遠慮下さい

危険です 走行中の席の移動はご遠慮下さい

鳩猫の餌をご遠慮ください

当店ご利用以外の方の駐輪はご遠慮下さい

未会計商品の持込みはご遠慮くださいませ

お電話でのご注文はご遠慮ねがいます

無断で園内に入ることをご遠慮ください

ベビーカーでエスカレーターの利用はご遠慮下さい

「願います」とか「下さい」とか丁寧な言葉が使われていますが、要するに「自主的にやめてくれ」というのを、遠慮という言葉を使って婉曲に命令しているようです。この用例から類推しますと「ご遠慮申しあげます」というのは「年賀状は出さないでくれ」ということになります。つまり「当方は喪中だから年賀状は出さないでくれ」ということだとわかりました。

ではもう一つの「年賀状を出しませんよ」のほうはどうか。「ご遠慮申しあげます」に「年賀状を出しません

よ」の意味を持たせているのか。改めて喪中はがきの束を一枚ずつ確かめてみました。「ご遠慮させて戴きます」「ご遠慮申しあげます」の中に「新年のご挨拶は失礼させていただきます」というのがありました。いままで気がつきませんでした。失礼させていただきますは明快です。つまり賀状は「出しません」の宣言です。

これで「遠慮」についての私の疑問はすべて解けました。両方だったのです。それにしても、なにか妙なものに足を突っ込んだような気がしています。人様はきつと「なにをやつてるんだ、あつたり前じゃないか」とお笑いになるでしょうね。

東京童歌もろもろ

関谷 裕彦

子供の時覚えた歌が突然なんの脈絡もなくよみがえって来ることがある。まりつき歌、お手玉歌など東京の古

い童歌を思い出すまま書き出してみよう。

「おねんじよさあま およねずとよう」

(こりや一体何の歌なんだろう??)

「今日は二十八日 明日はおかめの団子の日」

(おかめさんとお団子がどうかかわるのか、わからない)

「一の木 二の木 三の木 四の木 五葉松 柳

柳の下で坊さんが 蜂にチンコをさされて

痛いとも言えず 痒いともいえず ただ泣くばかり」

(無邪気な歌だが、さされたところがどうも…)

「夕べえべすこう(夷講)によばれて行ったら

お鯛の吸い物 小鯛の浜焼き 一杯おすすらすうすら

二杯おすすらすうすら 三杯目には名無しのごんべさ

んが

肴がないとてお腹立ち テテシヤン テテシヤン」

(夷講は陰暦十月もしくは十一月二十日、商家で商の神えびす様を祭り、知人や親類縁者が集まり祝宴を開き商売繁盛を祈った風習。鯛のお吸い物(うしお)では、勤番侍が吉原で、いくらお椀の中をさらっても骨ばかり、骨

のうしおが食えるかと憤慨する川柳がある)

「おくのおくの梅の木に 雀が三匹とまって(なぜか三羽ではない)

一羽の雀がゆうことにゃ ととさんかかさきいとく
れ

わたしがおおきくなったらば 上野のお山へ店だして

ござが三枚むしろが三枚 あわせて六枚

(残念ながらこの後が続かない)

「おん東京橋 なんなん中橋 明日は十六大振り袖よ

お化粧なされよ薄化粧なされ

あんまり濃いのは人目にかかる」

(これは有名なまりつき歌である。汐留から江戸橋に向かう水路にかかる橋が中橋で、そのたもとに江戸の盛り場として有名な中橋広小路があった。今で言う和日本橋の越前屋ビル、BSビル、丸善の付近である。寛永元年(一六二四)初世中村勘三郎が猿若座の櫓をあげて、浪人を集めて興業を始め、江戸歌舞伎の元祖と言われた)「向こう横町のお稲荷さんに 一銭あげて

さつとおがんでお仙の茶屋へ

腰をかけたら洪茶を出して 洪茶横横目で見たらば
お米の団子か、お土の団子か、お団子団子」

(このお稲荷さんは下谷中の感応寺境内の笠森稲荷。その側の水茶屋の茶汲女お仙が、吉原の三日月お仙、浅草観音境内の水茶屋お仙と共に明和(一七六四〜七二)のころの江戸の三お仙と言われ、芝居になり、錦絵にも描かれた。

同じ笠森お仙でも時代が下がって弘化(一八四四〜四七)のころ、草加在の名主に美人の三人娘がおり、長女のお仙が笠森稲荷の茶汲み女に売られたが、その美貌は江戸中の評判で茶屋は大繁盛であった。父親の悪行の報いか、この三人娘は三人が三人とも非業の死をとげた。この事件と、明和のお仙をないませにして、慶応元年(一八六五)八月、守田座に「怪談月笠森」という芝居がかかった。作者は二世河竹新七(後の黙阿彌)である。万延元年(一八六〇)十六歳の若さで立女形になった三世澤村田之介が、おきつ、おせんの姉妹二役を演じ、大評判。相手役はのちに団菊左(九世市川団十郎・五世

男たちは笑わなかった

新山 章一郎

尾上菊五郎・初世市川左団次)につぐ達者と称えられた七世市川団蔵(当時九歳)。田之介は水白粉の鉛毒からくる脱疽のため手足を切断、明治五年江戸の舞台を退き、中橋の澤村座の座主になった。不自由な身ながら、地方の舞台で名演技をみせ、明治九年、名古屋の新守座では、二十五日間の出演で千二百円という破格の給料を取ったりしたが、病が高じて明治十一年、三十四歳で狂死した。女のたたりと噂されたが、お仙のたたりであったのかも知れない。彼の実子由次郎も、期待されながら明治二十三年十七歳で夭折している。

いずれにせよ、これらの童歌は私のごく幼い時、普通の童謡が耳に入る前に母親の口から伝えられたことは確かだ、成長してから母親にたずねたのであるが、私が覚えていた歌詞以上に聞き出すことができなかったのは、今思うとまことに残念至極であった。

(二〇〇二・一・一四)

船旅には人生がある。それぞれの宿命を背負って乗りこんだ客は、船という回りから切りはなされた空間で、ある期間を共にし、果てしない海原を航海する。それは無限の宇宙を漂う宇宙船、地球号のミクロの縮図でもある。

宮崎港午後五時三十分発、川崎行き大型フェリーは長い汽笛を残して徐々に棧橋を離れた。暮れなずむ岸壁、街灯の淡い光の傘の中に女がひとり。携帯電話を耳に押し当て、必死に手を振っている。彼女と関わりのある、もう一つの人生がこの船に乗っているのだろう。

この船には別の人生もあった。九州での演習からの帰りでもあろうか、数十台の軍用車両と共に乗り込んだ、若い自衛隊員たちがそれだ。彼らが入り出す船室には「習志野空挺団様」と大書してある。知る人ぞ知る、陸上自衛隊最強の戦闘集団、空挺団の若者たちだ。

一朝ことあらば、夜陰にまぎれて敵の背後に降下し、孤立した邦人を救出する。さらに、そのような国際情勢になれば、もつと困難な任務を課せられるかもしれない。いずれにせよすべて極く限られた人数、装備で行う、敵の勢力圏内での孤立無援の作戦だ。よほどタフな精神と肉体と、そして戦闘技術の持ち主でないと作戦の遂行はおろか、生還さえもおぼつかない。

彼らの訓練は過酷を極める。その毎日は正に精神と肉体の極限を試す日々だ。水、食料など一切の補給なしの無人島での長期サバイバルゲーム、極寒の荒野で凍った携帯食をかじりながらの耐寒戦闘訓練など。正に彼らは何度も地獄を見てきた男たちなのだ。

事実、習志野空挺団には訓練中に死亡した若者たちの碑が建ち並ぶ慰霊地がある。

そんな男たちも乗せた船は一方で、九州帰りの観光客や上京する若者の一団、それに家族連れなどで、陽気な雰囲気にも満ちていた。

船内のあちこちでは、かかとを潰したスニーカーに、

裾のほつれたジーンズの茶髪たちがけたたましく笑い合っている。ふざけ散らしている。デッキのあちこちでは、手摺にもたれた恋人たちが人目もはばからず、腰を抱き、肩にもたれ、いちゃいちゃと絡み合う。

空挺団の隊員たちも航海中は私服のジャージなどで、一般の乗船客にまじり自由行動をしていた。しかし、彼らはじつに大人しく、もの静かだ。ラウンジの一隅では五、六人の隊員たちがくつろいでいた。彼らはたち騒ぐ同年代の若者などには目もくれず、ソファーに身を沈め、静かに語り合っている。

声高な論争も聞こえなければ、大きな笑い声も上がらない。せいぜい口元がニツとゆるむ程度だ。幾度も地獄を見てきた男たちには、この世の中に大声で笑い合えることなど、何もないのかもしれない。クルーズ気分の客で浮きたつ船内も、彼らのいる一隅だけは心なしか静謐の気がただよう。

彼らの表情は、体格と同じくいずれも強く引き締まっている。極限状態での日夜の訓練が、その面立ちから若

者特有の甘さを削ぎ落としたのか。皆いざとなれば死地に投入され、孤立無援の戦いをさせられる若者たちなのだ。

しかも、その戦いようは現在の日本国憲法や、周辺諸国への気兼ねに手足を縛られた、極めて不本意なものになるに違いない。加えて、「戦うより逃げる」という弱腰の日本政府の方針だ。戦場にあつては、攻めるときよりも、逃げる時の方が犠牲はずっと大きい。

そのうえ彼らには実戦の経験を積んだ、百戦錬磨の指揮官がいない。身を守る実戦の智慧の蓄積がない。小石ひとつが生死を分ける戦場で、彼らはいかに戦わされるのだろうか。

ましてアフガンの米軍のように圧倒的な空軍力にものをいわせ、徹底的に敵を無力化してから兵員を送り込むというような戦略も、戦術も、戦力もない国の軍隊だ。この若者たちはそんな、最初から極めて不利、かつ悲劇的な戦いを強いられるべく運命づけられた男たちだ。

船旅の二日目、フェリーは駿河湾沖を航行していた。

空は真青に晴れわたり、波もない。船客たちは三々五々デッキを散策し、船べりにより、海原を圧して聳える麗峰富士の絶景に見とれ、クルーズの後半を楽しんでいる。

「うん。東京の小さな町工場だけど、世界に通用する技術を持っているらしいんだ。そこで二、三年みっちり修業しようかと思う」「そうか、良かったな。俺は正業さがしだ」そんな若者同士の会話が聞こえてきた。

船尾の手摺により、泡立ち盛り上がる航跡の彼方、船の辿ってきた跡をじっと見つめる青年もいた。彼の手には携帯電話が握り締められている。いずれの顔にも昨日の、あの浮かれ騒いでいた若者たちの面影はない。

空挺団の若者たちも、デッキに出ればしの自由行動を楽しんでいる。しかしその間も多くの者が腕立て伏せ、腹筋、倒立などの鍛錬に余念がない。さもないとまた明日からの厳しい訓練についていけないのだろう。

それぞれの青春を乗せ、フェリーは果てしない紺碧の大海原に太い、真っ白な航跡を残し、一筋に船路をたどっていた。

男の価値

西島 力

別の病室に入っているそのオヤジは、いったい何の病気で入院しているのやら分からないが、手術を受ける気配もなく、日がな一日ぶらぶらと他の病室、それも女部屋だろとうと何だろうと入り浸っている。話し好きに加えてすこぶる声がかいから、寝ている私にも彼が何処にいるか見当がつく。

話の内容から察するにオヤジはこの近在の土地持ちらしく、縁談の取り次ぎを道楽にしている。いま売り込んでいるのは男、つまり花婿の話だが、これを患者やその家族は申すに及ばず、他人の見舞い客から医者・看護婦にまで持ちかけている。それによると婿どのは何と毎月三百万円の不動産収入があるという。

「これだけありゃあ嫁御はすぐに大奥様だあ」とオヤジは豪語した。

若い男にそんな収入があるとすれば、どうせ親から譲

られたものだろうが、いずれにせよ本人が汗と才覚でかちえたものではない。ふつう仲人口といえ、男の場合はどこそこ大学出の秀才だとか、なにに会社に将来有望だとか、ラグビーの選手で体が丈夫だとか、なにがしか本人の能力・気質にかかわるセールスポイントが出てくるものだが、この場合ただ月三百万の一本槍である。いささか感じ入った私にオヤジの次の衝撃的な一言が止めを刺した。

「わしは価値のない男は紹介せん」

その後間もなくオヤジは退院したらしく、従ってその「価値ある男」の縁談が纏ったのかどうかは知る由もないが、オヤジが残したこの「男の価値」という優れて形而上学的命題は、無聊をかこつ私に格好の思索の種を与えた。

男の価値を女から見るとすると、ひところ流行った「三高」というのがある。高身長、高学歴、高収入である。時代の変遷につれて価値が浮き沈みするのは世の習いだからこの三つのうちどれかがランク落ちしたと

すれば、それは高学歴だと思う。

猫も杓子も大学へ行き出した。それどころか女の方が大学進学率が高くなつて、おまけに女子学生の方が概ね成績がよろしいという。しかもである。一流大学を出ても社会で出世をするという保証は何もないという現実が暴露されたとなると、高学歴という価値が転落するのは当然であろう。

するとその跡に何が来るのか。「顔」である。「男は顔じゃない」と言ったのは昔の話である。かつこいい、可愛い、カワイイ、さらにはオイシイとまで言う。男のペット化現象なのかもしれないが、何やら薄気味悪い話である。

今現在の日本の首相は小泉純一郎という人物である。彼は就任以来「聖域なき構造改革」という内容不明の念仏を繰り返し繰り返し声高に、あるいは居丈高に唱えるばかりで、やった事はいえばせいぜい靖国神社参拝とブッシュさん詣でくらいなのに、異様に高い支持率を維持し続けている不思議な宰相である。

マスコミによると、この人は親子三代だとか四代だとかにわたって男前で、女子高生が争ってポスターを買い街では中年女性が「純ちゃん」と叫ぶのに味をしめて、なんと自ら写真集を出版したという。理念や論理を尊ぶ世界とはおよそ縁遠い幼児的精神風土に、国家と国民の命運が委ねられようとしている。あなた、気持ち悪くないですか。

私の好みとしては男の価値は、いや女だって同じだが、与謝野鉄幹ふうにいえば「友を選ばば書を読み六分の俠気四分の熱」である。これのキーワード「書を読む」の重要な含意は「自分の頭で考える」ことだろうと思う。学生の本業は書を読むことだった。そのため昔は書生と呼ばれた。この言葉の意味は次第に変化し、やがて死語となった。いっぽう、学生という人種も日本では一九七〇年ごろを境にほぼ絶滅したものと推定される。

「書を読み」が男の価値の上位に座る時代はもう来ないのではないかと、という気がする。この行方の見えぬ知的劣化の主たる原因は、ひよっとしたらテレビではないかと、私は思い始めている。

わが母にまさる母なし

吉葉 芳彦

『前略 賀詞欠礼のご挨拶状、拝受しました。ご母堂様の・・・』

『拝復 お手紙ありがとうございます。実は今年の一月に母の米寿を祝いまして、今度は卒寿ですネと言ったのですが、叶いませんでした。息子の私が言うのも変ですが、母は（戦中戦後の時代を通じて）とても頑張り屋でした。それだけに、昨日も今日も母の部屋を掃除していますと、どうしてもこみ上げてきてしまいます。つい、今の心境を書いてしまい申し訳ありません。少しずつ元気をとり戻さねば、と思う今日この頃です・・・』

『お察しします。いくつになっても、いつまでたっても、母は母。笑ってください、私も亡き母にこんなことを語りかけては、ほんのチョットだけ寂しさを紛らわしてい

ます。

亡くなってからも二十数年にもなるのに、いまだに
お母さんの写真をじっと見つめることができないうる
んですよ。そんな息子を、いつも優しく見守ってください
っていますね。心のなかに母は生きつづけているのだ、
幸せになることが恩返しになるのだと、自分に言い聞か
せたりしてみましたが、むなしさはおさまりません。そ
のはずですよ、あんなにたくさんのお愛をいただいたん
ですもの。

八人もの子供の母親として、また個人病院の賄い方と
して、姉さんかぶりのエプロン姿で働きつづけていた後
ろ姿が目には浮かびます。いつも立ち働いていました。

悲運の時代だからしかたがないとはいえ、お父さんと
二人で築きあげた自宅も病院も、戦災で焼失して丸裸。
そのあと家族はまさに四散、さぞ切ないおもいをされた
ことでしょう。お母さんは一九〇〇年の生まれですから、
四十五歳のとき。私は四男の十四歳、旧制中学二年生で
した。

家族・係累は多く、しかも戦中・戦後の大変な時期であつたにもかかわらず、私にはお母さんの愛を一身にいただいていたような思い出ばかりです。

戦争中、学校給食のはしりでしょうか、昼のお弁当の時間に、生徒のお母さんたち数人が交替でお味噌汁づくりをされましたね。まさかと思っていたら、何回か来てくださいました。忙しいなかを、嬉しかったです。

儒家の始祖・孔子さまの「湯島の聖堂」や維新の志士・吉田松陰の「松陰神社」にもつれていっていただきました。小学生の私にはなんのことかわからなかった。

映画は長谷川一夫の「男の花道」。ジャズはアーニーパイルの「紙恭輔」など、など。大学を見にきてくださいましたね。かえりにお汁粉をいただきました。おいしかったです。

なぜに、どこによりも、お母さんと一緒だったことを鮮明におぼえています。スッポリと包みこまれた温かな感触が忘れられません。

あの慌ただしさのさなか、おおせいの子供たちのなかでも、私には勿体ないほどゆたかな愛情をそそいでくださいました。

親の愛を全身にうけた実感と確信とが、人生にとってどんなに大切か、あとになってよくわかりました。周囲の人への優しさの根っこ、逆境のよりの支えにもなりました。

私も子供をもって、親の愛情に甲乙のないこと、どの子もみな同じように可愛いことをしりました。でも、敬えてくりかえします、

お母さん。たくさんの愛を一身に、ありがとうございます。……」

(二〇〇二年一月十五日記)

ギニアの「十二月二十二日事件」

中村 爽

ドカンという爆発音に重なって、時ならぬ銃声が夜半の闇に響いた。窓の外から機関銃らしい連続した銃声に混じって、パンパンと小銃の音が聞えてくる。一九七〇年十一月二十二日、私が遭遇した西アフリカ、ギニア国への「外人部隊侵入事件」の始まりだった。

当時、私は首都コナクリでN商社の宿舎に泊まっていた。街を望む丘の上に建つ、市内唯一の高層マンションの六階だった。夜が明けてラジオを聞き、外人部隊が海上から市街に侵入して、政府施設などを攻撃したと知った。「ポルトガル領ギニアが、ポルトガル人、イタリヤ人などの外人部隊による侵入を企てた」と繰り返し放送された。そのうち停電になり水も出なくなった。同宿のN社の二人と、事情も分からぬままに部屋にこもり、時折聞える銃声の中で一日中、不安な時を過ごした。

二十三日早朝、銃撃戦が激しくなった。ベランダで外

の様子を見ていたN社のO氏をかすめて、一発の銃弾が窓ガラスとカーテンを貫き、居間の壁に食い込んだ。肝を冷やす一瞬だった。昼過ぎになり、ようやく銃声が治まったころ、ギニア兵が数名、自動小銃を構えてドアから入ってきた。「この六階から敵に合図を送る外国人を目撃した」と言う。全く覚えのないことだ。幸い事もなく済んだが、殺気立った兵隊との応対には緊張した。

やがて侵入者は撃退され、街は平静を取り戻した。被害もわずかで深刻な状況には見えなかった。小競り合い程度の事件としか考えなかった。翌日から私は仕事で慌ただしい時間を過ごし、いつか事件のことは頭から消えていた。

翌年一月、私は再びコナクリを訪れた。二か月前と様子が違って、街のあちこちに検問所が設けられ、通過車両が厳重に検査されていた。事情を知ろうにも、当時ギニアには新聞がなく、情報源はガリ版刷りのフランス語「官報」と、国营ラジオだけで、あまり役に立たない。頼れるのはギニア人の「くちコミ」だった。聞くと、政

府は調査の結果、事件には西ドイツの共謀が明らかだと
して国交を断絶し、在留ドイツ人を国外追放した。さら
に、ギニア政府高官数名が国家転覆を計った罪で逮捕さ
れた。事件以降、検問も含めて、外国人に対する監視が
厳しくなったのだという。意外な進展に驚いた。

数日後、顧客の政府機関が、私の会社用に家を提供し
てくれた。早速見に行くと、二階建てと平屋の二軒で、
市内の海岸沿い道路に面して並び、環境も良い。二軒と
もドイツ人が居た家で、追放後に政府に没収されたもの
だった。中に入ると、床には衣類や家財道具が乱雑に投
げ出されたままで、家族が慌てて出ていった様子が分か
る。そのなかに、三輪車や人形を見つけて同情を禁じえ
なかった。二十四時間以内の退去命令だったという。

ある日、逮捕された四人の元政府高官が処刑され、公
衆の眼前にさらされていると聞く。誘われて現場に行っ
た。それは今でも忘れられない光景だった。空港へ向う
道路はコナクリ市街を離れる地点で、歩道橋の下をくぐ
る。橋の両側に空き地が広がり、広場のようになってい
る。四人は橋桁に並んで首を吊るされていた。空き地は

びっしりと人で埋まり、まるで真つ黒な塊のように見え
た。炎天下で人々は声も立てず、動きもせずに、じつと
四人の姿を見つめている。異様な静けさがあたりを支配
していた。その中では私はただ一人の外国人であり、場
違いの存在にすぎなかった。私は人々の強烈な体臭が混
じり合った空気に包まれて、心に恐れを覚えながら、茫
然と立ちすくんでいた。

ギニアは民族主義指導者、セク・トーレの下に一九五
八年、フランスから独立した。反植民地主義をうたう同
大統領は、東寄りの社会主義路線を取り「豊かさの中の
隷属より貧困の中の自由」を尊しとした。厳格な政策は
経済的孤立を招き、国民は厳しい耐乏を強いられた。当
時、同国では食料品他、生活必需品が極端に不足してい
た。この状態に不満を持ち、西側資本の協力を得て、経
済発展を目指す考えが出てくるのは不思議ではなかつ
た。

一方、ポルトガル領ギニア（現ギニア・ビサオ）でも
独立への動きが強かった。ポルトガル人為政者にとって、

独立を達成した隣国ギニアは目障りであり、さらにエンクルマと並ぶアフリカ民族主義の星、セク・トーレの影響力は無視できない。これを叩くために、植民地主義者が、ギニアの現状不満分子と組んで起こしたのがこの事件ではなかったのかと思う。

西ドイツの加担については真偽の程はいまだに不明だ。現地にはいたドイツ人は鉦山関連の企業で、侵入の手引きをしたという説もあった。いずれにせよ、ギニアの対応は「反逆者」の処刑を含み、予想以上に過酷なものだった。セク・トーレが強い信念と厳しさを見せた処置だった。この事件を見て、私は一国の内実と事の真相は部外者では知り得ないことを実感した。

ギニア政府はこの事件を転じて、見事に国民の結束強化の契機とした。「十一月二十二日」(ル・ヴァンドゥ・ノヴァンブル)は戦勝記念の国祭日となり、毎年祝典が行われるようになった。私にとってこの日は、はからずも立ち会うことのできた歴史の一コマだった。

高齢化社会と言われた時代は移り変わり、今や高齢社会に突入している。

昨年五月十六日古希を迎えた。今では近代ザラに在る年齢層で「近ザラ」と言うようである。年寄りの仲間入りした実感はあまりないが、人間、歳をとるにつれて、以前にも増して一日一日が貴重な日々を感じるようになった。大事な時間と覚えてくるようになる。また身辺の小さな出来事にも興味がもてて、小さな進歩の中にも大きな満足感が得られるものである。最近、俳句に興味を持つようになり、五七五の語感リズムを生活の記録に取り入れるようになった。普段気にも止めなかったことを改めて言葉に置き換えてみて、句作を試みて、これが興味深くなかなか面白いのである。

誰でもより豊かに暮らしたい、より上手になり、より

尊敬されたい、ボケないでいつまでも元気でありたい、などと願うものである。この人間の向上心が日常生活の精力になっている場合が多い。誰にもライフスタイルの選択肢がいろいろとあつて自分の好きなものを選ぶことができるというのが豊かさということであり、選択肢のないのは豊かさではない。自分の人生に組み込んだ想像力豊かな社会を選択したいものである。

我々の世代は戦争と貧困を青春時代に経験した。平和と一定の豊かさの配当を享受出来なかつた時代に青春を送り、その見返りとして青春時代に演出し得なかつた熟年世代を選んでいるのではないだろうか。

顧みると、子供時代は学校ばかり、卒業すると仕事ばかり、定年以降はヒマばかりを送つた世代の「ばっかり」人生は多様な選択と組み合わせを認めない貧しい社会であつた。

しかし、現代は高齢社会にふさわしい新しい文化とシステムの創出の役割が課せられている世代でもある。これらの選択肢の中から選んで自分の求める手本とする場

合もある。

しかし、手本の通りにはなかなか実行できないものである。たとえ手本通りにはゆかなくても、結果は自ずと残るものであり、見本として役立つかもしれない。

ある宗教家が「それぞれの生きざまは、たとえ手本という立派なものになれなくても、見本として世の役に立つことはあるだろう」と言っていたのを思い出す。

後期人生は、自分を見詰めるいい時代である。手本には決してなれないだろうが、見本ぐらいにはなれるのではないか。

菜園作りも試みてみようと思う。四季折々の野菜をこの手で育て味わつてみたいと思う。そして、暗い、困つたというイメージを持たれている高齢社会を個性の再発見をしつつ積極的に生き抜いていきたいと思う。

Cheeseはチーズに非ず

宇野 存

人物写真を撮るとき、日本では「はい、チーズ！」と言いながらシャッターを押す。昔は、このようなハイカラな決まり文句はなかった。多分、日本人がチーズを食べるようになった戦後のことで、英語からの借用句であろう。

アンカレッジに赴任して間もないころ、*“Say cheese!”*の掛け声のもとに、アメリカ人と私の両家族が一枚の写真に収まった。出来上がった写真を持って来たその友人が、私の六歳の娘に、*“Yuki, you look angry. Why?”*（有紀は怒ったような顔をしているが、どうしたの？）とからかい気味に言った。

他の皆は口を左右に軽く開き、笑ったような表情をしているのに、娘だけが口をとがらせている。家内が「有紀ちゃんは『チーズ』って言わなかったの?。」と聞いた。娘は「言ったよ」とぶっきらぼうに答えたが、げげんそ

うな表情をしていた。そのときは、私もさして気にも止めず、皆と一緒に笑い流した。

数日後、留学していた大学で言語学の勉強をしてるときに、はっと気がついた。

言語には、文字を見ればその意味が分かる表意文字 (Ideogram) 言語と、文字そのものは意味を持たず音だけを表す表音文字 (Phonogram) 言語がある。漢字の中国語は表意文字言語で、英語は表音文字言語である。日本語は、漢字の表意文字と仮名の表音文字とからなっている。表音文字は、音声学的にみれば、更に、単音文字と音節文字に分類される。単音文字では、一つの文字が単音を表記する。我々になじみ深い欧米語のラテン・アルファベット(ローマ字)や、ロシア語のキリル文字はこれだ。音節文字は一つの文字で音節を表し、日本語の仮名文字や朝鮮語のハングル文字がそれである。

単音文字言語である英語は、子音字と母音字が不規則に同じ資格で並べられ、子音が三つも四つも続くことは珍しくない。stress, script, abstractsのよう¹⁾に、日本語

にはなご Consonant Cluster (子音結合) の単語がたぐさ
んある。

音節文字言語である日本語の発音は「ン」を唯一の例
外として、必ず母音を含む。五十音図のア行の音は、一
母音からなる音節。カ行からワ行のすべての音は、子音
と母音が対になり、一つの音節を形成している。例えば、
カ行・ア段の「カ」は「k+a」。従って、多くの単語で、
子音と母音が交互に規則的に並ぶ。

また、英語は子音で終わる単語が多くあるが、日本語
では「ン」以外は、普通、母音で終わる。例えば、英語
の [stress] [stres] は六文字からなるが、一音節でしかな
い。カタカナ英語では、四文字の四音節で、「ストレス」
[su+to+re+su] となる。英語の [stres] が、『NHK日本
語発音アクセント辞典』では、驚いたことに、「ストレ
ス」になっている。更に、巷では「ストレス」や平板化
の「ストレス」もまかり通っている。(これでは、聞か
される方はストレスがたまる)

チーズの話にもなる。IPA (International Phonetic

Alphabet, 国際音標文字) で表記すると、cheese は [tʃi:z] だが、チーズは [tʃi:zu] になる。英語の cheese は [i:] の口の形のまま [z] を発音できる。ところが、日本語のチーズでは [i:] から [ɛ] の口の形になり最後は唇がとがる。早口に「チーズ」と言ってしまうと、「ɛ」になった時にシャッターを押されると、笑い顔にならないのは当然である。娘にとっては、あらぬ言いがかりで、腑に落ちなかつたのだろう。

同じチーズでも、「チーズ」ならまだよい。第二音節からあと語末までに、平べったいアクセントをつける今の平板化発音では「チーズウ」となる。これなら、超怒り顔かひよっと顔に写るだろう。

カタカナ英語の問題点は多々ある。写真一つ撮るのも楽ではない。

「はい」と “Say” の違いはどうでもよい。問題は
そのあとだ。英米の “Cheese” と日本の「チーズ」で
は中身が違う。造り方や味ばかりでなく、発音が。

(最近はい、「チーズ!」に代わり、日本語発音

の特性を見直した新しい写真用語「アイス・ミルク・ティー！」や、小学校低学年では「1+1=2（ニー！）」がはやっているとのこと。これなら間違いない。

マエストロの手紙

若林 龍夫

平成十三年十二月三十日の朝日新聞朝刊に、わが国最高齢の指揮者朝比奈隆氏の訃報が掲載された。朝比奈さん直筆の手紙を思いながら、無念の気持ちに心に残った。年変わり平成十四年、ある初句会で私はマエストロ朝比奈を悼む一句を披露した。

新春（はる）待たず逝きし指揮者の手紙かな

各人の句が批評されていった。私の順番がきた。主宰

から「その指揮者の名は」という間に始まり、参会者から質問が続いた。手紙は実際に頂戴したのか。その経緯は。どんな書体であったか。今どうなっているのか。句自体の評価より、朝比奈さんからの手紙に参加者の関心はあったようである。

時は遡る。平成七年七月二十三日、大阪フィルハーモニー交響楽団の第三十四回東京定期演奏会がサントリイホールで予定されていた。指揮は朝比奈隆氏。曲目はマラーの「復活」。妻の所属する武蔵野合唱団員約百名が合唱を受け持つことになった。公演を前に合唱指揮のため、八十七歳の朝比奈さんが吉祥寺の練習所まで来て下さることになった。

夜七時、合唱団の待つ粗末な一室に、朝比奈さんが入って来られた。威風堂々、ゆっくり歩き、ゆっくり挨拶された。緊張が漲った。脱いだチョッキを捧げ持つ者。詰め襟の服に着替えた朝比奈さんは指揮台に立った。「さあコーラスを聴かせてもらいましょう」との一声で指揮は始まった。

合唱暫時。伴奏のピアニストに注意があった。ピアノ

が音楽になっていない。もっと音楽性を出せというのである。音に生きるマエストロの氣に障ったのか「こんな伴奏でよく歌が歌えるね」鋭い言葉が続いた。叱責されたピアノストは、大指揮者の指摘を実現しようと努力した。身も心も硬直してしまったのか、彼女は指揮者の期待に応える伴奏が出来なかった。

伴奏が思うようでなかったが、歌の指揮は進んでいった。「もっと声を押さえて」宗教曲の荘厳さが流れた。「皆さん本番では立派な楽団が演奏するから、歌い易いと思うよ」との言葉でその夜の指揮は終わった。妻はピアノストの立場に同情しながらも、プロの厳しさを肌で感じた。大阪フィルの団員はピアノストと同じように、厳しい指揮に耐えてきたのであろうと想像は膨らんだ。

本番直前にも「オケ合わせ」が大崎のスポーツプラザであった。大阪フィルハーモニー交響楽団員百人、ソリスト二人、百人のコーラス団員による綺麗な音楽に「良く出来た。本番はしっかりやろう」との講評があった。ハプニングが起こった。管楽器の楽団員から声があり、演奏の仕方について質問がありますとのこと。質問にコ

ンサートマスターが答えた。「あなたではなく、朝比奈さんに質問しているのです」指揮者朝比奈隆は丁寧、納得するまで説明をした。

七月二十三日いよいよ本番を迎えた。私はサントリーホールのバックシートに席をとった。指揮者の動き、指揮ぶりを見るには最適だからである。全員が舞台に揃って静寂の空気が漂った。間合い宜しく朝比奈さんは「ゆっくりとしかも堂々と」指揮台に歩を運んだ。朝比奈さんの存在が会場の雰囲気静粛なものにした。一呼吸、タクト一閃、演奏は始まった。高齢を感じさせない見事な演奏であった。「復活」は終わった。万雷の拍手が観客から寄せられた。楽団にも、合唱団にも。指揮者は観客に「ゆっくり」と挨拶し舞台を去った。いつまでも指揮者の余韻が残った。

妻と私は朝比奈さん宛にお礼の手紙を書くことにした。私は昭和二十九年に京都の大学を卒業した。卒業式で音楽会があった。辻久子さんのバイオリン。オーケストラの指揮は、大学の先輩である四十七歳の若き朝比奈隆さんであった。曲目は確かチャイコフスキーのバイオ

リン・コンチェルトのある楽章だった。当時のことを私が書き、妻が音楽会のお礼を書いた。

驚いたのは、朝比奈さんから間髪を入れずにご返事を頂いたことである。恐らく直ぐに書かれたのであろう。「東京のコンサートでの合唱は素晴らしい出来でめでたかったです」……「一つ一つの舞台をみっしりと勉強してがんばることで、皆さんによろしく」朝比奈隆。骨太のがっしりした書体であった。額入りのマエストロはピアノの上から「みっしりと勉強を」と語り続けている。

フェザーストン事件と連合国捕虜

玉山 和夫

ニュージーランドは第二次世界大戦では英連邦の一国として日本と戦っていました。一九四二年九月ガダルカナルなどで捕虜になった日本人を収容する施設をフェザ

ーストンに作り、年末までに海軍設営隊員、巡洋艦古鷹乗組員、陸軍兵など八百五十名を収容しました。この中にはボートで漂流したり体力の衰えた人も多くいましたが、翌年二月には収容所から作業に出るよう要求されました。

それに反発して収容所第二地区の二百五十名は二月二十五日の朝作業に出るのを拒否して広場に座り込み動きませんでした。収容所側は強硬な姿勢を見せ剣付小銃や機関銃を持った警備兵四十名で三方から囲みました。収容所副官のマルコム大尉は二時間にわたる押問答の末、捕虜スポークスマンの安達海軍少尉を命令違反で逮捕しようとなりました。少尉は反抗的な姿勢をとったので、怒った大尉はピストルを二発発射し、少尉は倒れました。それにつられて警備兵が一斉に座っている捕虜に対して発砲しました。古参下士官が「射ちかた止め」と命令するまでの二十秒間に捕虜四十八名が死亡、七十四名が負傷しました。一方広場を三方から取り巻いていた警備兵六名が同僚の銃弾を受け傷付き、その内一名は後で死亡しました。

このニュースは当日午後、日本の利益代表であるスイス国総領事と国際赤十字の駐在員に知らされ、この二名は別々に収容所に行き調査しスイス本国と赤十字本部に報告書を送りました。これらの報告書は座り込んでいた捕虜が一方的に射殺された状況を正しく記述しており、日本政府に送られました。

一方、ニュージールランド総理は英本国政府に極秘電報を送り、当局がミスを犯したという印象を与えると致命的なことになるとの指示を得ました。そこでニュージールランド政府は三月一日になって初めてこの事件を発表し「捕虜が石や手製の武器で警備員を襲ったので射殺は止むえなかつた」と偽りました。現場の責任者マルコム大尉は軍法会議にかけられず全く処罰を受けませんでした。

日本政府は捕虜の殺戮は許せない反人道的な行為だとし、連合国が適切な処置をとることを求めました。さらに日本の対外放送は捕虜が意図的に殺害されたので日本

は報復処置を取ると主張しました。これに対して連合国側はジュネーブ条約の条項は守っていたので、責任者を処罰しないと回答しました。

このような連合国の事実を認めない独善的な態度は、日本軍の捕虜になっていた連合国白人兵士十三万人に不幸な結果をもたらすことになりました。日本は捕虜の取り扱いを国際的に決めたジュネーブ条約を批准しておりませんでした。しかし戦争が始まった後連合国の問い合わせに対し、連合国が条約を遵守することを期待して日本もジュネーブ条約の主旨を尊重すると回答していました。

日本は過去の日露戦争や第一次大戦では捕虜を優遇すると国際的にも高く評価していました。第二次大戦でも当初は予想をこえる大量の捕虜を持て余した面はありましたが、極力条約の規定に即し無理のないように努力していました。例えば作業させる場合でも実働七時間を厳守していました。

フェザーストーン事件で日本政府は、連合国は捕虜を簡

単に殺しジュネーブ条約を無視しているとの印象を受けました。その上、連合国の不誠実な回答態度に失望し怒り日本の捕虜管理局はすべての捕虜収容所に事件の詳細を送り、かつこれを捕虜に知らせて良いと指示しました。これはもはやジュネーブ条約に拘束されなくても良いことを意味していました。

当時五万人の白人捕虜が泰緬鉄道の建設に使われていましたが、それ以後は雨天でも割り当てられた作業が終わるまで長時間働かせられるなど酷使され、体力が弱ったところにコレラが蔓延し四分の一が死亡するなど悲惨な結果になりました。戦後この責任を追及され、連合軍により多数の日本の俘虜収容所員が戦争犯罪人として処刑されました。

フエザーストン収容所の事件は、ニュージーランド政府が事実を隠していたので、日本人捕虜が暴動を起こしたため射殺されたと信じられていました。しかし近年の公文書公開で、現場指揮者のミスから四十八名が一方的に殺された真相が明らかになりました。ニュージーラン

ド国内でもこの反省から、この事件を主題にした中学校向けの副読本が作られております。日本では戦争中のことは学校教育では避ける傾向が強いですが、自分の国の悪かったことも隠さず公平にとりあげ、過ちを繰り返すまいとする教育には感心させられます。

二つの倭国

山 辺 武 磨

昨年、私は本誌上において「かつて、二つの月が存在し、そのうちの一個が突然、宇宙破局的に消滅したことによって、生物生態のバランスが壊れ、恐竜その他の生物の大絶滅をもたらした可能性がある」という仮説を提示した。

今回も同様に、私は「日本古代史において、同名異邦の二つの倭国（前倭、後倭と仮称する）が存在した。前

倭は、中国江南地方から稲を携行して侵略してきた弥生人の波状襲撃により滅亡した。その後にいわゆる「倭国大乱」から後倭が誕生し、数次にわたる王権の交代はあったが、現在の日本国へと、国家としてその同一性を保持してきたとみなされる。また同時に、弥生人は日本渡来前、江南地方において、日本語の原型とみなされるある言語、中国語の江南方言ならびに公用文語としての漢文を使用するトラリングアル・スピーカーであった」という仮説を提示したい。

前倭国は、縄文人と朝鮮半島からの渡来人が協力して建国した連合王国であって、首長は渡来系から選ばれ、首都は現在の福岡市域にあり、領土は朝鮮半島南部および西日本一帯に広がっていた。この国は、朝鮮半島諸国を経由して、漢王朝に朝貢し、五七年には、有名な「漢倭奴国王」と記した金印を光武帝から得て、漢の属国となったのであるが、弥生人は、日本国渡来以前すでにこの金印の存在を知っていて、いつかは、この金印を奪い取り、新倭国を建設しようと考えていたのではないかと

思われる。

文献によれば、一〇七年には、前倭国王は、再度漢王朝に朝貢している。私の考えによれば、五七年から一〇六年までは、朝貢は定期的な、毎年または数年置きに行われたので、特に文献に残ってはいないのであろう。しかるに、一〇七年の朝貢の記録以降、二三年に邪馬台国（すなわち後倭国）女王卑弥呼が魏国に使を派遣するまで、朝貢の記録がない。こうした事実からして、一〇七年に弥生人の大規模な侵略があり、前倭王は漢王朝に救援を求めたが、安帝は海外派兵を嫌う宦官勢力に妨害されて援軍を送れず、前倭王は、金印を志賀島に埋めて海路逃亡し、前倭国は滅亡したものと思われる。

言語面から考察すると、前倭国で一般民衆が使用した言語は、古代アイヌ語であり、上流階級は、古代韓国語を話したが、両言語間には、交流はなく、公用文章語は漢文であったと想像される。前倭国滅亡後、卑弥呼の後倭国建国に至る間に、古代アイヌ語と古代韓国語の使用は廃れ、これに代わって、弥生人が江南地方から持ち込

成人式に思う

アブドルカーダー 栄子

み、後世において記紀に編集された古代日本語が、単独に、あるいは中国語の江南方言と混同して「やまとことば」として用いられ、漢文は引き続いて文章語としてその地位を保持した。

現在、学界においては稲作は、中国江南地方から海路により直接日本各地に伝えられたことが定説となっており、また、有名学者間に、日本古代人のバイリングアリズムまたはトライリングアリズム説が次第に広がりつつあることを考えると「二つの倭国」説を考古学のおよび言語学的に検討することが非常に重要なことであると思考する。

現在、なぜか日本語の起原について活発な論争が行われているが、日本語を学ぶ外国人の数が年々増加していることから、これについての明確な定説を外国人に示すことができるよう、専門家の奮起を促したい。

新聞の報道によれば、今年の成人式は、これまでのようなお仕着せの式ではなく、新成人たちが自主的に作り上げたものが多かったそうだ。ここ岩手県でも、活潑な話し合いの結果「県内全市・酒なし」となり、各市町村がそれぞれ独自のやり方で行ったようだ。参加者率はどうだったか、私語は、マナーの悪さは、トラブルが発生したところは……などなどの全国的な統計もそのうち公表されることだろう。

しかし、だ。たとえ、新成人たち自らが参画した式であったとしても「成人式は開催した方がいい」という前提があったうえでいい。その本当の目的や意義についての徹底的な議論があったらどうか。なかった、と私は考えている。つまり、成人式を続けるか、やめるかといった根幹の問題は語られずに、ただ、やりかたに工夫があった、それだけの話だったのだ、と。国民の祝日なんだから仕

方があるまいの義務感のもとにだ。

さて、このように言いきる私は、成人式なんて無意味な、早く中止してくれないかと、そればかりを願ってきただのである。式の形骸化現象がかくも進行しているのに、なぜならだと存続しなければならぬんだ、と腹立たしく思ってきた。そして、あれは平成十一年だった。

「新成人式研究会」が発足、「ああ、なぜそうまでして」と、あのときも怒りさえ覚えた。成人式よりも何よりももっと重要な問題、若者たちの「自立心」こそが問われてしかるべきだ。ものごとをじっくりと考える力、判断力、自問自答の生き方、自己の確立、つまりは自立心を彼らに身につけさせるためにはどうしたらいいのかに心を砕くべきなのだ。それなのに、なんでもかんでも式典・つまり、セレモニーでことを処すとは。しかも、祝ってあげるから、な、集まれよ、と。

その、してあげる、してあげねばの面倒の見すぎ、いや、若者を子ども扱えること自体が問題なのだ。親切の思い違いの過保護、そのもて育てられた彼らは、だからのうのうとかく言ってるのける。「式に出れば昔の懐

かしい人に会えるじゃん、そこが何よりの魅力よ」と。自分の生き方を、ああでもない、こうでもないと真剣に模索中なはずの彼らの、これが本音なのだ。この若さで「昔の懐かしい人……」を口走るとは。私に言わせれば、彼らには自立の自の字のかけらさえもない。

そして私は、長年住んだマレーシアやオーストラリアで体験した「成人の日」を思い起こすのだ。特にオーストラリアのそれは感動的といえるものだった。かの国では、成人の祝いは国の行事ではなく、個々人の家族の行事であった。成人に達したわが子の、社会への巣立ち自立に、親は心からの祝福を送る、そんな日なのだ。

二十歳（十八歳で成人とみなす国も多い）になった誕生日に、親、祖父母、本人とその友人が集まって、我が家で祝い合う。手作りの家庭料理と、招かれた者がそれぞれ持参した一品、ワイン、ビールなどがセッティングされたテーブルに並び、「Happy Birthday」[Congratulations]がとび交い……。うたったり、輪になって踊ったり、ゆっくり話し合ったりで。

オーストラリアには「子どもは、成人の日までの社会からの預かり者」という社会通念みたいなものがある。そしてこの成人の日までの自立に向けて、親たちは厳しく子どもたちをしつけていく。まだまだ幼いころから、親の手伝いをするので身につけさせていく炊事、掃除、洗濯、もちろん男女を問わずにだ。学校に売店はあっても給食制度がないから、サンドイッチは自分で作って持参する。この国の一番のごちそうはバーベキューで、これを作るのは男の役目とされているが、薪を燃やして火力を落ち着かせ、鉄板に油をしき、肉を焼き、食べ終わったら食器を洗い、火を消す、そこまでの一切を子どもはまるでこまねずみのように父親のそばで手伝う。こうして一つ一つを体で覚えていく。何事もこの成人の日まで、と。だからこそ、この日を迎えた親と子の、なんと晴々しい顔だったことか。長年我慢強く教え、教えられたもの同士の開放感が、喜びが、そばの私たちの胸にもジーンと迫ってきて。この日を期して彼らは親元を離れ、自活する（何らかの理由で親と同居する者も、この日か

らは一人前の大人扱いとなる。）。

日本の若者は、このような自立心Ⅱ個人の自立の訓練を、家庭でも学校でも、いや、社会全体から見逃されてきた。その結果、いつまでも子ども扱いだ。子ども扱いするとはつまり、若者を信じないということでもある。この若者への不信任、猜疑心が、おせっかいとなり、彼らのヤル気をなくす。自立心欠乏症とにさせる。いったい、いつまで若者を窒息させ続けたままにしておこうとするのか。成人式での彼らの荒れを、その原因を理解しようとしなのか。まずは私たち大人の意識改革が急務である。そして、若者の自立心の養成にいかに取り組むかに心を砕くべきである。そのためにも、成人式をまずやめること。国家行事から、個々人の家族の行事とすること。この第一歩からの踏み出しを願っている。

(二〇〇二・一・一四)

私が選んだ二つの良い国

スイス・ニュージーランド・シンガポール

三宅 劬

昨年末、過去五十年近く書き記した日記と旅行記録を眺めていると、四十一年前の最初の西ドイツ出張から昨年末のシンガポール旅行まで百回余り海外へ出ており、良く旅行したものとわれながら感心した。

初めての海外出張報告をまとめて旅費の清算をした時、二か月で約百五十万円と当時の年収の約三倍であった。そのころキャサリン・ヘップバーン主演の「旅情」を見て、O.Lが休暇で簡単にヨーロッパに出かける米国はなんと豊かな国と感心した。当時の貧しい日本からは、今日のように手軽に海外旅行ができるようになるとは想像も出来なかった。

百回余りの旅で訪れた国の数は四十前後、米国・ドイツ・ニュージーランド・シンガポールのように度々訪れた国もあれば、一度だけの国も多い。米国のような経済

大国、インドのように国は広く古い歴史はあるが、大半の国民が非常に貧しい国、イタリアのように古い歴史があり素晴らしい建造物や絵画、美味しい料理と陽気な人々…。旅行するには楽しい国の中から選んだ三つの良い国を挙げたい。

《スイス》美しさと豊かさ

一九六〇年の最初の出張で西ドイツでの仕事を終えた後、三週間をスイスで過ごした。チューリヒ市内の家族経営の小さなホテルに宿泊して、少し離れた町にある機械工場に、購入した機械の検収と取り扱い見習いのため、約二週間毎日汽車で通った。

私が勤務していた会社の主製品はそのころは肥料だったので、工場は汚いという先入観があったが、訪問した工場の清潔なことと従業員が勤勉なことには感心した。週末などに何か所かの観光地を見て歩いたが、景色の美しさ・清潔さ・豊かさは驚くばかりであった。

スイスの歴史を勉強し、一八一五年のウィーン会議で宣言した永世中立が列国に承認され、その後百八十六年

間も戦争をしていないことを知り、現在の豊かさはスイス人の勤勉さも大いに寄与しているが、戦争が如何に無駄なものであるかを再確認した。

恵まれた自然で観光収入が多いとはいえ、資源の乏しい小国に世界有数の製薬会社や食品会社が誕生しているのは立派である。

しかし、無記名非公開を原則として、ナチに迫害・殺害された多くのユダヤ人の莫大な預金を没収して返却しないスイスの銀行システムには、反発を感じる。またスイス人とはなかなか親しくなれないような冷たさがある。

《ニュージーランド》温かい心と環境保全

ニュージーランドへは一九八八年に最初に訪れてから、毎年のように個人旅行を続けているが、何よりも私をひきつける魅力は人々の心の優しさである。

十数年前、当時の通産省がシルバークロンピア計画という名の、定年退職後物価の安い海外の国で過ごしたらどうかというプランを発表したとき、海外諸国から日本

はソニー・キャノン・ホンダなどの製品の他に老人まで輸出する気かと響きを買ったことがある。このプランは、候補になる国の条件としては、気候・物価・治安・言葉・医療水準などが重要な項目になったが、ニュージーランドはオーストラリア、カナダ、スペイン南部などとともに対象国の一つであった。

その後何度かニュージーランドを訪れているが、その美しい景色と恵まれた自然環境を大切に守ろうという政府・地方自治体・住民の三位一体の努力も素晴らしいと思う。

ニュージーランドにはエコツーリズムという、出来るだけ乗り物に乗らず、少数で専門家に連れられて自然を観察する旅があるが、この旅のモットー「とつても良いのは写真だけ、残しても良いのは足跡だけ」は環境破壊を防ぐ素晴らしい言葉と感心している。

《シンガポール》観光と情報立国

シンガポールには独立した年の一九六五年に最初を訪れて以来、昨年末まで十五回旅行している。最初のとき

は汚い貧しい国だったのが、訪れる度に良くなり、三十年余りの間に世界一清潔な豊かな国になり、世界でも例を見ない素晴らしい模範国家である。

独立以来の目標であった観光立国は二十五年ぐらいで達成され、シンガポール航空は人気度世界一、チャンギ空港も機能面では世界有数、ホテル群の設備とサービスの良さが寄与して年間七百万人と人口の二倍以上の観光客が訪れる世界有数の観光国となっている。

最近の十年間は目標を情報立国として、各種の計画を推進して、数年前に完成した国際水準の国際会議場に加え、昨年その近くに完成したサンテックシティと呼ばれる五つの高層ビル群に千社以上の情報関連のハイテク企業が事務所と一部研究所を構え、エイシアン・バーティカル・シリコン・バレーと呼ばれて、近隣諸国から注目を浴びている。

シンガポールで開催される国際会議の数は、パリ・ブリュッセル・ウィーン・ロンドンについて世界第五位、ワシントンDCの十一位、ニューヨークの十二位よりはるかに多く、東京は三十三位で足元にも及ばない。

淡路島くらいの狭い島に三百万人の国民がいても住宅問題のない住宅政策の素晴らしさ、中国系七七%、マレー系一四%、インド系七・六%という多民族国家でありながら全く民族問題のない政治など、何もかも素晴らしい国である。

シンガポールの歴史を見ると、独立以来三十年近く首相の座にあったリー・クワン・ユーの優れた先見性と強いリーダーシップによるところが大きく、優れた政治家が長い間良い政治をすれば、国がこんなに良くなるという世界でも例を見ないサンプルである。

散歩していて思うこと

中西 淑郎

私は出来る限り毎日一時間ほど散歩するようにしている。コースは、特定しておらず、その日の天候や気分によって変えるが、大体は近所の公園や川沿い、また時に

は近くの海岸を歩いたり、足をのばして江ノ島まで行くこともある。冬とはいえ、暖かい春のような日もあれば、寒風吹きすさぶ厳しい日もある昨今だが、寒さなど知らぬげに水鳥や鯉が川面をすいすい泳いでいるのを見ると、何となく心が落ち着くような気がする。この散歩の習慣は長らく続けているが、その間、周りの景色も随分変わった。特にここ数年で大きく変わったような気がする。

そのひとつは、緑に囲まれた大きな屋敷がだんだん少なくなり、それに代わって、色とりどりの小さな家々が所狭しと建ち並ぶようになったことだ。相続税のことや核家族化などのことを思えば、一般的な傾向として、それは止むを得ぬことだろうが、周りの環境にそぐわない原色にも近いような「奇抜な色彩」の家があちこちに出現すると、何とかならぬものかと思う。家の色彩などは個人の問題だから「構わないでほしい」と言われれば、それまでだが、環境との調和や風情が失われていくようで淋しい気がする。聞くところによると、塗装の色は入居者が指定したものだ、という。これから若い世代の

入居者がますます増えてくると、同じような「奇抜な色彩」の家がどんどん増えるに違いない。そうなれば、四季折々に変化する庭木や美しく咲いている自然の花が少なくなっていく一方、それに代わって、どぎつい色彩がどんどん目に飛び込んでくるだろう。風情ある静かな散歩道を歩く楽しみがひとつなくなっていくのは残念なことだ。

もうひとつ気付いたことは、散歩している人と犬が随分増えたことである。高齢化社会に突入したことで、健康を憂慮する高齢者が増えたのは自然の流れだが、加えて若い人たちの歩く姿も増えたような気がする。健康を指向する若者が増えるのは結構なことだ。そして不思議なことは、散歩する人たちの多くが犬を連れていることである。否、犬を散歩させるために彼等は歩いているのかもしれない。時には数匹の犬に身を任せ、犬の力に翻弄されているような高齢者や女性を見かけるが、そういえば、人よりも犬のほうが多いと思うことがある。少子化が進んだことで、ペットとしての犬が増えたのだろう。ペットのお手本のような小さな可愛い子犬から番犬の代

表選手のような大きな犬まで、種類はさまざまだが、どの犬も飼い主からの愛情をふんだんに受けているのが見えてよくわかる。腹巻のような健康帯はまだ良いとしても、身体をすっぽり被った衣服に加えて帽子まで着せられている犬を見ると、ちよつとやり過ぎではないかと思ひ、滑稽でさえある。そしてさらに、犬が理解するのであるうか、赤ちゃんをあやすように真面目な顔をして犬に話しかけている飼い主を見かけることもあるが、なんと幸せな犬たちだろう。

犬を飼うといえ、以前は用心のためがほとんどだったので、大きな番犬が主流を占めていたのだが、現在は事情が随分変わったようだ。今や犬はペットとして家族の一員となり、堂々と家庭の中に入り込んでいる。つまり、以前にはあった人間と犬との確かな垣根がだんだんと低くなり、その低い垣根さえほとんどなくなろうとしている。子供が動き回るように、家の中を犬が自由に走り回ったり、また、ドライブや買物ももちろんのこと、許される場合は、外食にまで愛犬を連れていく飼い主もいる。可愛がれば懐くし、懐けばますます可愛がる

ので、彼らにとって、愛犬は我が子のようなものだろう。

私は、散歩の道すがら、ふとこのようなさざまな犬と飼い主との関係に思いを馳せながら、彼らの動きを漠然と眺めていることがある。そして、その時に気付くのは飼い主のことである。愛犬と同じように着飾ったファッション派の飼い主や、自分の散歩や運動が主体で愛犬はそのお供といった感じの運動着姿の飼い主らなど服装はさまざまだが、一瞥して彼らのセンスがわかるのは、彼らが愛犬の糞を持ちかえる道具を携行しているか否か、ということである。最近犬を連れて歩く人が増えたので、ほとんどの飼い主は糞を処理する道具を携行しているが、まだ一部に手ぶらの人がいるのは残念だ。彼らは愛犬がどこに糞を残していこうが、全く無関心を装って過ぎ去るに違いない。しかも、そのような飼い主がファッション派である時などは腹立たしい限りだ。着飾った愛犬を見せびらかすのが目的で散歩しているとしたか思えない。

愛犬が道端で粗相をしても、平然と素通りしてしまう無神経な飼い主がいるかと思えば、一方では、黙々と愛

犬のものを袋に入れるばかりか、近辺に転がっているのまでせつせと拾い集めている人を見かけることがあ
る。そのような人を見ると心が洗われるようで、私の散
歩も楽しいものとなる。愛犬の糞は飼い主が責任もって
その場で始末してほしいものだ。

つれづれに思う

芦刈 克

私たちは「しゃべれば悩みが解決される」という精神
医学に対する間違った理解に惑わされている。過度に依
存するのは禁物だ。

旧友二人が病に倒れた。一人はくも膜下で直ちに入院、
もう一人は肺気腫にかかり二日ほど入院して通院加療し
ている。恒例の夏の懇親会の担当幹事の友だちは、若い
とともに襲って来る病魔は他人事ではない明日はわが身
だよ、と悩みをあれこれ語り始めた。

人は誰でも、思い浮かんだ感情を直ぐさましゃべれば、
その感情に巻き込まれ、同時に自分に閉じ込められてい
く。だからむしろ、人に語ることなく自分の中に抱え、
反芻しながら深め、整理し、話す相手を思い表現方法を
考える中からこそ、相手に伝うべき言葉が浮上するし、
それが自らを外に連れ出し支えもするはずなのだ。文学
も芸術も学問もそれなしには生まれなかつたはずだ。

どのような言葉が使われるかは、それが使われる文脈
の背後にある固有の価値観によって決まる。彼は今、朝
起きは早くラジオ体操を欠かすことなくやって二十分程
度の散歩を励行、すっかり習慣化されているという。私
なりの言葉で賞賛した。

彼とのやり取りで、ふと旧制中学時代の恩師の言を思
い出した。「人生は竹のようなものだ。竹が上に伸びる
ためには節が必要だ。節は太いほど高く伸びる。人生に
は節は何度がある。つまり、本人にとって困難と感じた
時だ。失敗に逃げない、もがいて闘って努力する。それ
が節を太くし、その後の伸びを高くする」との教えだ。

その聲咳に触れてもう五十余年、振り返ると、そのよ

うに苦闘しえたか忸怩たるものがあるが、困ったときには、この言葉を反芻してきたと思う。

感じるという心の動きは、心ゆくまで、しっかりと目で捉え、耳を澄まし、匂いを嗅ぎ、舌で味わい、手に触れ、そうやって体得した諸々が五感の深いところから生まれることだと、先の彼は語る。

そうして感じたことが言葉になるまでの道のりが生きるということだろう。このことが、なぜか恩師の言葉と重なる。大人にしても子供にしても、即座に言葉にできない思いや、一言では言い尽くせない感情。それを表す適当な表現に行き当たらない、そういう状況を黙々と生き行きつ戻りつ歩んでいく。その瞬間こそが人生そのものであると思った。

感じ方を沢山積み上げる心の土台作りの時間を生きる必要があるのかもしれない。この五感を駆使した心の土台が豊かだと、その後に吸収される言葉や知識の受け取り方が人間的にも、奥行きと深みのあるものになる。

そして、個人的には、それからの先の人生で少々の失

敗や挫折を味わうことがあっても、強くしなやかに心の態勢を整えられる底力ある人間になれると訊いたことがある。

変転極まりない世の中である。あまたの情報飛び交い、ついキョロキョロ、ウロウロ度が増してくる。

暗い事件のニュースや経済のデフレスパイラルが続き、世紀末からミレニアムをまたいで揺れ動いた新世紀気分が、いわば限りなく下方修正されて決着がついたかたちである。

役立つ人間になるには熟練が必要である。だから男たちにとつては、自分の仕事に没頭する時間こそが男たるものの美徳だった。即ち、男たちにとつて仕事場が人生のすべてだった。

価値を生み出す生産は夫の役割、妻は給料を取得する夫のために炊事、洗濯、掃除などを分担する消費者だった。そのことから、夫のより多くの賃金獲得活動に比べ、消費者活動は「主婦の愚痴」に過ぎないと思われたほど大量生産、大量消費の時代があった。

だが、狂牛病騒ぎ、環境問題や食品や医療関係の安全

を確実にするには頼りない政治に託すのではなく、環境や安全をないがしろにしている企業の製品を買わないことの方が世の中を変えると説く時代が変わった。

つまりは、社会生活においては、「私が一番」から「皆一緒に」へと変化の傾向にある。この変化が一時的なものなのか、それとも中長期的に及ぶのか、いまはわからない。

だが、人々は何を学び、そして時代は何を生むのか、私たちは日々歴史のただ中に生きている思いがする。

いろんな言葉・発信に振り回されずに思えど「日暮れて道遠し」という言い方が頭に浮かぶ。日はとづくに暮れて、真つ暗闇のまんなか。そして、そこに立ちすくみ、「道ってなんだ」と訊いている今の自分だろうか。

でも、物事に、静かに、じっくり向き合って考え、感じる力を養い、自分なりの言葉を見出し、発信していると思う。

開国の先覚者、井伊直弼

水谷 汎

昨秋九月十一日、米国で一大テロがあり、この惨劇に触発されて私はテロに仆れた著名な人たちを想起した。

蘇我入鹿、足利義輝、吉良義央、初代市川団十郎、佐久間象山、井伊直弼、坂本竜馬、大久保利通、伊藤博文の諸氏。近いところでは原敬、浜口雄幸、団琢磨、犬養毅、高橋是清、山本宣治の諸氏。数えあげればきりがない。

この人たちの中で、私は井伊直弼に深い関心を抱いている。この人ほど毀誉褒貶の甚だしい人物はいないであろう。時には開国の先覚者とたたえられ、ある時は勅命に背反して開国した国賊と非難されてきた。この人物に対する評価は、時代によって揺れ動いてきたが、現代人は先入主を捨てて世界の一環としての日本という視点から史実に即して彼を評価すべきだ。

井伊家の出自は、遠江の井伊谷の土豪であつて、徳川時代の譜代大名であつた。井伊直政は家康に仕え、その子、直勝は彦根藩主となり、家督を弟の直孝に譲つた。以下歴代、掃部頭かものかみと称した。

直弼は十一代藩主井伊直中（五十歳）を父とし側室お富の方（三十一歳）を母として出生した（十四男）。時は文化十二年（一八一五）十月二十九日。当時の藩主は十二代直亮（二十二歳）であつた。

天保二年（一八三一）父の死去に伴い、井伊家の嫡子でない直弼は三百俵の宛行扶持あてがいぶちと陋屋ろうぐを与えられ部屋住みの身となつた。この家屋を直弼自ら「埋木舎うもれぎや」と名づけた。時に十七歳。

この時から己自身を埋木にたとえ、忍苦窮迫の生活に入つたが、三十二歳で直亮の養子となつて江戸城に登城し將軍に初目見するまでの十五年を無為に過ごしてはいなかつた。

この間に彼は山鹿流の兵学、禅、茶の湯、居合（抜刀術）、弓馬、槍劍、銃術を学び、和歌、国学にも志し、寸暇を惜しんで勉学、精神修養に没頭していた。これが

彼の人格を形成したと言える。

嘉永三年（一八五〇）直亮死去により直弼は、十一月藩主となり掃部頭と称した。

井伊直弼は安政五年（一八五八）四月大老となり一大難局を背負うことになつた。時に四十四歳。

これより先、一月、幕府は日米条約調印の勅許を請うため老中堀田正睦を京都に派遣していたが、三月二十日条約調印拒否の勅答が正睦に与えられる結末となつた。神国思想に汚染された頑迷固陋な朝廷は全く井の中の蛙大海を知らずであつた。直弼は緊迫する内外情勢を洞察し、六月勅許なしで日米修好通商条約および貿易章程の調印を独断専行した。ついで七月にはオランダ、ロシア、イギリスと修好通商条約を締結した。

孝明天皇は条約締結に不満の勅諭を水戸藩や幕府に下したが、幕府は九月にフランスと修好通商条約に調印。この頃から京都・江戸で尊王攘夷派の志士たちがテロと蠢動しゅんどうを始めた。

直弼はこれを徹底的に弾圧した。幕権維持と開国推進のための英断であつた。世にいう安政の大獄である。

翌安政六年五月、幕府は横浜、長崎、箱館を開港しアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダとの自由貿易を許可した。さらに万延元年（一八六〇）一月、勝海舟らが咸臨丸でアメリカに向かい、同月には幕府は条約批准交換のため遣米特使外国奉行新見正興、小栗忠順らを米艦ポーハタン号でアメリカに向けて品川を出航させる時勢となった。

万延元年三月三日（西暦三月二十四日）水戸・薩摩の浪士たちが直弼を桜田門外で暗殺した。いわゆる桜田門外の変である。

同じ年正月、直弼は狩野永岳に命じて正四位上左近衛権中将の画像を描かしめ、自詠「あふみの海」の歌を賛して彦根の清涼寺に納めた。この寺は井伊家累代の菩提所である。このことは、彼が死を覚悟していたのではないかと私は推察している。

今、横浜の野毛山に佇立する井伊大老の立像（衣冠束帯の英姿）が眼下の横浜港を凝視している。周辺は掃部山と名づけられている。墓所は豪徳寺にある。

島田三郎は明治二十一年に勤王史観による直弼国賊論に反対し、その開国に果たした役割と功績を高く評価した『開国始末』を発表、薩長中心の維新史を批判している。日本の夜明け前、開国のために犠牲となった直弼の事績を改めて考察したい。（二〇〇二・一・三〇）

葦の髄からアメリカのぞく（続）

小島 博志

A 今世紀初頭にアメリカ大統領に就任したブッシュさん、ニューヨーク・テロ事件を追い風にして九〇％の高い支持率だそうだね。

B 支持率は高くても、大統領に選ばれた正統性については、米国民の三分の一が疑問を持っている。ウォールストリートジャーナルとNBCの世論調査によると、この割合はずっと続いているよ。

A 連邦最高裁判決で“中絶状態”になった大統領選

挙の開票結果を「手作業で再集計していたらどうなったか」。マスコミが追求していた結論がでたようだね。

B 昨秋、日本の新聞でも報道されたよ。「ゴア氏、今ごろ大統領だった」(朝日十一月十二日夕刊)と思ったら、翌朝の毎日は「ブッシュ氏やっぱり当選」の見出し。読者はあれれ?どうなってるの?の感じだった。

A では真相はどうだ。知りたいところだ。

B この調査は、ニューヨークタイムス、ウォールストリートジャーナル、ワシントンポスト、ロサンゼルスタイムス、AP通信、CNN、それにフロリダの地元紙二紙が八社連合を結成し、シカゴ大学世論調査センターに依頼して十か月余りかけて調べた。開票時、集計機からはじき出され無効になった一七万五〇一〇票を一票ずつ人の目で確かめた。世論調査センターの雇った専門家約百五十人が三人ずつチームを組んで、フロリダ全六十七郡を回って調べたわけだ。

A 投票済み用紙は見せてもらえるものかな?

B そこがアメリカらしいところだね。フロリダ公文書法により情報公開を迫ったようだ。出し渋った郡もあ

ったが、とにかく見せてはもらった。でも手に触れることは許されず、テーブルを挟んで郡担当者がかざす一票を三人の調査員が見つめた。

A 調査はどんな点に注目したのか?

B パンチカード方式の投票用紙では長方形のパンチ穴が貫通しているかどうか、四隅のうち何か所はがれているか、単なるえくぼ状態なのか。光学読み取りのマークシート方式では、卵形の空欄が完全に塗りつぶされているかどうか、レのチェック印のみか、候補者名を〇囲みしているのか。要するに、観察したままを三人がそれぞれ独自に記録、コード化してデータベースを作成した。有効無効の判断はせず、メディア側に委ねられた。

A ところで開票当日、無効票は何票あったの?

B それがお粗末。州当局も把握してないし郡当局でも不完全なところがあつて、今となっては確定できない。一七万六四〇〇票というのが一番正しい推定らしい。

A 話を調査結果の内容に移そう。

B メディア八社はあらかじめ有効票、無効票の判定基準を八、九通り想定してプログラムをつくり、データ

を分析した。各社独自の分析もあるので、どう説明しようか迷うね。

A 訴訟合戦の時系列に沿った説明がわかりやすいよ。

B 再集計を主張したゴア陣営は、法廷闘争に持ち込む段階で、民主党の優勢な四郡に絞った。パームビーチ、マイアミデード、ブロワード、ボリユージア四郡の再集計で勝算ありとみたが、今回の調査結果ではブッシュ氏との差（五三七票）を詰めたものの、二二五票及ばなかった。四郡のうち二郡の再集計は州当局の正式結果に織り込まれており、算入されなかったパームビーチ、マイアミデード両郡は郡の基準に従って算出した。

A フロリダ最高裁は四郡のみならず全六十七郡の再集計を命令していたはずだ。

B そうだ。でもこの判決はアンダーボートのみを対象にしていたので、今回調査結果でも、差は縮まらず四九三票差で「ブッシュ氏やっばり当選」となっている。

A アンダーボートとは聞き慣れない言葉だ。

B 米紙もみな説明付きなので新語なのだろう。一人

の候補者に投票したが、それが誰への票なのか機械で判定できず、はじかれたもの。たとえば候補者名を○囲みしても、空欄が塗りつぶされていないと、機械ではじかれてしまう。しかし、人の目でみれば投票者の意思ははっきり確認できるので、今回調査では有効票とされた。

A 再集計命令は連邦最高裁により事実上差し止められたが、それまでしなくてもブッシュ氏の勝利で終わったことになるね。

B その通りだ。ところで連邦最高裁は判決で「フロリダ全州にわたる統一した判定基準がなく、オーバーボートが判定対象に含まれていない再集計は合衆国憲法の平等原則に反する」と述べている。そこでメディア連合は大多数の郡が採用している基準を統一基準として再集計したところ、ゴア氏が六〇票上回る逆転勝利となった。有効票の基準は、パンチ票では一隅以上破れていること、マークシート票ではマークの仕方が正しくなくても何らかの印で一候補を選択した投票者の意思が確認できることが条件になっている。

A こんどはオーバーボートが出てきたね。

B アンダーの反対で、二人以上の候補を選んだ投票のこと。これではどちらを選んだのか確定できないので認められないのは当然だ。さらにえくほ票を認めたり、各郡独自の判定基準を認めたり、できるだけ有権者の意思を反映させるよう条件を緩めていくとゴア票が増え、最大一七一票差まで広がった。「ゴア氏、今ごろ大統領だった」ということになる。

A やれやれ、結局どちらが勝ったという結論なの？

B 世論調査センターの今回調査責任者ウルター氏がいうように、この調査からはどちらが勝ったと正確には言いきれないのだ。どちらが勝っても差はせいぜい数百票程度、フロリダ州の投票総数約六〇〇万票の〇・〇％以下。一日二十四時間に直せば、八・六秒差というわけだ。調査対象が一〇〇％とらえ切れていないことも考えれば、真の勝者は永遠の謎となってしまうた。

A 州単位に大統領選挙人を選ぶ間接選挙も、独立後二百年以上たつて制度疲労を起こしてはいないのか。州選挙人総取り方式は、全国では獲得票数の少ない大統領を誕生させる結果をしばしば招いており、グローバルな

民主主義”とは、ほど遠いと思う。構造改革が必要なのは日本だけではなさそうだ。

悠遊の記

新入会員の嬉しい驚き 古川 さちお

「企業OBペンクラブ」。大へんレベルの高い会のように思われたので、入会を許されたときはいささか緊張した。先輩会員の居並ぶ月例会に初めての出席。そこで驚きつつほっとしたことが二つある。一つは、多くの皆さんが「過去に面識があった」と感じさせるし、一部には一時期苦楽を共にした仲間がいたことだ。もう一つは頂戴した会則である。「目的」が、私の願望し、目指している生活態度にぴたり一致するではないか。先輩会員諸氏の足手まといにならないように、私心を捨てた勉強と活動に努めたい。

(二〇〇二年一月記)

二〇〇一年の短歌会

細川 謙三

短歌会の世話役であった西川知世さんがご病気のため引退されるのを機に、本年一月で企業OBペンクラブの短歌会が解散することになった。丁度七年続いてきた由である。この際、過去七年の追想をなймаぜながら短歌会についての感想を綴っておきたい。

文学というのは「言葉」を通じて、自己の内面を浮かび上げ人に提示し感動を伝達する作業であるから、自己の内面・自己の問題意識を提示するに当たつてのある覚悟が必要であるが、それを企業OBペンの方々を求めるのはいささか酷で（というのは私自身が未だに未完成で努力を重ねている状況だから）、ときどきは皆さんと妥協しながら交流を図つて来たのが実情であった。短歌という詩形式は、五・七・五・七・七という日本の伝統的な言葉の韻律の中に、自己の内面性、問題意識を盛り込もうとするものであるから、私たちのつくる短歌も今

生きている私たちの問題意識と言葉の韻律との交錯のなかに成り立っている。その間の呼吸を味得するには多分各々の一生を費やしても足りないのだろうと私は思うが、七年という歳月は、多分、ほんのその一端をお互いに手繰りよせたにすぎないだろう。

しかし、この企業OBペンクラブの方々には教養が深く流石に上達がはやかった。各々の方の個性によって、問題意識が異なるから、昨年の作品は次にあげるようなものに止まったが、それは新聞の短歌投稿者たちの水準を高く超えていたことは間違いない。

この短歌会は解散するが、何人かの方は私がつくつてゐる小誌「楡・エルム」に拠つてさらに精進される由である。余談だが、北田さんや三枝さんは、この七年短歌をつくつてきたことよつて文章の書き方のこつを知つたとつて頂いた。それは私にとつては何ものにも勝る喜びであった。また、この七年間、皆さまとの歓談の間に、私にとつては未見の世界と知識を教えて頂いたことは感謝にたえないことであつた。

どうか、皆さまの益々のご健勝とご精進をお祈り申し

上げて止まない次第である。

三枝 享

北田 純一

動脈瘤を人工管に取り替えるただそれだけと若き医師言
う

春の夜の家路の空に潤みたる赤き明星赤き三日月

コーヒーとパン焼く香り匂いきてわが寢室に朝漂^{あど}う

艶のある古い希いしにヘルペスの顔面麻痺にただに驚く

雲の上をふわりふんわり歩むがに手摺りに縋るリハビリ

の日々

マンハッタンの悲劇を映すテレビにはアメリカ国歌低く

流るる

驚愕のテロに色為なす大統領素材に喜ぶパレスチナの子

ら

自らの目をもて見よと人は言うアメリカ製の眼鏡はずし

て

百万の難民を産む爆撃が正義であろう筈あらなくに

平和愴げに徹せむものと希いしに歪みゆく世が後髪ひく

せがみ来る愛犬ふりきり元旦も一人気俵に吾は出で行く
茶毘煙る恒河の無常に比ぶれば安らぎ覚ゆ吾が江戸川は
うちとけし宴終りてただ一人月おぼろなる銀座を歩む
東の間に雲空晴れて現わるるアルプスを背に写真撮り合
う

萱葺きの家なお残る大和路の単線列車飽きを覚えす

一年に一度は訪^なう斑鳩は一寺ごとに心澄み行く

天安門に掲げし遺影若々し毛沢東世にあれば百拾歳とい

う

黙々と売場の隅に揮毫する清朝末裔の翁ゆかしき

出迎えの胡姬の紅粉なまめかしともに並びてポーズとり

たり

坐臥すれど吾の思いに沿うごとき発句浮ばすラマのみ寺

に

藤岡 豊

駅前の雑踏よぎれば暗き道匂い仄かに門松の立つ

通いなれしビルの谷間は変わりたり丸の内通り電飾まぶ

し

寒空を帰りつきたる吾が家の七草のかゆ湯気あたたかし
けなげにも寒さに耐えてパンジーの蕾は春の訪れを待つ
多摩川の土堤を駆け行く園児らの声軽やかに春は近づく
枯れ芝は芽吹きはじめて蟻動く狭き庭にも春は息吹きて
対局を終えてくつろぐ居酒屋に爛酒うまし秋逝く夜に
子を二人きびしく教えはぐくみて異境に生きる吾が娘た
くまし

また一人離れ住む友の訃が届き偲ぶすがにひとり酒飲
む

ゆく秋の夕日に映える五重の塔心なごみて立ち去りがた
し

松 浦 武 弘

へブライ語夏休みに吾精進し非常な進歩と師も刮目す
ウルパンで年寄り仲間のマル大川吾の変化に恨み言いう
ウルパンの若き女生徒らの手前薄い頭の吾も励みし
早朝の竹刀の素振り折りに触れ季節の移ろい肌で感じし
交差点きちんと停車ふと見れば教官つきそう練習車なり

久々に散歩の経路変更し更地の家に妻と驚く

吾が散歩台風一過汗かかずはや庭先に萩の花咲く
台風は遅い大型トリビートし期待はせぬも拍子抜けけり
七月は爛れしごときベゴニアも八月に入り生き生きと咲
く

小泉は靖国参拝打ち上げて熟慮の末が改革前倒し

西 川 知 世

山肌の小さき黄菅の花揺らし十国峠に霧の降りくる
宿の庭の塩辛トンボ高く低く露天風呂への道に付き来る
ニトロという小さき丸薬含みけり告げられし病名信じざ
るまま

椅子に浅く掛け診察を待つてをり読み進まざる歌集を膝
に

裏庭にかすかに秋の虫鳴けり窓少し開け麦茶を沸かす
紫陽花の道辿り来し山門に集団疎開の記念碑を見つ

泰山木の花は大きく開きけり雲低く梅雨兆す朝あしたに

ギヤマンの瓶紫檀の木琴など並ぶ旧家の雛の道具の中に
苑に咲く紅梅の香は濃く流る歩幅に合はぬ階下るとき

血の滾つごとき紅梅咲き満つる幹黒々と太く振ぢれて

アブドルカーダー 栄子

(企業OBペンクラブの忘年会パーティーに出席して)
幾年を経て会いたりし誰かれの瞳は凜として来し方いと
ほし

相会ふてうなずくだけのしあわせよ懐しき人らとそここ
こ会ふ

ひとときを夜空の花火見ることくときめきてをり相会ひ
たれば

息をきらし参宮橋に駆けつけし雪国トンネル越え来しわ
れは

掬うたび粉雪そらに舞いあがり雪搔きをきょうはたのし
みてをり



ペン俳句の一年 その佳句鑑賞

平間 真木子

二〇〇一年となり、十一月をもって句会報は一〇〇号を数えるに至った。この間、人々の推移はあったものの「ペン俳句会」としての着実な歩みをつづけて来た、との思いを深くしている。

六月は花菖蒲を尋ねて明治神宮へ吟行。十月は銀杏黄葉の東大校内を歩き、三四郎池を巡っての吟行。さらに十一月は浅草へ、一の西の賑わいをつぶさに見て回った。俳句は歩いて作る、ということを勉強したのであった。

ドイツより孫の声なる初電話
大寒や乾きて固き鉢の土
通されし会長室の熱帯魚
履き癖のつきし革靴秋暑し
冬の川護岸工事の船舫ふ

池田 耕治

横浜外人墓地

平間真木子

寒鴉啼けり寝墓の上に来て
凍蝶や墓碑に刻みし祖国の名
鉄柵の冷えしをもって墓地画す
墓地管理事務所の前冬墓
冬薔薇の丘に傾く居留地碑
正午なる船笛とどく冬木の芽
フランス山に春待つ栗鼠の来てをりぬ

若き日にドイツに赴任、その生活を味わってこられた作者である。現在は息子さんがドイツに赴任しておられる。その地よりの初電話、お孫さんの声は天使のように聞こえたことであろう。他の追従を許さぬ一句。また「会長室の熱帯魚」にはなんとも言えぬユーモアがある

おほらかに生きたきものと初日記
シヤンソンの一節口に春渚
山笑ふ控へしたばこポケットに
若者の群れて大暑の渋谷かな
終電の煌とともして冬の川

石川 正達

いつまでもお若い正達さんである。「おほらかに生きたい」と書く初日記の願望、シヤンソンを口ずさむ一ときもまたご本人に變りはない。背筋を正して歩く渋谷、そこは若者の雑踏と暑さばかりの町であった、と言う感慨。大人の感覚が秘められていると拝見している。

駅伝の人混みを縫ひ初詣
スイートピー壺にはなやぐ誕生日
夜桜や謡の声の遠くより
卯波寄す船首のしぶき浴びにけり
月明かし幾重となりし踊りの輪

亀井 弘次

いままでの作品には、圧倒的に愛犬の句が多かった。犬のことに全く無知な私は、異次元の世界のこのように思われていた。それが何故かこのところ大分變られてしまった。簡単に説明のつくことではないが、俳句を通じて、おのれを語っていただきたい、と思っている。

新しき道標の立ち山笑ふ
ラッパ吹く兵士あるかも蟻の列
重馬場に馬の嘶く梅雨深し
百膳の妙薬にして唐辛子
酉の市おかめ主役を務めけり

岸本 義生

いつもお元気で、俳句もまた生きいきとしていることは何よりである。家で苦心してごたごた作るより、吟行をして、そこから新鮮な発見をした作品を作りたい、と言っておられる。「俳句は歩いて作る」という古人の言葉もあり、おおいに賛成したい。

水仙の似合ふ少女に育ちけり
はろばろと卯波寄せ来る九十九里
むらさきに雨を遊ばせ花菖蒲
夕星や相馬盆唄流れ来て
わが生れし猪名の笹原冬の川

北田 純一

昨年は「文人俳句」では、と指摘したのであったが、少し方向が変られたようである。掲出句にはことに詩的な叙情があり、のびやかな句がごろころよい。体調のこともあり、吟行への参加は無理とのこと、吟行句のないのは残念であった。

大寒や馬槿の跡の一直線
熊笹の少し濡れゐて陽炎へる
麦秋の空に去りにし特攻機
花菖蒲むらさきに翳濃かりけり
余生なほペンに生きをり晦日の灯

玉山 和夫

英文にて「日本兵の物語」を出版された由。これよりは「ビルマ鉄道隊戦史」を書かれるとか。そうした背景を知らなかったわたくしに、作者は黙って作品だけを示してこられた。先の大戦は、まだこうした型にて生きてい、ということを感じた次第である。

薺打ち囃言葉の故事知らず
窓の灯のそこだけ白し春の雪
狭山野に晚鐘流れ花の冷
ギヤマンの火の玉を吹く大暑かな
対岸も体育の日の万国旗

本田 松魚

もの静かに、そこに居てくださることがなにより、という存在感のある方。作品もまたしつかりときめ細かい。「ギヤマンの火の玉を吹く」とは、見て来た者に出来る把握として、みごとに出来栄である。今年もまた数々の作品を楽しみに拝見させていただきたい。

山笑ふ父母のふるさと訪ね来て
池の面の鴨にしだるる柳かな
本郷に本屋少なし走り蕎麦
山茶花のうす紅色のやさしかり
行く雲を眺めてゐたり大晦日

若林 龍夫

新しく参加されたのであるが、ずっと其処にいたように素早く溶け込まれてしまった。奥様も俳句をなさっておられるようで、日常の中に、俳句の話題が豊富な感じである。東大・本郷周辺吟行の折りの「本郷に本屋少なし」の発見の一句は楽しいものであった。

身のどこか痛みて寒に入りにつけり
国生みの伝説の鳥若布干す
火を噴きし山静なり麦の秋
校門の大きく開らき灼けてゐし
曳き舟の重き音して冬の川

西川 知世

六年に亘る老父母介護の疲れが溜ったようで、体調を崩されたそうであるが、元気のよさは変りがない。それでも作品の上に「身のどこか痛みて」と素直に述べておられることは、恙のあるせいであろうか。「火を噴きし山静かなり」の句は、静と動の世界を的確に描いている。

ふたり居の齢いたはり雪搔きす
アブドルカーダー栄子

しばらくペン俳句会を休んでおられたが、昨年暮れの忘年会に出席された。それを機に「俳句の復活」を決意なさったとのこと。今後のご健吟をお願いしたい。

企業OBペンクラブのあゆみ

平成十三年（二〇〇二年）

年 表（原則として敬称略）

一月例会（二十三日）

・会員講演

西川 武彦

「ウッディ・ライフの四季」

・本の紹介

上原 利夫 「平然と車内で化粧する脳」

・新年度の方針発表

・西川永幹氏が一月二十四日逝去

二月例会（二十七日）

・会員講演

斎藤 勁

「歴史・考古学のトピックス―二〇〇〇年」

・特別講話

北田 純一 「大動脈瘤について」

年 史

一、役員人事（任期二年目・前年度と同じ）

会 長

北田 純一

副会長

中川路 明

理 事

多田 修

理 事（事務局総括）

藤岡 豊

運営委員長

都甲 昌利

事務局長

中村 爽

運営委員長補佐

大野 晁

監 事

児玉 忠雄

二、新年度の方針

・インパク（インターネット博覧会）に参加し、ホームページを通じてクラブの存在を天下に知らしめる。この目的のため、会員それぞれがホームページの作成を目指す。

三月例会（二十七日）

・入会 石川 純 中西 淑郎

・会員講演

金京 法一

「核抑止戦略の成立と変遷」

・本の紹介

北田 純一 「天皇誕生」

・退会 瀬戸 新策

四月例会（十八日）

・入会 奥山 融 橋本 政彦

・会員講演

莊司 忠志

「最近のアメリカ」

・本の紹介

石川 正達 「ヒロヒトと近代日本の生成」

五月例会（十五日）

・会員講演

・IT技術研究をさらに深化させ、電子出版のノウハウを取得し、対外発信機能の強化に資する。

三、会員数

新入会員は五名、退会者は物故者を含め五名で二〇

〇一年末現在の会員数は九十一名となった。

四、出版・プロジェクト

(一) 同人誌「悠遊」第八号が三月二十七日に発行された。(編集世話人 小島博志・石川正達)

(二) 電子雑誌「ベストライフ・オンライン」への寄稿を継続。「年金経済学」、「ビジネスライフ」、「真木子俳句教室」等が連載された。また、同誌の当クラブ用サークルホームページへの会員作品掲載を開始。(プロマネ 北田純一・高橋孝蔵)

(三) 「企業こと始め」として発足したプロジェクト。「ベストライフ・オンライン」のサークルホームページに、「世の中一口物知り帳」のタイトルで、「帝国ホテル」(都甲昌利・九月)、「海洋水槽ことはじめ」(岩崎洋一郎・十一月)を掲載。(プロマネ 黒崎昭二、都甲昌利)

石川 純

「菌周病とはどんな病気か？」

・本の紹介

大野 暉 「IT革命のカラクリ」

・訃報

元会員佐份利治氏が五月五日逝去

六月例会（十九日）

・会員講演

児玉 進

「東京ライターのズバンの誕生から近況まで」

七月例会（十八日）

・会員講演

東 与一

「沖繩近況レポート」

・本の紹介

三宅 勅 「危ない飛行機が今日も飛んでいる」

八月例会（休み）

(四) 「私の十七歳」。八月より「十七歳人生劇場」の

タイトルで会員作品二十六篇をクラブのホームページに掲載。(プロマネ 小島博志)

(五) 「公募をしよう会」は「公募資料」をベースに、会員が応募してきたが、初期の目的を達したので、六月以降休会。(プロマネ 中川路明)

(六) 「サラリーマン体験録」。雑誌「プレジデント」(二〇〇二・一・一四号)に特集『元企業戦士』

二六人の引継ぎ書」として、会員作品が座談会記事等とともに掲載された。(プロマネ 中川

路明・刀根館正久・岸本義生)

(七) 同人誌「悠遊」第九号は二〇〇二年三月発行予定。(編集世話人 小島博志・石川正達)

五、ミーティング・勉強会

(一) 小説研究会(マネジャー 八木大介)

玉山和夫、J・ナヌリー共著「TALES OF JAPANESE SOLDIERS」の翻訳に取り組み、

文章表現方法の勉強をした。翻訳の出版を目指し、出版社と折衝中。

(二) 英語を読もう会(マネジャー 村田孝四郎)

九月例会（二十六日）

・会員講演

中西 淑郎

「中近東あれこれ」

・本の紹介

金京 法一 「歴史とはなにか」

十月例会（十六日）

・ゲスト講演

東澤 紀子氏

「著作権について」

・本の紹介

松浦 武弘 「二〇〇二年の大暴落」

十一月例会（二十二日）

・会員講演

児玉 忠雄

「不良債権と銀行」

・会長選挙結果発表

近着の英字誌等を題材とする月例の英語購読会で、四月よりスタート。回を追って題材の分野も広くなり、読解力向上に着実な成果を挙げた。

(三) 何でも書こう会（マネジャー 新山章一郎）

文章修業の場として、すっかり定着した。会員相互の批評、討議により、文章力向上に寄与している。

(四) サロン21C（マネジャー 金京法一）

内外情勢勉強会と合併した形で本年より再スタートした。「イタリア情勢」「国家をめぐる幻想」「ユダヤ人」「アラブ問題」「同時多発テロ」等、多彩なテーマを取り上げ、活発な議論展開のもとに盛会を呈した。

(五) IT勉強会（マネジャー 多田修）

インパク参加を実現し成果を挙げる一方、ホームページ作成、電子出版等の基礎知識習得にとめた。また、近未来に向けて、ブロードバンド、光通信等、ITの先端技術について勉強した。インターネット・Eメールを利用する会員数は本年度さらに増加し、全会員の半数を超え

十二月例会（十九日）

・ゲスト講演

磯川 行男氏

「エネルギーと風力発電」

・次期役員選任報告承認

・忘年パーティー

恒例の忘年パーティーを「代々木倶楽部」パーティー

イー・ルームで開催

・退会 藤井 長司

た。インパクタ後の活動の充実化が次の課題となっている。

（六）短歌サロン・俳句教室

細川謙三、平間真木子両先生の指導のもとに、今年も会員相互の研鑽が続けられ、作品の質的向上がはかられた。

六、会員ニュース

・杉山修一がサロン・ド・ジュダイ展に作品を出展（二月・七月）

・遠藤俊也が「日本友釣同好会」会報に寄稿（五月）

・八木大介と新山章一郎がハンセン氏病訴訟につき、

それぞれ朝日新聞「声」、毎日新聞「みんなの広場」に投稿（五月）

・森田茂が雑誌「ロゼッタストーン」第六号（初秋号）

に「私の夢」を寄稿（七月）

・野村嘉彦が官庁機関誌「国際人流」に「ベトナム老

人はなぜ元気なのか」（ドー・ホン・ゴック著）の

書評を寄稿（八月）

・黒崎昭二が同誌第八号（初冬号）に「子育て」を寄

稿（十月）

・榎本喜三郎は母校中央大学第十二回ホームカミングデー大会（卒業生会）で参加者の最高齢者として理事長表彰を受けた。（十月）

・新井進は新日本美術院の新院展に作品を出展（十一月）、また文殊谷康之の筆名で「日刊県民福井」に「最後の領主―本多副元」の連載を開始（十二月）

七、その他

・日経産業新聞インタビュー記事「この人と5分間」に北田会長が登場、当クラブが紹介された（六月二十一日）。

・九月七日付同紙「新人脈地脈」に「企業OBペンクラブ」の詳細紹介記事が掲載された。

・当クラブのインパク参加に対し、担当国務大臣竹中平蔵氏より感謝状を受領（十二月）

八、新役員人事

十二月末で現役員の任期が終了し、来年度からの新役員が次の通り決定した。

会 長 北田 純一

副会長（IT担当） 多田 修

副会長 藤岡 豊

副会長（運営委員長） 都甲 昌利

事務局長 中村 爽

運営委員長補佐 大野 晷

理事 金京 法一

監事 児玉 忠雄

九、まとめ

今年も依然不況の出口は見えず、出版界の停滞は続いた。この中であって、当クラブは前年来の電子雑誌への寄稿、連載に加え、各プロジェクトを活発に推進した。各種勉強会では対外発信能力向上を目指し、幅広い知識の習得に努めた。また、会員の力を結集して立ち上げたクラブのホームページ上で、それぞれの作品を発表した。年末発刊の雑誌「プレジデント」新年特集号への寄与は今年の成果として特筆できる。多難を予想させる新世紀幕開けの年だったが、来る年の充実に希望をつなぎたい。

執筆 者 名 簿 (五十音順)

氏 名 (カッコ内は本名)	出 身 会 社	生 年	
芦刈 克	あしかり まさる	住友生命 ニッコン	1931
アブドルカーダ ー栄子	アブドルカーダーエイコ	日本語教師	1933
新井 進	あらい すすむ	伊藤忠商事	1931
池田 耕治	いけだ こうじ	第一勧業銀行	1927
石川 正達	いしかわ まささと	毎日新聞社	1921
今川 確郎	いまがわ かくろう	兼松	1926
今村 亮	いまむら りょう	京セラインターナショナル	1931
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン	1929
上原 利夫	うえはら としお	住友商事	1934
宇野 存	うの たもつ	日本航空	1935
榎本喜三郎	えのもと きさぶろう	三井物産 三井船舶	1914
遠藤 俊也	えんどう としや	東京銀行 丸紅	1924
大島 義	おおしま みよし	エヌ・イーケム・キャット	1931
大塚 滋	おおつか しげる	国鉄	1929
大野 昶	おおの ただし	三井物産	1933
岡 政昭	おか まさあき	東京銀行 NBD	1926
折戸 常司	おりと じょうじ	三井物産	1925
亀井 弘次	かめい こうじ	キリンビール	1928
岸本 義生	きしもと よしお	兼松	1927
北田 純一	きただ すみかず	三菱商事	1928
木下 洋介	きのした ようすけ	文化放送	1933
金京 法一	きんきょう ほういち	三菱商事 三菱総研	1933
黒崎 昭二	くろさき しょうじ	新日鉄	1927
小島 博志	こじま ひろし	毎日新聞社	1931
児玉 忠雄	こだま ただお	三菱銀行	1932
許斐 義信	このみ よしのぶ	三菱商事	1944
斉藤 勁	さいとう つよし	呉羽化学	1925
櫻井 清治	さくらい せいじ	三井物産	1926
荘司 忠志	しょうじ ただし	石川島播磨重工業	1932
杉浦 右藏	すぎうら ゆうぞう	N T T 三菱電線工業	1932
杉山 修一	すぎやま しゅういち	東芝	1930
関谷 裕彦	せきや ひろひこ	ローヤル・ネドロイド・ラインズ	1932

氏名 (カッコ内は本名)	出身会社	生年	
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう	丸紅 松竹	1936
竹内 京一	たけうち きょういち	トープラ	1931
多田 修	ただ おさむ	横河電機	1929
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省 日英協会	1919
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空	1933
刀裨館正久	とねだち まさひさ	朝日新聞社	1927
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業	1929
中洲 靖雄	なかす やすお	三菱レイヨン	1927
中西 淑郎	なかにし よしお	住友商事	1937
中村 爽	なかむら そう	日本工営	1933
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米軍海軍基地統合人事	1930
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空	1937
西島 力	にしじま つとむ	住友商事	1930
野村 嘉彦	のむら よしひこ	三井物産	1917
平間真木子	ひらま まきこ	日本機械輸入協会	1925
藤岡 豊	ふじおか ゆたか	三菱商事	1932
古川さちお(幸雄)	ふるかわ さちお	石川島播磨	1932
細川 謙三	ほそかわ けんぞう	東京銀行	1924
本田 克夫	ほんだ よしお	毎日新聞社	1927
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠商事	1939
水谷 汎	みずたに ひろし	満鉄 友愛信用組合	1917
三宅 劭	みやけ たかし	信越化学	1927
村田孝四郎	むらた こうしろう	新日鉄	1934
森田 茂	もりた しげる	出光興産	1930
八木 大介	やぎ だいすけ	三菱商事	1926
(木本平八郎・きもと へいはちろう)			
山辺 武麿	やまべ たけまる	伊藤忠商事	1919
吉井米三郎	よしい よねさぶろう	三井物産	1926
吉寄 清巳	よしぎき きよみ	関西ペイント	1925
吉葉 芳彦	よしば よしひこ	出光興産	1931
若林 龍夫	わかばやし たつお	大和銀行	1931
西川 知世	にしかわ ちよ	企業OBペンクラブ事務局	1948

吉井米三郎さんから寄稿してもらったカットの中に、三コマ連続のあの事件がありました。あれから「テロ撲滅」を旗印に、世界のあちこちに軍隊を送ったり、爆撃機を飛ばしたり、軍艦を派遣したりして「悪の枢軸」を追いつめるブッシュ政権。米本土ミサイル防衛網を拡大するため、弾道弾迎撃ミサイル制限条約は邪魔とばかりにロシアに破棄通告、地球温暖化防止の京都議定書も国益を守るためには紙切れ同然。やりたい放題のパクス・アメリカーナ。新井進さんが本誌表紙のために描いた、ヨロイ、カブトもなしで馬にまたがるローマ皇帝アウレリウスとは雲泥の差。

小泉さんの構造改革から我が身の構造改革まで幅広い改革論二十七編が本号の特集に寄せられました。これまで寄稿の早い順に掲載してきましたが、今回の特集は編集世話人の独断と偏見でグレイピングし配列してみました。悪しからず。自由テーマは寄稿順のままです。

長年、当クラブ事務局を支えてこられた西川知世さんのご健康をお祈りします。

〔編集世話人〕小島 博志

石川 正達

事務局から

西川 知世

この悠遊九号が会員の皆さまのお手許に届いたころは、事務局の交代も完了していると思います。私事で大変に申し訳なく思いますが、事務局を辞させて頂いたことになりました。昨年五月に突然胸痛が起り、その後異型狭心症と診断を受け、十月に入院と、生活の見直しを余儀なくされました。このたびの悠遊の特集テーマ「構造改革」を私も生活面で実践することになりました。企業OBペンクラブのアルバイトを始めてはや十年になります。私の生活の中で、大きな部分を占めるようになっていきます。主婦のアルバイトとして、楽しく続けさせていただきました。この十年、私の新しい知識、見聞は企業OBペンクラブからと言っても過言ではありません。このような機会を与えていただいたこと、種々の失敗を許していただきながら勤められたことを本当に幸せなことと思っています。この紙面をお借りしまして、深い感謝とともに、企業OBペンクラブのさらなるご発展と会員の皆さまのご健康を心よりお祈り申し上げます。